山岳

第三十四年
第二號

山岳

第三十四年第二號

山岳三十四年第二號目次

		頁
臺灣登山小史	沼井鐵太郎	一
小五臺山登攀	竹中要	一〇九
二つのスキー行	松久義明	一三七
吾妻短スキー行	吉澤一郎	一四七
アレキサンダー・ミッチェル・ケラスに就いて（二）	望月達夫	一五七
机山談山	く・た生	一七三
會務報告		一九一

圖版

白銀に輝く小五臺山　竹中　要　一二六
新雪の小五臺山　〃　一二七
北臺上より東臺を望む　〃　一二四
北臺上より西臺を望む　〃　一二四
北臺上より中臺・南臺を望む　〃　一二四
雄高山より赤石山　松久義明　一四〇
オツタテ峯より大高山西南の突起を望む　〃　一四〇
大高山より岩菅山を望む　〃　一四一
烏帽子岳笠法師岳鞍部より苗場山を望む　〃　一四一
吾妻山莊　吉澤一郎　一四八
家形山より一切經山と五色沼　〃　一四八
中吾妻山及び繼森　吉澤一郎　一四九
天狗岩の祠より西吾妻山　〃　一四九
A・M・ケラス　一六四
ケラス峯及ケラス岩峯の東面　一六五

挿圖

大覇尖山・次高山・桃山概念圖　一〇八
南湖大山・中央尖山附近概念圖　一〇八
新高山・秀姑巒山附近概念圖　一〇八
旅行前に作られた地圖（小五臺山）　一三九
小五台山地圖　一三五
吾妻山國境尾根附近之圖　一五一

附錄

「山岳」第三十四年總目次

臺灣登山小史

沼井鐵太郎

登山史編纂に當つて第一に決めて置かなければならないのは、登山に關する歴史とは如何なるものであるか、或は少くとも登山史を書き下す態度を如何にして置くか、といふ事であるが、今の場合筆者は、臺灣に於ける登山開拓又は探險記錄の年代史的總覽を、登山動機並に業績の變遷更新を念頭に置いて綴つて見て、其の間多少とも記錄事象相互の關係と登山の量的推移並びに登山概念の變化を說明しやうと試みたに過ぎない。

第二に言ふべき事は、殆ど大部分自ら親しく見聞實行してゐない史的材料を整理するに際して、文書其の他に據つた記錄が、確實性又は精密度に於て互に異る爲の取捨解釋の困難である。特に古典的記錄に於て果して山頂に立つたかどうか、又は山を間違へてゐやしないか、恐らく再調査不明不能なものがある。此れ等に就いては出來る限り側面材料からも推測を試みて見たが、なほ不確實不完全たるを免れない。

以上を御ことはりして本文に進む事にする。本文は舊稿の「臺灣登山史」に從つて次の數章に分ける。

一、史前期及び初期探險時代……三頁
二、開拓探險時代……六頁
三、探險登山時代……一五頁
四、近代登山時代……三〇頁

附、臺灣高山探檢の結末……九〇頁

（一）は「臺灣登山史」と同一（二）は其のいふ所の第二期を稱する。（三）は同じ文獻に記した第三期に當る。（四）は其の以後で、舊稿の現代の項に昭和八年以後並に結論としての分を追加した。

文　獻（順序不同）

高頭式「日本山岳誌」（明治三十九年）
大橋捨三郎「新高登山」（大正十一年）
同「次高山」（大正十三年十一月）
武内貞藏「臺灣」（昭和二年十一月改訂版）
楢崎冬花「太魯閣蕃討伐誌」（大正三年十二月）
豐守貢
中曾根武多　「臺灣アルプス」（大正十三年）
沼井鐵太郎「臺灣登山史」（昭和八年臺灣體育協會編『創立十周年記念臺灣體育史』）
山岳隨所
本會々報隨所
臺灣山岳各號
臺灣山岳彙報各號
臺灣山林會報隨所
臺灣時報隨所
其他諸雜誌新聞、官廳文書類

一、史前期及び初期探險時代

臺灣登山史上の史前期は、必然臺灣原住民族高砂族の山岳生活史である。其の傳說にも或は北蕃タイヤル族はパーパックワッカ（大霸尖山）の一角に生れたともいひ、或はツオウ族は太古洪水があつた時パットンクゥン（新高山）の頂に避難して後四散したと稱し、其の他にも山頂、山岳に關した神話口碑が少くない事から察して、彼等が低山・中山は勿論、中央山脈其の他の高山にも關係が深い事は想像に難くない。但し彼等高砂族と雖ども何千年も昔から臺灣の高嶺を征服してゐたとは考へられない。諸家の說を見るに、彼等は最古一千年以前に黑潮に乘つて渡來したものゝ如く、恐らく彼等の內の優秀な種族の壓迫に打ち負けて平野山麓から次第々々に奧地高地に安住の地を求めるやうになつたものもあらうし、更に又近世南方支那民族の移住によつて其の奧地逍行は步を進めたであらう。そして彼等の生活樣式は狩獵時代を去らなかつた。又支那人との平和的交涉も狩獵生產を奬勵する結果に外ならなかつた。山岳は彼等の牧場・工場・農場であり、ハイウェイ（公道）であり、且又スポーツ・スタディアムでもあり、娛樂場でもあつた。從つて臺灣山岳の殆ど總てが彼等の足下にあつたと見ても無理はない。實際今日未踏と思はれる高連山地を步いて見て、案外な所に狩獵小屋があり、又は焚火の跡があり、或は又豫想外に多くの狩獵路其の他の踏跡が山體を縱橫してゐる事を發見する。大霸尖山の如きいづれの側も高級登山技術を要する山のみが彼等の登頂しなかつたものだとも考へられるのである。只然し彼等の登山は明確な登山意識の下に動いたものであつたらうか。否？　又たとひさうであつたとしても、文書記錄を持たない彼等には、文化史的登山記錄の分け前は與へられないのである。

原住民族を除いて文化人の臺灣に於ける最初の登山記錄は、屋崎秀眞氏によれば元の至正九年卽ち今から凡そ六百餘年前に汪大淵といふ支那の一探險家が記した島夷誌略に見えるが、恐らく大屯山（一〇八〇・九米）あたりに登つたのであらうと考へられてゐる（臺灣山岳第二號三頁）。此の登山から明治二十九年臺灣が我が國の領有に歸する迄の間を初期探檢時代とする。此の初期探險時代の登山も史實により推測し得る丈で、未だ考證は多くされてゐない。

然し清朝末期には開山撫蕃の著しい業績があつた。卽ち清の同治十三年（明治七年、西曆一八七四年）浙閩總督沈葆楨の建議に基き「臺灣の東西兩部を連絡する爲兵を南中北の三路より進め中央山脈を横斷して道路を開通する事」を決定し、南・北・中の三路から兵を進めて中央山脈横斷道路の開鑿を實施した。其の南路といふのは西海岸東港から東海岸溪底に出るもので、現在の高雄州潮州郡枋寮から臺東廳大武に出る所謂浸水營越（一四三七米）は其れを修理したものである。光緒元年十二月（明治八年）の開鑿である。北路は西臺灣中部の拔石埔から關門山（三〇五二・四米）により中央山脈を越え再びロンダブン山（二一九四七・六米）に登つて拔子に出るもので、同治十三年三月の開鑿である。現在登山家の間にも關門越として辛うじて名稱のみ知られてゐるに過ぎない廢道であるが、清領時代にも前記浸水營越と共に開鑿後の經營宜しきを得ず荒廢に歸して往來を絕つに至つたといふ。中路は西部臺灣中部の林圯埔（今の竹山）から陳有蘭溪を遡つて八通關に到り大水窟山々腹を横切つて花蓮港廳の璞石閣（今の玉里）に出る最長大な横斷道路で、同治十一年からかゝつて光緒元年十二月の竣工に係り（本誌第三年三號七一頁參照）、現在の八通關越（三二七三米）は大體其の路線に沿ふて上下を少くし平均傾斜を保つやうに大改造されてゐる。八通關越は當時でも蕃地出入の交通は絕たれなかつたし、名山の玉山（新高山の

舊名）を擁してゐるので、道路開拓の指揮官吳光亮の名と共に最も聞え、名聲を近代登山時代迄繼承してゐるのである。

右の道路開鑿に關して丈でも、既に其の三つの峠と、山としては關門山、ロンダブン山が文化人によつて踏破せられ、恐らく又八通關山（三二四二・四米）、大水窟山（三六四四・八米）等も登られたであらうと思はれる。商利の爲には生命を堵しての探險をも辭さない勇猛狡智の支那人が、入蕃を許可されてからどんなに深く蕃地に入り高山大澤を探つたか想像されない事でもない。玉山卽ち今の新高山に、登山記ではないが、之を見る爲に出かけて行つた紀行文や詩篇も殘されてゐるし、又記錄は不明だが、新高山へ文化人としての初登山者も、實は舊清時代の某支那人であるともいはれてゐる。

此の他低山の方では、北部の大屯火山彙が開拓され茶の植栽が始められたのも清領時代であつて、さすれば現代小登山・ハイキングの地、國立公園地として臺北市民の馴染深い此の山々も、既に上記初登に次いで此の時代本島人の父祖達によつて生業の爲に登られてゐた事になる。又、基隆附近の九份山とか金瓜石などの金鑛山が發見されたのは光緒十九年と同二十年（明治二十六、七年）であり、從つて其の頃其の附近の山地が蕃人以外に跋涉された事がわかる。之と共に、かの大峽谷と砂金とで有名なタツキリ溪（タロコ峽）が、少くとも探金目的で跋涉され記錄されてゐる事なども、幣原博士の研究によつて考證する事が出來る（臺灣山岳第七號一頁―幣原垣「臺灣に於ける金山探檢の濫觴」）。

二、開拓探險時代

明治二十九年以來大正二年の登山會發起に到る迄を臺灣登山史上の開拓探險時代とする。此の時代は次の探險時代の前期に屬し、又登山家の登山も萠芽を見出したのではあるが、登山の量的事實は、總督府が臺灣始政以來營々として理蕃に力を盡し、之と共に山岳地方に於ける陸地測量並に自然科學的並に產業調査を冒險的に始めた事が主要な登山動機である事を物語つてゐる。故に開拓探險と稱するのである。

先づ新高山の探險登山が此の時代の筆頭に輝く。然し乍ら臺灣の高連山地に於ける此の時代の最も古い文化史的記錄は、恐らく明治二十九年七月、二十日間に亘つてなされた久留島武彥氏等の南部中央山脈の横斷であつたらう。久留島氏は改隸後卑南（今の臺東）に上陸し、新開園から陸地測量部員の一行と共に溪に沿ふて遡り、一路モリソン主山（今の新高山）を目標に蕃地に入り、遂に一萬何百尺の所を越え蕃薯寮（今の旗山）に出たといふ。故見元了氏によれば、其の溪は新武路溪であり、モリソン主山といふのは關山の間違ひであり、恐らく其の行程は、新武路溪上流の元のカコーサンから本流右岸の急坂をサクサク社に向つて登り、ブルブル社と坑頭社との間を東西に走る支脈の稜線を進んでハイノトーナン山東南斜面を西に向ひ、小關山の東方から雲水山の南に迄迂回して其の鞍部を横斷し、寶來溪源流地に出てタンタン社から又一支脈を越してピーラン社に到り、流れに沿ふて老濃社に下り更に西方の低山性山脈を越えて楠梓仙溪畔の甲仙埔（今の甲仙）に達し其れより蕃薯寮、打鹿埔、關帝廟（今の關廟）を過ぎて臺南に到着したものだらうと憶斷されてゐる（臺灣山岳第五號一二〇—一二二頁—見元了「中央山脈を最初に越えたる人々」）。此の憶說は大體首肯し得られる所であつて、然りとすれば邦

人の臺灣高連山地に於ける第一の記錄は現在登山開拓の最も後れてゐる南部中央山脈地帶で生れたといふ皮肉な事實に面する事になるのである。

偖て新高山（三九五〇・〇米）の探險登山であるが、日本人そして文化人の新高山初登記錄は一般には明治二十九年十一月本多林學博士一行の得たものであると信じられてゐる（大橋氏「新高山」、拙稿「臺灣登山史」等參照）。然し之には反說もある。卽ち本多氏や其の後ステーペル氏や齋藤讓氏の登つたのは臺東新高卽ち東山（トウザン）であつて、嘉義新高卽ち最高峰の主山に始めて登つたのは鳥居龍藏、森丙牛氏等であるといふ（日本山岳誌四八八頁、一戸直藏『新高山ニ關スル研究』七四—七五頁）。又新高山頂探險の試みは明治二十九年九月長野義虎中尉の行が抑々最初である事は間違ひないが、同中尉が果して主山を極めたかどうかは疑問とされてゐる（同上文獻並に臺灣山岳第六號八七頁）。然し乍ら後者の疑問に就いて筆者の臆測を許せば、清朝時代はさてをき、領臺後新高山（主山）の初登は長野中尉が先んじてゐはしまいかと思はれる節が多いのである。卽ち長野中尉の「生蕃地探險談」（臺灣山岳第八號〔昭和十一年六月〕一—二六頁）を熟讀すると、明治二十九年（文獻には年代を附記してないが之に違ひない）九月十六日乃至十月二日の八通關越（璞石閣〔今の玉里〕——林杞埔〔今の竹山〕）の間に八通關から露營一夜を以てモリソン山（新高山）に登頂して登路の樣子や山頂からの展望に關して相當詳しく敍述されてゐる。若し反說のいふやうに、單に八通關附近の一峰か或は東山に登つたものなら、其の敍述が變なものになる。特に山頂から阿里山方面を望んで其の間にも早高峰なしといふ所や、玉山主山（新高主山）の南北に兄山（南山）、弟山（北山）が位してゐるといつてゐる事は、主山からでなければ言へない事である。只現在の主山、南山、北山に相當すると思はれる玉山主山、兄山、弟山の距離目測が逆に話され（記され）てゐるのと、現

在の東山に當るものに就いて殆ど說明が無い事は一寸首肯し兼ねるが、談話速記を種々綜合して考へて見るに、登頂されたのはやはり主山だと推定出來るやうである。登頂の日は實に明治二十九年九月二十八日であつた。

長野中尉は八通關越、新高山登行の直後丹蕃の蕃地に入つて十月二十六日から三十一日迄の六日間かゝつて舊清時代の廢道關門越をなし、氏として二回目、邦人として三回目の中央山脈横斷を果し、花蓮港廳の拔子に出た。職分とはいひ乍ら今日考へても實に大きな探險旅行をされたものである。

右の探險後の一ヶ月にして前記木多博士、齋藤晉作氏の新高山登山があり、此は前記の如く鳥居氏外諸氏の反說があつて、東山に登つたものらしいと信じられてゐる。

明治二十九年には新高山の測量が始まり、同九月一先づ竣成、其の結果富士山より遙かに高い事がわかつたので、明治三十年六月末地圖を印刷に附せんとするに當り　明治天皇陛下より新高山と御改名を賜はつた。

其の後明治年代新高山の探險登山記錄には次の如きものがある。明治三十一年十二月ドイツ人ステーペル氏が外國人として始めて新高山(東山ゥ)に登頂し、翌三十二年十一月には斗六辨務署長熊谷直亮氏、同十二月には齋藤讓氏の登頂(東山ゥ)あり、越えて三十三年四月には前述鳥居龍藏氏は森丙牛氏と共に阿里山から稜線傳ひに新高主山迄初縱走した。勿論此は蕃人を除いて最初といふ事で、新高西山(三五二八・〇米)も其の時通過せられたものと考へられる。なほ森丙牛氏は同三十四年九月七日新高北山(三八三三・〇米)へ最初の探險登山をしたといふ。

明治三十五年には記錄を見ず、翌三十六年から再び毎年探險登山が繰り返された。卽ち同年六月御料局技師秋山謙藏氏の新高山登山があり、同三十七年四月には臨時土地調査局技手高木喜與四氏が登山測量して二萬分一堡

圖を發行する基を得た。越えて翌三十八年の十一月殖產局技師川上瀧彌、福留喜之助氏等八氏は阿里山から縱走して天長節に新高山を極め山頂に半日を費して祝杯を擧げた。本誌第一年二號（明治三十九年六月）以下數號に連載された尾崎白水（秀眞）氏の詳細なる「新高山紀行」はやはり明治三十八年十一月に行はれた登山（大津法學士、藤井判官と同行、北山に登る）を記した樣である。此の行は山に直接職業關係を有せざるアマチュアの趣味的新高登山最初の邦文記錄である。獨人ステーペル氏の記錄文獻は知る由もないが、兎に角趣味的新高登山の嚆矢は、換言すれば臺灣に於ける趣味的登高の始まりであつた。

翌三十九年十月川上瀧彌氏は再び森丙牛氏と同道新高山に登り、森氏は此の際頂上に始めて一小祠を安置した。是れ新高神祠の初めである。同年十一月には岩永淡水稅關長、荒賀斗六廳長一行の登山あり、多分趣味的登山であつたと思はれる。次いで明治四十年十月臺北在住の米國領事アーノルド氏夫妻が登山した。アーノルド夫人を以て新高山而して臺灣高山女性登山の魁（さきがけ）とする。此の他同じ頃藤田組中里、吉田兩氏の登山もあり、同四十一年四月總督府技師丸山佑四郎、同中村十一郎兩氏、同年十二月野呂寧、森丙牛、志田梅太郎氏等登山、後者は正式の蕃地測量實施のトップを切つたもので、阿里山から縱走して陳有蘭溪を下り、其の結果新高山が中央山脈でない事が判明した（本誌第四年一號〔明治四十二年三月〕一三一頁參照）。越えて明治四十二年十月になつて高層氣象觀測隊の一戸直藏、小倉伸吉、大隈鴻一諸氏と植物調査の佐々木舜一氏は陳有蘭溪遡行、八通關、荖濃溪源流經由の既知探險路によつて新高山（主山）に登山し、更に新高北山に於て苦心の上二週間に亘る貴重な觀測を行つた。其の結果は『新高山ニ關スル研究報告』として明治四十三年十一月臺灣總督府民政部通信局から出版されてゐる。此は登山にも關係深い純粹科學探險登山として最も光輝ある業績であつた（臺灣山岳第三號〔昭

和三年七月」一頁――佐々木舜一「新高探險の懐古」參照)。なほ一戸氏等は其の後和社(ボーシャ)溪を遡り阿里山に出て後藤岩(二六六三・〇米、大塔山)に登つた。之と同年十一月志田梅太郎氏は新高山へ登山の上各峰の測量を完成し、主山の標高を一三〇七五尺と定めた。同月出口雄三、中井宗三氏等も新高山に登つて貝類化石の發見をなし、新高山地質研究の第一歩を印した。翌四十五年四月上旬臺灣守備第二聯隊の中村豐吉中尉一行五名は青木集集支廳長外四名の警察官と共に凍雪を踏んで主山を極めた。四月の新高登山は之迄も再三行はれたが、本行の記事によると凍雪上を蕃刀を以てステップを切つたり、約五百尺も滑落した隊員があつて幸ひにも無事だつたりしてゐて、近代登高行が始まる以前にも斯くの如き積雪期の新高山は踏まれてゐた事を知るのである(臺灣山岳彙報第九年「昭和十二年」五〇頁)。

なほ同年七月には英國自然科學博物館の植物學者ダブリュー・プライス氏が登山した。

以上が開拓探險時代に知り得た新高山登山記錄であるが、此の時代の全登山記錄の過半を占めて居り、又、南山は別として新高主山の外に東山や北山も再々登頂された事は面白い。主山へは主として陳有蘭溪經由のコースが登降路に選ばれた。又信仰で開かれた日本内地の古來の名山と比べて、やはり近代日本アルプスと同じやうな山の開き方が見える點も興味深い、そして臺灣高山代表の新高山一つに就いて開山登山の生ひ立ちを見れば、大體臺灣山岳全體の夫れもわかるのである。

此の時代新高山の外の山はどうであつたか。邦人最初の臺灣高連山地入りの三つの記錄は既に當初に記した。之に次いで明治三十年一月末に深堀大尉、原林學士の一行十八名が恐らく嵩萊主山・能高山連峰の中部中央山脈を越えやうとして霧社(ムシャ)からトロック蕃地に入り合歡山附近のミナッケン溪で兇蕃に襲擊され一行全部無殘な横死

を遂げた事件があつた。此の慘害狀況は其の年五月秋元、柿內兩少尉の探險で遭難地點が發見され、更に其の事情は明治三十三年になつて現地再調査の上漸く明かになつたのである。爾來約十年間此の方面の交通は閉されてゐたが、反抗蕃の歸順により漸く探檢の機再來し、先づ明治三十九年十二月初め總督府蕃務主任賀來警視の一行は埔里社から入山して中央山脈に登り、東海岸、木瓜溪地方を望見するの地點に達し、七日無事埔里社に歸着したといふ（本誌第二年一號〔明治四十年三月〕一七七頁）。次いで明治四十年蕃通近藤勝三郎氏は其の筋の命を受け、邦人として只一人、他は蕃人のみの少數で九月十二日埔里發、中央山脈を横斷し、二十八日臺東に出た。斯くて横斷通路の樣子もわかつたので、翌四十一年一月上旬再び賀來警視の十餘名の一隊は南投廳下より入山して兇蕃霧社を無事通過し、分水嶺を越え、十日間の日子を費して臺東廳下の平地に達し、同月二十二日臺北に歸つた。此の行分水嶺からは蕃人嚮導同行を肯んぜず逃げ歸つたので、一行は全く案內人夫無しで横斷を遂行し、又、越えた分水嶺の最高地は海拔一萬六百尺（三二一二米）で、積雪尺餘に達し寒氣强く氷點下十二度に降下したと云ふ（本誌第三年一號〔明治四十一年三月〕一六五頁）。深堀大尉以來の此の中部臺灣中央山脈横斷探險は、久留島氏等の南部臺灣中央山脈横斷と共に、清國人の企て及ばなかつた我が國々力發展の一指標とも見得べく、特に中部中央山脈越は困難な、寧ろ危險な連續探險行であつた。恐らく此の探險が後年能高越道路開鑿の前驅をなすものと認められるであらう。賀來警視一行の越えた所は能高越舊道のあたりと思はれるが、東の方面はどういふコースを通つたのか、一寸臆測が出來ない。

明治四十一年二月伊藤太右衞門氏一行は巒大山（三〇七五・七米、山日記の西巒大山）に森林調査の目的で始めて登つた。又同年十一月志田梅太郎氏一行は新高山登山測量の前に其の東方の大山、大水窟山（三六四四・八

米）初登を記錄した、同じ頃臺灣の北部山地にも注意すべき探險登山があつた。卽ち苗栗廳（ビョウリツ）で組織した探險隊で、野呂寧、森丙牛氏等が加はり、大霸尖山の前衞ともいふべき鹿場大山（ロクヂヨウダイサン）（二六八三・六米）に初登往復し、歸途辛くも蕃害を免れたのである（臺灣山岳第六號六五――七四頁――「鹿場大山探檢談」）。本行は北部高連山地の地理を闡明し、併せて大霸尖山、シルビヤ山（今の次高山（ツギタカヤマ））等の登山に關し豫想を發表し、後來其の豫想が大體に於て正しかつた事を知らしめた特記すべき探險であつた。因に故森丙牛氏は山岳並に蕃人に關する研究者たりしと同時に其の識見、其の行動敬服せざるを得ない登山意識極めて明確なりし登山家であつた。

次に現在臺灣の地元では閑却され或は抹殺されてゐる一つの大きな探險を記したい。其れは前探檢に近接して同じ明治四十一年十二月森丙牛、志田梅太郎、池端警部、鴻農巡査の四氏によつて行はれた南部臺灣中央山脈の探險である（本誌第四年一號〔明治四十二年三月〕一三三頁）。森氏等は野呂寧氏一行の劃期的な新高山登山（既記）に加はつたが、八通關に下山後本隊と別れ、新高山附近中央山脈から南方の關山に亘るセブクン蕃族占據地一帶の地理蕃情を調査する目的で、十二月十一日から二十二日雁（ガ）仁社蕃務官吏駐在所に出る迄幾多の山岳溪谷蕃社の間を探險彷徨し、其の間にシンカン山（三三八一・〇米）と思はれる一峻峰並に關山（クワンザン）（三六六六・七米）を越えてゐるらしい。然し「臺灣登山史」ではシンカン山は昭和五年、關山は明治四十二年の初登としてあり、臺灣の開拓探險登山に貢獻する事大であつた伊藤太右衞門氏の見解によれば、シンカン山は蕃人が祖先の魂が住んでゐると言つて行かないので森氏は引返した、又關山の方ははつきりせず蕃務本署測量員の志田氏が行つたといふ記錄も登頂は不明である、としてゐる（臺灣山岳第六號八八及八九頁）。但し筆者は臺灣在住中嘗て故森丙牛氏の遺稿中に朱線でシンカン山及び關山を登降したしるしを見た事がある。果して眞の登頂をしてゐたかどうかは別

に詮索する事として、兎に角森氏志田氏等の探險は閑却してはならないものと思ふ。

明治四十二年四月志田梅太郎氏等蕃務本署測量員一行關山に登る。前記の如く伊藤氏によれば記錄はあつても山上迄行つたかどうかは不明であるといふが、昔時登山の記念物が昭和五年八木氏等の登頂の際發見されたといふ事は、少くとも其の記念物所在地迄森氏志田氏等の行か又は志田氏等の行があつたものと認めてもよいと思ふ（臺灣山岳第五號一二七頁）。同じく四十二年の十一月には野呂寧氏一行は臺灣最南の雄峰大武山（ダイブサン）（三二三一・八米）に西麓ピュマ社より初登した。昭和四年吉井氏が頂上で發見した野呂氏の名刺手書によれば「本山ハ……生蕃人モ未ダ曾テ登山セシモノナシト云フ卽チ一行ハ登山ノ先導者ナリ」とある（臺灣山岳彙報第三年〔昭和六年〕一五頁）。又同十一月十五日臺北を出發した警務本署警務課長中田直溫氏外六名の一行は集々支廳長淵邊警部外十一名、璞石閣支廳長靑木警部外五名の探險隊と途中より合し、長野中尉以來記錄として第二回の邦人八通關越を逆に陳有蘭溪より先に行ひ、十二月十五日歸府した（臺灣山岳彙報第九年〔昭和十二年〕四九頁）。

右の三つの探險が行はれた明治四十二年の末頃には蕃務本署の創設を見た。一說に臺灣蕃地の高山が登攀せられる（便宜を得る）やうになつたのは其れからの事であるといふ（臺灣山岳彙報第九年四七頁）。然しまだ〳〵當分の間は新高山の外には一般の登山は行はるべくもなかつた。

明治四十三年四月宜蘭廳叭哩沙（バリシヤ）支廳長警部小島仁三郎氏及び宜蘭廳蕃務係長警部坂井時彥氏の一行は、タウサー蕃（現在タウサイ蕃と稱す）探險の爲、七日ピヤナン社出發、南湖大山南面山腹にあるタウサー蕃狩獵小屋に泊、八日南湖大山（三七四〇・七米）を越えてタウサー蕃地に入りブシャウ社を經てカババン社に著泊、爾後各社に宿泊、十七日同經路をピヤナン社に歸著したといふ記錄がある（大正三年五月十六日蕃務本署發行活版印刷

の復命書に據る)。此の史實は殆ど世に知られて居らず、野呂寧氏等の本格的探險登山の赫々たる業績に隱されてゐたが、筆者は溪頭蕃地で蕃通の某警察官から南湖大山初登者は某支廳長の一行であると聞いた事があり、後に小島、坂井兩警部等の復命書(當時以來恐らく祕の書類だつたと思はれる)を見出して、此處に記錄するを得たのである。復命書に據れば少くとも南湖大山北峰(三五八〇米)又は南湖大山東峰(三六〇〇米)は登頂せられたと思惟される。主山は或は登られなかつたかも知れない。といふのは、復命書には南湖大山頂上又は絕頂と書いてあり、又三箇の鼎立したる尖峯より成立するとも記してはあるが、確かに主山登頂だと判定する材料記載がなく、又他方面からの考證推論も今の所筆者には出來ないからである。然し兎に角ピヤナン社から南湖大山の高所を越えてタウサイ溪に下つた同山塊最初の文化史記錄であると思ふ。そして此の行で地理、特にシルビヤ山(今の次高山)は中央山脈でない事を始めて觀察した事は注意すべきである(當時唯一の地圖「北蕃圖」には中央山脈が畢祿山からシルビヤ山に接續するやうに描かれてあつた)。

右の探險と同じ頃(四月)中部臺灣中央山脈横斷あり、地域は不明であるが(本誌第五年二號〔明治四十三年七月〕一四〇頁)、此れは或は野呂寧氏等の關門越であつたかも知れないと想像される。野呂氏等は又其の後トクブン社から霧頭山北方の南部中央山脈を横斷して(知本越?)臺東に出てゐるが(文化人として最初の横斷)、共に年代ははつきりしてゐない(本誌第十年一號〔大正四年九月〕二一頁)。なほ明治時代に中井宗三、出口雄三兩氏が太麻里から大武山に向ひ、北大武山へは行かずに南大武山(二八二二・一米)から寫眞を撮つて引返したとある(臺灣山岳第六號〔昭和七年十一月〕九四頁)のも、年代不明であるが、然しいづれも明治末年の事には違ひない。次に明治四十四年十二月十三日蕃務本署技手財津久平氏は南投廳伊藤警部以下三十四名並にトロック蕃

二十五名と共に櫻ケ峰に於て行動を起し、十五日午前六時三十分合歡山の山腹を縫ふて進み蒿萊主山の鞍部に差懸つたが、太魯閣蕃の襲撃にあつて應戰、蒿萊主山探險の目的を達せずして歸還した（臺灣山岳彙報第九年〔昭和十二年〕五〇——五一頁）。

最後に此の時代の低山行はどうであつたかを附記すれば、臺北近郊の觀音山（六一一・五米）に明治三十七年十月第二日曜に團氏、折平氏外一名が苦力一名を連れて登つた記事が臺灣日日新報に出てゐる。又同月十六日に總務局員の遠足會として七星山（一一一九・五米）登山が行はれた記事も見える。其の頃かうした、今の言葉でいふハイキングの小登山が兎も角も島都近郊に行はれてゐた事が察せられる。又此等大屯火山彙よりも遙かに高い阿里山々塊などは、明治三十九年頃から森林開發伐採事業が始まり、目ぼしい山頂も當然踏跡がついて、明治末期には內地から事業視察の爲の登山者も見えてゐた（本誌第五年一號〔明治四十三年三月〕二一六頁——金平亮三「阿利山登山日記」參照）。

本章を結ぶに當つて「臺灣登山史」の記事正誤をして置く。卽ち南湖大山に野呂寧氏等の登山は大正二年でなくて大正三年であつた。從つて本稿には次の探險登山時代に入れる事にする。

三、探險登山時代

此の時代は臺灣島內に登山會なるものが發起された大正二年と臺灣山岳會が創立された大正十五年とを以て前後を劃するのである。轉變輪廻諸般錯綜の歷史の世界に或る一時代の行を改め終止符を打つ事は、中々異論のある事と思はれるが、筆者は登山に關する有機的團體の發生が社會の登山概念に與へた影響を重要視し、之を以て

區劃の便法としたのである。或は時代の名稱に卽してタロコ蕃討伐終了の大正三四年頃を此の時代の初めの區切りとし、アマチュア登山家の活躍し出した大正十三四年頃を現代との區切りとした方がよいかも知れないが、筆者の態度として上記の如く決めたのである。

此の時代は開拓探險時代の行き方を繼承して次の近代登山時代に接し、且又全日本的並に世界的登山界の動きに支配された、頗る複雜な登山業績多岐に亘る時代であつた。臺灣のみに就いて言へば、此の時代に臺灣高山の多くの峰が探檢及び初登を記錄された。蕃地道路開發の進捗、蕃人の歸順恭順は、アマチュア登山家をして困難と不安なしに入山せしめて行く傾向を次第に增した。本島紹介の下心と一般の登山流行とが自ら合致して行つて、當局は段々と登山以外に目的のない一般人に蕃地卽ち山地を開放して行つた。

偖て臺灣山岳創刊號卷頭言六頁（昭和二年四月）には大正四五年の交臺灣登山會なるものが設けられたと書いてあるが、先づ其の設立年代は誤まりである。本誌第十一年二號（大正五年十二月）二四一頁には「臺北基隆淡水在住の重なる官民紳士は先年當時の民政長官內田嘉吉氏を會長とし登山會を創立し登山の催をなし來れるが……云々」とある。又、臺灣日日新報バックナンバーを繰つて見ると、臺灣の字は附せずしてやはり單に登山會と稱し、其の設立は大正二年九月一日であつた。登山會規約草案は本誌に載せられた規約と幾らか變つたものであつた。發起人は新元鹿之助、中川友次郎、角源泉、山脇春樹、賀來佐賀太郎、三村三平、稻垣長次郎、野呂寧、中山佐之助、飯田章、市來申次郎と記されてゐる。

此の登山會は大正二年十一月二日臺北近郊の觀音山に處女行を試みたのであつた。一行は內田會長以下三十七名。尙當時の會員數は七十三名、會長は內田民政長官、副會長は新元技師、幹事は賀來、野呂、中山、山本新太

郎、小西恭介の五氏であつた。

登山會の第二回登山は翌大正三年十一月二十八日大屯山登りであつた。第三回は不明であるが、第四回は大正五年十月八日、士林(シリン)から徒歩で草山(サウザン)溫泉に到り之より雨中の大屯山に登り北投(ホクト)溫泉に下山、一行は下村長官を筆頭に三十餘名であつた。其の時改正された役員は會長下村宏、副會長新元鹿之助、幹事賀來、野呂、菊池武芳諸氏であつた。

此の登山會の活躍は其の後大正六年四月八日下村會長以下數十名が竹仔湖附近櫻花滿開の勝を探り七星山に登山した事實が傳へられてゐるばかりである。恐らく何等會報を出すでもなく會費を徵するでもなかつた本會は熱心な主腦者が變つてから其の儘自然に消滅したかの觀がある。

然し乍ら登山會の一般社會に與へた感化は直接間接に相當なものであつたらしい。卽ち官僚萬能の殖民地臺灣に於て、總督府の高位高官の主腦者達が自ら陣頭に立つて、近郊の小登山とはいへ、雨中をもめげず怪しげな山徑を傳つて猛進した行ひは、少くとも臺北市民の登高慾を刺戟したに違ひなかつた。

登山會の事はこれ迄として、再び本時代の初めに戻り、先づ臺灣開山理蕃事績中最も顯著なタロコ蕃討伐に關した登山業績を說明するとしやう。タロコ蕃討伐に關する偵察は既に前時代から始められ、低山並に中央山脈前衞の中級山岳(櫻ケ峰の如き)は確保されてゐた。中央山脈其れ自身も既記の如く再三再四試登又は探險橫斷されてゐた。然し本格的のタロコ蕃討伐偵察目的の探險登山が實行され出したのは大正二年からである。

明治四十四年合歡山・蓊萊主山連峰探險では敵蕃出現の爲惜しくも登頂は逸したが、大正二年の春行はれた野呂技師等の合歡山探檢でも暴風雨雪の爲三十名に及ぶ多數の凍死者を出して終に目的を遂げなかつた(其の前に

も野呂技師は合歡山探險登山を企てたが、暴風雨の爲失敗した)。此れは臺灣山岳に於て自然の威力による遭難の嚆矢であらう。愈々タロコ蕃討伐の爲の偵察探險登山計畫が決定したのが大正二年九月十六日で、蕃務本署並に軍部の關係主腦者が協議して合歡山方面及び能高山方面の探檢が同時に行はれる事になつた。合歡山方面探險隊は佐久間臺灣總督の外十數名の幹部、護衛者及び測量員、從者、水谷大尉の指揮する歩兵一中隊を參加員とし、探檢指揮官山本警視以下百數十名の搜索隊、計三百名に近き大編隊であり、又能高山方面探檢隊は荻野少將の外十名餘の幹部及び歩兵一小隊を參加員とし、探險指揮官江口警視以下百餘名の搜索隊であつた。實に我が國古今未曾有の高山探檢大部隊であつた。そして合歡山探險隊の先發隊は九月二十二日埔里社出發、同二十四日櫻ケ峰隘勇分遣所を出でて合歡山南方三キロ標高約二八八五米の地點に根據地を定め、同二十五日野呂技師、財津、齋藤兩技手は分隊長梶原警部補、外巡査・蕃人計百名に護衛されて合歡山(三四一六・一米)及び東合歡山(山日記の合歡山東峰、三四一八米)に到り、タッキリ溪上流の觀察竝に測圖を行つて根據地に歸つた。恐らく眞の登頂も其の時なされたと想像するが、今迄の登山史には大正三年十月となつてゐる。偖て佐久間總督一行の探險隊本隊が合歡山頂上に達したのは大正二年九月二十九日早朝で、其の時天氣晴朗で中央山脈以東、畢祿山、南湖大山附近は望見出來て地形測量をなし得たが、タロコ蕃社は見えない、蕃人は菁萊主山北峰及び北合歡山に登つたら見へるといふので更に兩山頂に登る事として、先づ其の日は根據地に歸著した。かくて總督一行の歸府を見送つた後、探險隊は一箇分隊を根據地守備の爲殘して、十月一日行動を起し、蕃人隊、搜索隊及び軍隊の順序にて寒天の下を進み、午前九時五十分北合歡山(三四二二・〇米)に登頂し展望偵察の目的を果した。此れ同山の文化史的初登である。其の日は福留技師の發聲で天皇陛下の萬歲を三唱し再び合歡山南方の根據地に歸つ

た。次の十月二日又探險隊の大部は大鞍部(合歡山グループと薺萊主山グループとの中央山脈上の接合點)に進んで露營、三日全隊中の蕃人及び警察隊一分隊、軍隊一中隊、(一小隊缺)より成る探險隊(野呂技師を含む)のみ斷崖を攀ぢて薺萊主山と北峰との鞍部に到り、更に急行して午前八時薺萊主山北峰(三六〇五・三米)に達し(文化人初登)、タロコ蕃社望見の目的を遂げて露營地に歸り、四日根據地歸著、以後順次下山した。

而して十月九日偕行社で開かれた探檢隊報告會で、山本警視の報じた要領によれば、合歡山方面の探險は、深堀大尉以來、野呂技師二回、財津技手一回、今回が五回目であり、内タロコ蕃に埔里社附近から通ずる道路(蕃路)には次の四つがある事がわかつた。一、濁水溪に沿ふて合歡山南方の大鞍部に到るもの、二、櫻ケ峰より探險隊の根據地とした地點に到り、同所から大鞍部の南方露營地を經て薺萊主山北峰「カリヤノーミン」に通ずるもの、三、根據地々點より東合歡山の東北を經て屏風山に登り「トボコ」社に通ずるもの、四、根據地々點より東合歡山と合歡山との鞍部及び北合歡山の東北方を經て「セラオカフニ」に通ずるもの。そしてこの各道路の討伐に對する利害をも論及し第四を最も適當とし、之に次ぐものを第三とし、後年發行された五萬分一蕃地々形圖にも大體此等が記載されてゐるが、昭和年代になつて產業・風景開發をも目的として開かれた合歡越道路は略々第四の路線に沿ふてゐるのである。

一方又、能高山及薺萊主山探險隊は、江口指導官以下大正二年九月二十五日埔里社出發、眉溪に一泊後マヘボ社に行つて探險隊の編成を了し、萩野司令官指揮の軍隊を待ち受け、二十九日マヘボ社發、背後の稜線により登り進んだ。約二三四六米の地點に露營の後、三十日能高山九合目に露營、十月一日午前六時半終に能高山(三三四九・〇米)絶頂を極め(文化人初登)、地形觀望測圖を了し、以後中央山脈を北進縱走し、薺萊主山南峰(三三六

〇米）の東方約三一八〇米の地點に露營、翌二日は濃霧の爲滯在、三日快晴に乘じ午前六時出發、嵩萊主山（三五五八・九米）の絶頂に將に到達しやうとした時に敵蕃バトラン蕃約二十名が三四百米の距離に現はれて不逞の擧動を示したので、暫時之を追擊、戰鬪は大局上の觀點より中止して疾歩下山、途中一夜の露營を經て四日マヘボ社に歸著したと報告されてゐる。此の報告によれば嵩萊主山の登頂を惜しい所で逸してゐるやうであるが、種々の點より考察して見ると、其れは嵩萊主山ではなくて嵩萊主山南峰の最高點ではなかつたかと想像される。

山本警視、野呂技師等は合歡山方面探險より歸府後休む暇なく十月十三日能村大尉等と共に臺北發、花蓮港より內タロコを探險し、頭目ハロクの宅に泊つて後方の立霧山に登つて測量したが、蕃情益々不穩になつて來たので適宜處置下山し、事なきを得た。此の行高山又は中級山岳にさへ登らなかつたとはいへ、蕃地山岳地理闡明の上に重要な偵察探險行であつた。

タロコ蕃討伐直前の最後の偵察は翌大正三年四月二十三日乃至五月七日の南湖大山探險であつた。探險隊は野呂、財津、齋藤三氏其他の測量員、竹中大尉、金子警視に前回登山經驗者の小島警部以下二十四名の搜索隊、計三十四名。明治四十三年宜蘭廳の探險とはコースを變へて、二十六日シキクン社據點を發しピヤハウ社蕃人を嚮動として現在の太平山事業地を登りムルロアフ山の山頂（二三二〇米）に到り、之により三星山支脈分水嶺を越えてピヤハウ社に下り、二十八日南湖大山東方直下コッコクに露營、三十日山頂部に達しシールンルウヤン（池）附近に露營、五月一日午前九時南湖大山主山（三七四〇・七米）に登頂、三時間半の間充分に觀測をして露營地に歸り、下山路はピヤナン路を取つてエキジュウ灣迄急行、同所に露營、五月二日ピヤナン社經由シキクン據點に歸著した（本誌第十年三號〔大正五年五月〕六六頁——野呂寧「南湖大山方面探檢記」）。

總體的に見て此の南湖大山探險登山はタロコ蕃討伐直前の豫察行動の粹であつたと共に、北部臺灣の地理を公明にした事で非常な業績であつた。尙野呂氏等の登山の際一行數十名の大部分が猛烈な高山病に犯された事を記載し、登山生理學の臺灣に於ける明確な最初のデータを提供してゐる。

南湖大山探險登山も濟んだので愈々本格的のタロコ蕃討伐が始まつた。先づ軍隊は西より中央山脈を越えてタロコに攻め入り、警察隊は東海岸より討伐する手筈となり、大正三年五月十三日歩兵二箇聯隊、山砲兵、重砲兵より成る軍隊が行動を開始した。佐久間總督は自ら司令官として合歡山に進み、次いでクッキリ溪々谷に軍を進めたが、軍隊の中央山脈通過箇所は、北から數へて、畢祿山南鞍部(俗稱畢祿鞍部)、今の合歡越道路附近、蕃地々形圖に記された屏風山(三二四八・四米)・壽萊主山北峰間通過のコース、壽萊主山北峰より東北のコース、壽萊主山南峰方面から太魯閣大山支脈の方面等數ケ所に及んでゐる。討伐は八月六日で豫定の行動を了したが、何せ聯隊旗が三千米を越える高地に飜つたのは日本戰史未曾有の事であり、又本邦高山地帶の戰時行動としても佐々成政の針木峠越に次ぎ、更に之よりも大規模な近代戰として誠に日本歷史上に於ても特記すべき事績である。此の討伐中登られた山頂は行動範圍内のものは全部でなかつたらうかと想像される(武内貞藏『臺灣』昭和二年十一月改訂版八六四——八六七頁、楢崎冬花『太魯閣蕃討伐誌』大正三年十二月)。「臺灣登山史」には以上のタロコ蕃討伐登山に就いては書き落してゐる。

斯くて北蕃の占據地域平定はタロコ蕃討伐で一段落を告げたので、愈々大正四年六月から九月に亘り搜索隊を編成して面積百十六方里に及ぶ測量登山に成功した。登山された主要部は次高山彙である。先づ大正四年六月十七日竹内警部の一行によつて大甲溪方面から大雪山(ダイセツザン)(三六〇〇・〇米)の初登が記錄された。其の時又は其の直

後蕃務本署の齋藤武彦氏が登山測量をしたもののやうである。次いで同年七月財津久平氏一行はピヤナン社よりピヤナン鞍部（當時命名）を越えキヤワン溪から東山稜を傳つて次高山（三八八四米）に初登頂した。次高山は當時なほシルビヤ山の舊名で呼ばれてゐた。

大正五年になると先づ二月に南投廳の探險隊が秀姑巒山、東郡大山、東巒大山方面の地形及蕃路を探査したが寒氣と積雪の爲登頂は果さなかつた（臺灣山岳彙報第十年〔昭和十三年〕二頁）。

次いで五月次高山・大雪山々稜と大甲溪々谷を挾む白姑大山（三三四〇・〇米）の初登頂が臼井氏等陸地測量部員によつてなされた。同じ年に佐藤善吉氏一行は關門山（三〇五二・四米）に登り、鋼島政吉氏一行は小雪山（三〇四三・三米）に初登した。又清水山（二四〇七・三米）も此の年の頃に陸地測量部員に初登されたといふ。

なほ此の年の六月に財津氏、伊藤太右衛門氏等は北方より稜線を傳つて大覇尖山（三五七三・三米）を探險し、小覇尖山（三三六〇米）には登頂したが、本體の巨岩塊は周圍を廻つた丈で、一行中の警察官石田貞助氏が單身南東稜を攀ぢてオーヴァハンギング・ロックの下に達した迄の事であつた。

大正六年十二月能高越の警察道路開鑿隊員一行により能高山南峰（三三三三・三米）が探險登山された。尤も其の前に中井宗三氏が登つたかも知れぬといふ一の考證がある。此の年の上半期頃かと思はれるが、野呂寧氏は「臺灣の高山」と題し臺灣高山表を本誌上に發表せられてゐる（本誌第十一年三號〔大正六年九月〕一六九頁）。之によれば一萬三千尺以上一座、一萬二千尺以上七座（累計八座）、一萬千尺以上十九座（累計二十七座）、一萬尺以上二十一座（累計四十八座）、九千尺以上十七座（累計六十五座）、八千尺以上二十四座（累計八十九座）、七千尺以上二十六座（累計百十五座）を數へ、今日でも「一萬尺以上の高山四十八座」と人口に膾炙してゐるのは野呂氏

の公表が基であらうと思はれる。後年筆者の計算した所では一萬尺以上(三〇三〇米以上)は少くとも百三十座はあり、昭和十三年度の山日記には百三座の山名が數へられてゐる。山の高さに因んで想起するのは富士山と南湖大山の背競べ論と測量結果の推移である。大正四年九月發行の本誌第十年一月には野呂氏が「臺灣の山岳」を書き、富士山を南湖大山よりも低いとしたに對し、同年十二月發行の本誌第十年二號には高頭氏が「富嶽は臺灣の南湖大山よりも高し」と反駁論を書き、次いで野呂氏が臺灣高山表を發表するや(前記)、一目南湖大山は富士山よりも高度優位を示した。爾來此の論も止み舊地最高峰は廣義の臺灣高山第五位以下にとゞまる事久しかつたが、極く最近陸地測量部の測量による南湖大山の眞高三七四〇・七米が發表せられて、高度順位が又々逆になる事になつた。

餘談は偖てをき大正七年になつて登山記錄は初登こそ無かつたが、新高山に臺灣新聞社の主催で四月下旬登山會が催された。其れは陳有蘭溪から登り阿里山に出た格別新しい記錄でも無かつたが、歸後登山紀行を紙上に掲載し世の好奇心と登山熱を促した事は非常なものであつた。登山中一行の內の二名が積雪に足を辷らせて負傷した事件も含まれてゐる(本誌第十二年二・三號「大正七年七月」一六〇頁—關口氏通信參照)。次いで同年十月米國アーノルド・アルボレタム森林樹木學者ウキルソン氏の來臺を機として金平亮三、永山止米郎、佐々木舜一、柳田由藏、山下新二氏等が同行し、阿里山から蕃路を傳つて新高山に登行した。此れは調査研究登山であつたが、登頂の際は新雪の危險を冒して登山した事が記されてゐる(臺灣山岳第三號「昭和三年七月」一頁—佐々木舜一「新高探檢の懷古」)。此の年(又は六年?)阿緱(アコウ)廳登山隊は高雄、屏東(當時阿緱と稱す)官民有志を以て組織し大武山に第二回目の登山を行つた。又此れは登山ではないが、能高越嶺道(三三〇八米)は前年十月十一日に起工し

此の年の三月二十四日に竣工した。當時本會々員關口泰氏は早くも同年十月此の峠により西から東に中央山脈を横斷した(本誌第十三年二號〔大正八年四月〕一四二頁)。それから低山では同年二月二十一日に臺北高等女學校生徒三百名が大屯登山を行つた事が知られてゐるが、之も臺灣でなければ見られない大々的の近郊大衆登山の古い記錄の一つであらう。

大正八年には又注意すべき探險登山が行はれた。卽ち先づ四月に井澤警視一行の第二回次高山探險登山があり、次いで日月潭水電工事に關係の深い濁水溪水源の治水調査探險で、未知の中部中央山脈が探られた事である。季節は九月下旬から十一月上旬に涉り、山崎嘉夫、大石浩、古川良雄、黑澤愼介、市川雄一、朝日藤太夫、財津久平、久布白兼治諸氏の森林、地形、地質、測地、水力、治水各方面の共同調査探險隊である。初登された高山は安東軍山(アントングンザン)(三〇八八・八米)、白石山(ハクセキザン)(三一三七・六米)等であり、又能高山南峰、能高山と北に縱走して能高越を霧社に向つて下りたものゝ如く、又別に薈萊主山南峰、合歡瀧から合歡山・薈萊主山北峰連脈も登られたやうである(大正九年三月二十日臺灣總督府營林局發行『濁水溪上流地域治水森林調査書』參照)。なほ安東軍山の初登は大正三年以後上記の行に先立つて陸地測量部員によつて行はれたかも知れないといふ說がある。同樣に又薈萊主山は旣に明治末期から以來屢々試みられて登頂に失敗し、大正五年から九年迄の間陸地測量部員によつて登頂されたといふ說と、大正九年から十三年迄の間にされたといふ說と、其の前に野呂氏が登つたといふ說とがあつて、明瞭ではない。

大正九年明瞭な初登の山は、六月山崎嘉夫、伊藤太右衞門氏等によるバトッノフ山(三二一一米)、七月同氏によるタロコ大山(三二八一・九米)であつた。此の內バトッノフ山は太平山から稜線傳ひに南湖大山に登るコー

ス中に登られたのである。なほ本會々員濱谷泰次郎氏は同年五月能高越を越え「臺灣中央山脈横斷記」を發表されてゐる（本誌第十五年二號「大正九年十一月」一三頁）。

大正十年に於ける初登の山は大石浩氏一行による桃山（三三二三・六米）一つであつたが、此の他新高山には宇野警視一行が八月に登山した事が知られてゐる。同十一年にも初登の山は山下新二氏一行の三月に於ける卓社大山（三三四三・三米）一つであつて、此の他には同四月大石浩氏一行の森林調査目的の次高山登山があり、伊藤太右衛門氏の治卯山（二九一五・七米、初登？）から巒大山（三〇七五・七米、西巒大山）迄の登山があり、七月治水調査隊並に佐々木舜一氏等の南湖大山及び太平山、三星山（二三五一・四米）、カラ山等の踏査があつた。新高山へは八通關越道路の完成によつても早其の最上部を除いては探險的で無くなり、七月大橋捨三郎氏父子、同じ頃臺灣新聞社主催の第二回登山會（十八名）、十月集々在鄕軍人分會員三十餘名、十一月臺南・嘉義・臺北の有志八名の登山、といふ樣に登山一般化の匂が高くなつて來た。總じて大正十・十一年頃は登山史上の一の區劃と見る事が出來るのであつて、其の理由は第一にタロコ蕃討伐後既に數年を經過し漸次蕃情は平定して行つても早蕃地觀念に恐怖の百分率は激減した事、次に大正十年ピヤナン越道路の完成と共に上記八通關越新道路によつて從來の如き陳有蘭溪遡行の困難は無くなり、之によつて臺灣代表の新高山は一般人にも登山が容易になり名山化するに至つた事、大橋氏や新聞社其の他で趣味的登山の鼓吹或は精神作興の爲の登山といつた風潮の流行が盛になつた事、臺北近郊に於ても大正九年二月二十八日臺北高女五百五十名の多數が大屯登山をしたり、同年（？）八月二日道友會などいふ會が觀音山に一泊登山したりして、一般に新聞に書き立てもしない位大屯火山彙の表山や親指山、新店溪方面の小登山やハイキングが流行して來た事、そして又內地登山界では日本アルプスの夏山探

險時代は殆ど全く終局を告げ、上越・奥羽・北海道其の他に登山家の焦點の一が結ばれ實地探査されると共に冬山・溪谷・岩場の遊技的探險時代が漸く本格的に來り、尙海外登山遠征が眞面目に實際的に考へられ、學生登山家群の質的量的の登山界支配が顯著となつて來た實情に動かされて臺灣の斯界にもアマチュアリズムが澎湃として起つて來た事等である。

即ち大正十二年になると初登の山こそ小林勇夫氏等の二月に於ける南面山（二八四〇・〇米）調査探險の外記錄を見出し得ないが、先づ新高山には四月臺灣歩兵第二聯隊の將校以下五十名阿里山から登り、次いで七月臺南新報社主催で七十名を突破した大衆登山が行はれ（豐守貢、中曾根武多『臺灣アルプス』參照）、同期玉里（タマザト）方面からも二十名からなる團體登山あり、又十月には見元了氏等五名の組は集々口から登山して玉里に下る。斯くて新日本の名山新高山は益々大衆的に呼びかけられ、又多くのアマチュア登山家が夏季休暇を利用して登山するので、夏季の所謂登山期なる季節觀念を生むやうになつた。次に帝國第二峰の次高山には、同年七月伊藤太右衛門氏一行の治水調査隊の登山あり、其のコースとして始めて現在登山正路なるシカヤウ社からスカイラン溪及びシカヤウ大山（三三六三・三米、初登）を經てする南東側をとつたのである。之に續いて八月には高橋春吉氏も地質調査の目的で同方面から次高山に登山した。次いで新竹州大湖郡管内モギリから次高山への登路探險並に登山が、九月、十月及同月下旬の都合三回行はれ、第一及第三回は大安溪源流地の溪谷と山稜（支脈）を上下しつゝ進んで次高山絶頂を極め、第二回は大覇尖山との最低鞍部から主稜を南に縱走して登頂しやうとしたが、次高山北角（探險隊は斯く稱するも恐らく現在ムトロップ山又はシミタとして知られた嶮山であらう）の絶頂から二町手前で登攀不可能となつて次高山行を中止した。此の事實は大覇尖山・次高山縱走の最初の試みとして注意すべきもので

ある。大湖郡からの次高山登頂者は中間警部、神崎警部補其の他の警察官、警丁及び蕃人であつた。此の次高山は大正十二年四月二十九日臺灣總督府告示「本日皇太子殿下ヨリ臺灣第二ノ高山シルビヤヲ次高山ト稱スベキ旨御沙汰セラレタリ」によつて、現在の正名が定つたのである。

大正も十三年になると更に臺灣登山界にアマチュア業績が華々しくなつた。卽ち此の年八通關・新高主山間の登山道路が完成されたので新高山登山は頗る容易となり、登山者の數も二百六十一名の多きに達した。次高山にもアマチュアとして最初に大橋捨三郎氏がシカヤウから夏季登山を果し、直後同氏は記文を發表して次高山の趣味的登山を奬勵した（本誌第二十二年三號「昭和三年四月」四七頁—大橋捨三郎「次高山に就て」）。一方此の年の初登の山は、三月山下新二氏一行によるカンタバン山（三二八一・三米）、十一月大石浩氏一行によるカシパナン山（三二九三・六米）、十二月大石氏等による秀姑巒山（シユウコランザン）（三八三三・三米）及び一說に確實な初登と稱せられる陸地測量部員の嵩萊主山南峰の登頂がある。尙大石氏は十一月丹大山（三三七〇・九米）の殆ど絕頂近く迄登つた。又大武山へ第三回目の登山として三月高雄・屏東・嘉義其の他から計十七名の下パイワン社からの行があり、其の直後伊藤太右衞門氏も大武山に登つた。

大正十四年になると、新高山は蕃情が一時不安だつたので夏季の登山者は百七八十名に減じてゐるが、登山熱は益々高くなつてゐて、女性の團體登山迄行はれるに至つた。其れは彰化高女の一隊である。又同年十二月末に元本會々員杉本良氏は降雪中の新高山に登頂して、後年其の紀行を『臺北十二箇月』といふ小冊子に發表されてゐる。又次高山は七月に始めて學生團體登山を迎えた。新沼敎官をリーダーとする臺北一中生徒の登山隊である。此の年蘇澳・花蓮港間の大斷崖にも新たに自動車道路が開鑿されて東臺灣への安全な近道、そしてタロコ峽・

合歡越開發の前奏曲となつた。道路は當時花宜道路又は蘇花道路と稱し、今日は臨海道路で通つてゐる。なほ此の年四月陸地測量部三角科の發表により、能高越各地の海拔高が訂正された事は、美と共に眞を求める近代登山家の注意を著しくひいたのであつた（本誌第二十二年二號〔大正十五年八月〕九三頁—「臺灣花蓮港埔里間の水準測量に就て」）。

越えて大正十五年になると、前年見なかつた初登記錄が三つ數へられる。卽ち九月伊藤太右衞門氏一行のウラモン山（三八〇六・一米、舊誤稱マボラス山）、十月高野鋼治氏一行の東郡大山（ヒガシグンタイザン）（三二六〇四・五米）、同月吉井隆成氏一行の郡大山（三二九二・四米）、いづれも官憲の調査探險登山であつた。然るに山に直接職業關係を持たない一般人並に登山家の實績も此の年は更に上つて、先づ新高山は八月迄の登山者數四百五十名、年度計五百六十三名を算し、其の登山は益々民衆化して、たとへば臺北の安岡德之助氏の如きは家族連れで登り、其の內には八歲の男子があつたと新聞紙上で喧傳された。臺北第一及第二高女の登山隊が臺灣日日新報社の後援で新高山に登り、歸北後登山實況の活動寫眞映寫と共に、一行中の女學生が交る〳〵感想を述べる會が開かれたりして、ジヤーナリズムの登山啓蒙が特に目立つてゐた。マラソン登山が試みられたり、在鄕軍人會員の强行登山が實行されたのも此のシーズンからであつた。なほ登山記錄の上で新高山に於ける新業績は此の年二つを數へる。卽ち一は五月本會々員北田正三氏外學生二名の組が阿里山から鹿林山に到つたが天候不良の爲其のまゝ進む能はずして却つて沙里仙溪の未踏地を下降し、再び東埔より八通關を經て新高北山、主山、東山を逐次登頂し東山東稜を下降して八通關に出た行である（本誌第二十二年三號〔昭和三年四月〕一頁—北田正三「阿山より新高東山へ」）。北田氏は自ら東山へ初登と記したが、此れは本登山史の示すが如く誤認であつた。然し登山界にあらはれた新高東

山の登山家最初の記錄であり、沙里仙溪の探險行と共に正に臺灣登山界の近代化に關する好刺戟であつた。又、上海存住の英人ジヤクソン氏は八通關に一週間の滯在中、一警察官と共に陳有蘭溪源頭の金門峒の絶勝を探り、其の歸途別方面から崩石の危險甚だしい岩登りを敢行した（臺灣山岳第二號〔昭和二年九月〕二八頁—越村長次抄譯「金門峒探險記」）。之も臺灣登山界近代の黎明を破る最も注意すべき山行の一であつた。

又、此れは次の章に或は書かるべき項であらうが、阿里山・新高山間の登山道路が十一月に完成し、先づ臺南州知事喜多氏の一行が正式の開通を行つた。尙又前記の如く九月ウラモン山初登を記錄した伊藤氏一行は、其れに到る迄に新高主山・東山及び秀姑巒山を踏破してゐる。又既に大正五年に初登され、後伊藤太右衞門氏にも登られた（年代不詳につき前掲せず）ハツク大山へ臺灣日日新報社一行の中曾根武多氏等は十月八仙山から進んで惜しくも頂上を逸した。又南湖大山へは七月臺北一中職員生徒並に生駒高常氏がアマチュアの團體登山として最初に記錄し、且つ生駒氏は嘗て野呂技師が天下の絶勝と激賞した同山の自然美を近代登山家の立場から再認强調して世に報じた。登山のコースはエキジウ溪より登りピヤナン鞍部へ出たものである。之に次いで行はれた南湖大山登山は、十一月臺北州蕃地産業調査隊の瀨野尾寧、大橋準一郎、平澤貔一郎氏等の大がかりな探險行である。コースはエキジウ溪より登り、下山はムルロアフ方面に取つて太平山事業地に下るを得たが「臺灣登山史」並に「臺灣登山界の概觀」（本誌第二十二年三號一一四頁）の拙稿に人跡未踏と記したのは誤りであつて、既記の如く大正九年に逆コースが歩かれてゐるのである。なほ次高山へは當時臺北高校學生だつた本會會員鹿野忠雄氏が同じ臺北高校山岳部の秋永肇、西尾善夫兩氏と共に夏季シカヤウから登降してゐる（本誌第二十二年三號〔昭和三年四月〕二六頁—鹿野忠雄「次高山（シルヴィヤ山）」）。

四、近代登山時代

此の時代は大正十五年十一月臺灣山岳會創立より現在に至るものであつて、實際上殆ど昭和年代に包含されてゐるものである。先づ時代の有機的境界線を引いた臺灣山岳會の創立と其の成長に就て述べ、並に其の他の登山團體に就ても附言する事とする。

前期末に於ける一般登山者の增加によつて臺灣にも山に登り且つ山を語り合ふ心が人々の間に强く動きつゝある事が看取せられ、大正十五年の初め頃から山岳會設立の話が有志の間に交されてゐた。終に機熟して同年八月二十七日總督府文教課長室で發起人會を開き、生駒高常、杉本良、小林光政、若槻道隆、田中七三郎、中曾根武多の諸氏並に筆者が會合して山岳會設立に關する大體案を練つた。其の後種々の事情で創立がのび〳〵になつてゐたが、終に十一月八日文書課長室で創立委員會を開き、生駒、小林、中田秀造、大石浩、齋藤齋、田中、中曾根の諸氏並に筆者が集つて規則其の他の要項を決定し、後直ちに「臺灣山岳會設立趣意書」を各方面に配布して其の反應を待つた。斯くして立所に八十名餘の熱心な入會者を得、又同時に會長に總務長官後藤文夫氏、副會長に交通局總長木下信氏並に臺灣日日新報社長井村大吉氏を推戴した所いづれも快諾を得た。次いで十一月十九日幹事會を開き、生駒、小林、中田、中曾根、大石、齋藤、杉本、田中、若槻氏等及び筆者の創立委員の外に淺野、石川、市川雄一、蒲田、見元了、新沼佐助、足崎秀眞、大橋捨三郎、大橋準一郎、佐々木舜一諸氏を共に幹事に推し、生駒氏會の代表者となつて、玆に新生臺灣山岳會の組織が成つた。そして十二月五日臺北近郊の名山觀音山に發會式記念登山を行つた（臺灣山岳創刊號卷頭、本誌第二十二年三號〔昭和三年四月〕一一四頁）。此の發會

式登山の日を以て創立記念日とする向も少くないが、其れは會の公開行事の嚆矢たるものであつて、眞の創立の日は設立趣意書に明記された十一月八日とすべきものと思ふ。此の事は「社團法人臺灣山岳會創立十周年經過報告」にも是認されてゐる（臺灣山岳第九號〔昭和十三年二月〕九頁）。

臺灣山岳會が創立以來大正十四年四月迄にした事業の主なるものを總括して見ると次の如くである。

一、會誌「臺灣山岳」、第十號迄發行す。

二、機關誌「臺灣山岳彙報」（月刊）、第十一年に至る。

三、新高登山地圖、昭和八年七月發行。

四、臺灣山岳寫眞集其の他臨時出版物數種あり。

五、山名正誤、登山施設等につき當局へ建議し、或は國立公園關係の諸會に代表者が參加した事も度々であつた。

六、講演會及展覽會、毎年一回乃至三回擧行。

七、山岳關係展覽會其の他の外部の會を屢々後援、出品又は宣傳した。

八、月例懇談會、創立以來百回に垂んとす。

九、山の夕べ、昭和七年以降毎年夏季登山期前に開催、一般公開。

十、山の相談所、昭和九年以來毎年開催。

十一、臺北近郊月例登山、百二十數回擧行、今年より週例ハイキングを別途擧行。

臺中其の他各支部でも時々月例登山を擧行した。

十二、高連山地登山（夏・冬季を主とする會主催の所謂大登山）、約六十回に達す。
十三、登山新境地の探索紹介、前記會主催又は會員有志により幾多の新方面を世に紹介する事に努力した。
十四、登山講習會、主として岩登講習會を再三開催した。
十五、山小屋建設、昭和八年六月大屯山に振衣亭、昭和九年十二月南湖大山に南湖山莊及び寄歴亭を建設した。
十五、以上の外、サンドスキー場調査及び指導、國立公園地登山調査、內外質疑應答、內地及外國よりの登山家に助言及共同登山等の業績あり。

臺灣山岳會の會員數は昭和二年二月には一六六名だつたが、次第に增加して昭和十一年末には三〇三名を算するに至り、以後三百名を上下し、最近又增加の傾向が見える。そして創立當時の臺灣山岳會の幹部は、山岳關係官廳及び學校の實際上の權威者、著名の登山家及び新開界の熱心な後援者から成つてゐたが、其の後漸次登山家の割合が增加して行つた。會の指導中心も初めは生駒氏を筆頭に杉本氏、中曾根氏及び筆者等であつたが、年と共に中心地所在の人も變り、昭和十年迄一貫したのは不肖筆者のみであつた。其の間會務遂行發展の上に會の役員並に特志會員の功績は登山其のものの赫々たる業績と等しいものであつたが、特に實務の中心圈內にあつた故見元了、大橋準一郎、千々岩助太郎、平澤龜一郎、木田文治、井上一男、財津源吉、越村長次、田口與四郎諸氏の努力を多とせねばならない。昭和十一年から大橋準一郎、千々岩、平澤三氏の共力中心時代が續いたが、昭和十四年からは組織の大變更と共に指導中心は谷河梅人氏等臺灣日日新報社關係者に移つたかの如く見える。

臺灣山岳會の外にも此の時代には登山團體の會が若干生れた。昭和八年頃臺北市內に發生した趣味登山會とい

ふのが最も大きく且つ繼續して居る。此の會はハイキングから出發して同好者が集つたやうに見受けられ、初めは臺灣登山界に殆ど何等のモーチヴ・フォースも持たなかつたが、會員も數十名となり昭和九年頃から高連山地にも業績を記錄して登山史實の分野を幾分か受け持つに至つた。同會では臺灣山岳會の彙報と同じやうな月刊印刷物を發行してゐる。然し其の會よりも古く健實な強力な歩みを續けてゐたのは臺灣銀行内の和樂路會である。但し此の會では特に會誌を發行するでもなく、又中心人物は多く臺灣山岳會に入會して或は幹部となるものもあり、從つて會員の新業績は少からずあつても和樂路會の名は聞えてゐない。寧ろ鐵道部同好會山岳部の方が昭和六年次高山・大霸尖山の逆コース初縱走を行つて以來現在も職掌柄旅行及登山界に名と實を得てゐる。此の他官民各方面で同樣な團體は遞信部交友會山岳部、臺北郵便局内の北郵山岳部、專賣局内の養氣倶樂部陸上部、同局南門工場山岳部、同煙草工場向陽會山岳部、BBS山岳會等が數へられる。

學校山岳部の内では、嘗ては臺灣山岳會創立前から常に新方面の團體登山を實行してゐた臺北一中山岳部が獨り氣を吐いてゐたが、其の後臺北高等學校山岳部の勃興があり、今日迄近代登山時代を通じて見れば此の部が善きリーダー（學校職員側）を得て臺灣學生登山界のナンバー・ワンであらう。之に劣らず新時代に活躍してゐるのは矢張り善きリーダーを持つた臺北工業學校山岳部である。又嘗ては同じ意味で臺北商業學校山岳部も活躍した。臺南高工山岳部も昭和八年頃華々しく生れ地の理を得て南部の高嶺に活躍した事もあつたが、最近は聞えてゐない。以上はいづれも記錄的な業績を何等か殘してゐる學校山岳部であるが、内地學生登山界の絢爛たる指導的立場から見ると、臺灣登山界全體がさうであるやうに、甚だ活氣に乏しいのである。臺北二中、臺北一女、同三女、臺中、新竹、嘉義、彰化、臺南、高雄、花蓮港、基隆等各地の男女の中等學校も夏季休暇には登山隊を編

成して新高山、合歡越、ピヤナン越、能高越等に登るが、其れは恐らく九分九厘まで登山史上の量的記載たるにとゞまつてゐるやうである。

以上臺灣山岳會を主とした登山諸團體に就いて相當頁を費したのは、近代登山時代に於ける登山者分野の變遷に照應するからである。卽ち量的に臺灣山岳會其の他の登山團體の登山實績が激增すると共に、質的卽ち記錄的にも山を職業の對象としない登山家の飛躍を見てゐる時代である。換言すれば初登の記錄は此の時代に到つて始めて官憲又は學術調査以外の純粹登山を目的とする人々によつて樹立されるやうになつた。特に大覇尖山の初登頂が本時代當初に臺灣山岳會の手で成就され、其れが眞に人類としての初登であつた事は、臺灣に於ける登山意識の著しい高揚を來した劃期的な原動力となつた。斯くて臺灣に於て其の後に來る登山傾向は、文化記錄として尙未知の他の高山に對して開路的初登を促すと共に、逸早くも山の困難なる方面の初登攀に自力挺身すべく勇氣と野心を一般登山家に與へる動機ともなつた。實際又、官憲側を主とした未踏峰の登頂調査記錄は昭和五・六年で大體終局を告げ、一方登山家は或は中央尖山に、或は大覇尖山・次高山の本邦無双の高連山脈に、或は其の他の高峰又は山脈に初登を文化的に又は眞に記錄し、更に內地登山界の趨勢と同じく自らの計畫、自らの判斷、自らの技術を尊重し實行すると共に、頑迷なる蕃地概念と據つて來る人爲的登山困難を次第に改善克服しつゝ大小高低あらゆる登山に道無き道を求め、無案內無人夫及びビヴァックの試練、岩登、遡溪そして冬山の新分野に從事するを重しとするに至つた。其れ等昭和年代に於ける登山記錄者の內重要部分を占めるものは、官憲探險隊と雖ども多くは臺灣山岳會々員であり、同會及び會員に關する業績が臺灣登山界總決算上の最優位を占めてゐる事實は否定出來ない。

而して本時代も前時代と同じく次の時代に主要事項となるべき事例を既に少からず見るのである。道路開通、登山設備の發達、そして國立公園化に伴ふ新しき意味の大衆登山、卽ち登山家ならざる一般國民の常識的登山の增量が其れである。此れは一面に於て高連山地行のハイキング化に等しい。勿論內地と違つて未踏地の數多く殘つてゐる臺灣であるから、此處暫らくの間は登山家の新記錄は重ねられて行くであらう。然し本時代に終止符を打つのも先が見えて來た事は、最近臺灣山岳會の如き指導的立場にある者の行き方が異つて來た事によつても推量される、と筆者は考へるのである。

本章の序文概說的な記述は以上にとゞめて置いて、之から逐年節を分けて主として登山の質的業績を展望して行かうと思ふ。

昭和二年

昭和年代筆頭に揭ぐべきは、登山といふよりも寧ろ臺灣に珍しい二つの山湖の新發見及び初踏査である。其の一は北絲圈溪流域森林調査の爲入山した吉井隆成氏等が、二月七日卑南主山の南方海拔八千五百尺(二五七五米)の北點に發見した地圖に無記名の周圍約一里の山湖で、當日は大正天皇御大葬當日だつたので湖畔に露營し之を遙拜ノ池と命名したのである。他は蕃地々形圖には早くから記載されてゐたが、內地人として未だ見極めてゐなかつたと稱するバユ湖で、此の年の春伊藤太右門氏等が知本溪及び大南溪流域森林調査の際始めて湖畔に露營した。位置は知本主山の北、アヲウラ山の南の中央山脈上で、海拔六千五百尺(一九六九米)、大いさは前者よりも小さい(臺灣山岳第五號〔昭和五年九月〕附錄一六三頁「臺灣高山上の三大湖」)。

登山としては、大正十五年十二月――昭和二年一月の冬季休暇は諒闇中だつたので一般登山家は登山を遠慮し、臺灣山岳會發會早々にも拘らず何も行事は無く、有志の催しも無かつた。然し專門職業山岳家の調査登山は次々と行はれ、二月殖産局三角測量班のハック大山登山あり、三月吉井隆成氏等は南湖大山東峰（三二六〇〇米）から東走する支脈を探査してマビーサン山（三二〇九・四米）の初登を記錄し、又同月大石浩氏一行は南澳蕃地ピヤハウ社からのコースを通つて南湖大山に登つた。南湖大山の早春積雪期登山としては最初のものである。

右の三つの登山主腦者は臺灣山岳會員ではあつたが、其の登山動機は所謂純粹登山から出發したものでは無かつた。純粹登山家の本時代高連山地に於ける活躍は、七月になつてから火蓋を切つた。先づ臺北高校の學生西尾、國分、森脇三氏はチンシボ方面から入つて大覇尖山の岩塔に到り、南西稜に近き南面のチムニーを登つて岩塔の中段迄出たが其の上の直壁に沮まれて辛うじてアブザイレンして下り、小覇尖山の登頂だけで引返した。それから間もなく別の組によつて大覇尖山が初登頂されたのである。

七月三十一日臺北を發した臺灣山岳會の本隊は、新竹及び檜山駐在所で勢揃ひをしてから蕃路に入り、イザワ山（三三四一・八米、此の山は既に大正五年初登通過された）を經て大覇尖山巨岩塔の西麓に八月三日露營、同日西側を廻つて偵察、同四日小覇尖山頂から再偵察を試みたが霧の爲果さず、其のまゝ敢然南東稜に取りついて中央部の水平のバンドを左右偵察の後、其の南東稜をアンザイレンして下部はオーヴァーハングし上部は平均八十度に垂んとする急傾斜の約七十尺の惡場を攀ぢ、以後は豫想外容易に終に獨立不羈の絶巔に人類として始めて立つ事を得た。初登者は臺灣山岳會員の生駒、中曾根、古平、永田諸氏及び筆者、外に臺北一中教官の瀨古氏、搜索隊長の綿引警部補の七名であつたが、此の他に臺灣教育會から派遣された撮影班萩屋、相原兩氏と搜索隊の

警官並に蕃人、ポーターとしての蕃人を加へ、總勢四十餘名の登山隊であつた。（本誌第二十一年三號〔昭和二年九月〕九四頁會員通信、臺灣山岳第五號〔昭和五年九月〕一頁—沼井鐵太郎「大覇尖山の登攀に就て—登攀に就ての考察と實行—」及び一七頁—中曾根武多「大覇尖山登攀記」）。

大覇尖山初登の大記錄に次いでは八月に於ける臺北一中山岳部員の阿里山々脈・新高山彙・中央山脈に亙る團體登山があつた。卽ち新沼、瀨古兩教官に引率された二十餘名は、阿里山から兒玉山（二五六八・〇米）、石山（二六五三・〇米）、鹿林山（二八四〇・〇米）、大竹山（二八五一・〇米？）、新高前山（三二三六・〇米）、新高西山（三五二八・〇米）の稜線を主として縱走し、新設の新高下休泊所から新高主山に登り、新高東山に往復、新高北山にも登つて八通關に下り、更に大水窟山、秀姑巒山にも登つて東埔方面に下山した。三つの山塊をかけてのアマチュアの團體登山は始めてであつたし、新高主山、東山、北山の一日での三山がけも蓋し新記錄ではあつた。

夏季に於ける質的登山業績は上記の三つに過ぎなかつた。勿論新高山等の量的登山は益々盛であつても早前時代のやうに取り立てゝ言ふ程の事は無くなつた。

十一月には大石浩氏等によつて大武山、伊藤太右衞門、吉井隆成、上野忠貞、大富氏等によつてハック大山が再び調査登山された。又旣に本年初め內本鹿越方面中央山脈上に遙拜ノ池を發見命名した吉井隆成氏等は、同じ方面に十一月再び入つて畢南主山（三三〇四・五米）を降雪と霧氷の裡に初登記錄した。又十一月末には次高山から大雪山・小雪山への初縱走が山林課伊藤太右衞門、吉井隆成、營林所上野忠貞氏等によつて完成され、之によつて大雪山が旣に登頂されてゐた事を殘存記念物によつて知つた。此の縱走は時季としても初冬で、露營は常に氷點下であり、各山氷霜にとゞされてゐた（かゝる困難に拘らず事業調査上の登山が秋から冬にかけて頻々とし

て行はれるのは、一に天候の確實な時季だからである)。次高山から西に向つての順で、ボッコル山(三二八六・四米)。トーガン山(二九三九・三米)、トンノフコワレ山(三三七六・六米)、タナン山(三二四六・四米)、カボワラン山(三三三三・三米)、キシュン山(三五八八・八米)、そして大雪山の西のコハン山(三二〇七・六米)等が此の縱走で初登記錄された。

尙時季は少しく戻るが、鹿野忠雄氏は三月末から七十五日に亙る蕃地の動物及び蕃人に關する研究旅行の間に、東海岸山脈、大武山の周圍、能高越を探り、橫山博士と共に阿里山、新高山、霧社附近を歩いた。なほ後年同氏によると時季は不明であるが、佐藤什侍巡査部長は此の年に卓社大山に登つたらしいと傳へられてゐる。

大正十五年末から此の年にかけて、臺北近郊の低小の山も臺灣山岳會員の活動によつて數多く探行された。殆ど案內人夫無しで小登山でも新しい刺激と發見を求めやうとするのが、又近代登山時代の一特色である。大屯火山彙では先づ最北の竹子山が日歸り登山に可能な事が證せられ、又西方からも登攀が試みられた。又觀音山東側の石溪に早くも遊技的登攀が行はれた。其の他文山郡の獅頭山、二格山、加九嶺越、皇帝殿山の岩場、筆架山及び其の西脈、火燒樟溪遡行・ロホン山より大桶山へ、直潭山、樹梅嶺・二格山ハイキングコース、阿玉溪より宜蘭越、タンピヤ及び龜山側の大桶山、カウヤウ山及びバットル山、ハロ山、七星郡の五指山及び大嵩尾山、親指山南港山縱走、北投附近岩登練習、肉板峠より基隆郡石底の石爭尖山及び蘆椰寮山、伏獅山、海山郡の熊空山、鳳髻尖、烏嘴尖山、新竹州上坪附近の尖筆山、そして遠く臺中州日月潭附近の中級山岳水社大山(二二八二・〇米)等種々の方面及び種々の行き方が始められた。又臺灣山岳會の新竹支部では四月上旬竹東郡の內橫屏山に觀櫻を兼ねて發會式登山を催し、臺北有志も之に參加した。又花蓮港支部の發會式登山は八月中旬一泊を以て七脚川山

二三一一・二米、チカソワン山）に催された。

登山直接の問題ではないが、此の年臺灣日日新報社で募つた臺灣八景及び十二勝の發表は、一般人士に新しく臺灣の鄉土愛を感じさせ、其の半ば以上が大小の山岳又は之を背景とするものだけに、又一の登山流行の動機となつたとも考へられる。

昭和二年最後の記載に、此の年卑南主山の南方所謂サクサク鞍部を越す内木鹿越（二三六四米？）が完成した事と、大正の終りから此の年にかけていづれかの時季にカンタバン山東の山脈が或る警察官に探られた事がある事を附記して置く。

昭和三年

昭和二年の年末から三年の正月にかけての登山は大武山、合歡山及び嘗萊主山南峰に行はれ、悉くアマチュアの記錄であつた。

臺灣山岳會主催の大武山行は生駒、林田、慶谷、平澤、見元、古平、大橋準一郎、大橋捨三郎、青木繁、齋藤齊、中曾根、關根及び高木諸氏の當時同會の一流所を多く含むメンバーで、下パイワンから大武山に登り南大武山（二八三一・二米）迄縱走の明かな記錄を得た（臺灣山岳第四號〔昭和四年三月〕二六頁—關根重憲「臺灣山岳會の大武山踏破隊に加はつて」、臺灣山岳第三號〔昭和三年七月〕一六一頁參照）。

合歡山へは同じ頃筆者單獨で搜索隊の板橋巡査部長、高井巡査、喜納警手並に護衞の武器を持つたトロック社蕃人八名と共に霧社から二泊で往復した。タロコ討伐後は始めての行だつたので、道跡分明、登山容易なるにも

拘らず警察は萬一を心配して右の如き登山者一人には過ぎた位の護衛部隊をつけ且つ其の費用を登山者が持つに非ずんば許可しなかつた。前年某學校教員も合歡山登山の希望だつたが、さういふ條件をつけられて中止した事を聞いた。筆者の行は登山家丈としては最初で、元々降雪及び積雪の調査が目的だつたが、此れは時季早くして得る所少かつた（本誌第二十二年三號〔昭和三年四月〕一四三頁「合歡山登山通信」、臺灣山岳第七號〔昭和八年十一月〕一六一頁—羚羊人「合歡諸峰と畢祿山」參照）。

同じ時季に行はれた能高越及び薺萊主山南峰の登山は、臺灣山岳會の木田文治、高橋衛、植松益枝三氏によつたもので、冬山と雖も新しい業績ではなかつたが、登山家踏雪行の記錄發表としては最初のものである（臺灣山岳第四號〔昭和四年三月〕三七頁—木田文治「能高越途次雪中の薺萊主南峰に登る」）。

昭和三年は又外部から名士登山家の來訪があつて島民一般が啓蒙された年であつた。卽ち二月には田村剛博士が總督府から招聘されて阿里山・新高山・國立公園問題調査の爲渡臺登山し、同地域其の他各地の風景價値を發見、整理、確立して臺灣風景の生存權を人々に再認識せしめた（昭和三年十二月發行—田村剛『臺灣の風景』）。次いで二月から四月迄本會の槇有恒氏が在臺、登山の機はなかつたが臺北其の他各地で講演會談して登山家並に一般に深い感銘と暗示を與へた。槇氏より少しくおくれて本會の高頭仁兵衛、大平晟兩氏大先輩が渡臺、三月中積雪の新高山を阿里山口、水裡坑口の兩方面から試み（登頂せず）、更に大平氏は單獨蕃界を北に歩いてピヤナン社から南湖大山に登山、最後に筆者等と共に大屯火山彙にも二つの小登山を了して歸鄉したが、兩氏の風格並に質實なる山の行き方は登山流行熱發生時代の臺灣の人々に偉大な教訓を殘し、且つ又歸來成つた「山岳」第二十三年第三號『臺灣の山旅號』は改めて臺灣山岳の眞價を內地有識者及び登山家に傳へたのである（大平晟「臺灣

の山旅」昭和四年九月)。

四月上旬には又、本多靜六博士が大屯火山彙の林業施設及び公園化問題につき視察に行かれた。夏季には又、本會員林並木氏、京大旅行部酒戸、岩田兩氏、東大スキー山岳部出口一重氏等が渡臺し、林氏は新高山をめがけたが、郡大蕃脱走事件の爲果さず能高越と蘇花道路の勝を探り、京大・東大の三氏は臺北高校の鹿野氏と共に南湖大山及び次高山に登山した(本誌第二十六年二號〔昭和六年七月〕三六頁—鹿野忠雄「ピヤナン越の山旅」)。更に此の年十二月には北大のグブラー博士が學生德永氏と共に行つて豫定の新高山は蕃情不穩の爲中止し次高山に登山した(ヌタック第二號〔昭和五年六月〕一四一頁—德永芳雄「次高山(シルヴィヤ山)」)。

以上の如く此の年は外部からの刺戟が只さへ登山熱旺盛な勞圉氣を更に高踏的に釀化したやうに思はれる。

飜つて此の年正月以後の臺灣在住者の登山は如何といふに、先づ春季積雪時の新高山登山の記錄が二三ある。第一は臺中州兒玉內務部長等の登山で、三月上旬凍結した積雪は鶴嘴等で破り猛烈な吹雪を冒して登つたといふ。次いで三月末臺北高校山岳部の齋藤教授共の他學生の一隊は阿里山口新道から主山に向つたが、此の時も氷結した硬雪の爲絶頂下數十尺の所から引返さざるを得なかつた。思ふに同時代の內地登山界に比し臺灣に於ける積雪期登山は、本質的にも臺灣高山自身に就いても經驗と研究が非常に不足であつて、シュタイグアイゼン、ピッケル及びザイルの使用は全然一般登山家の常識外であつた。

上記に次いで四月末から五月にかけて臺灣山岳會の見元、青木繁兩氏は新高主山及び北山と秀姑巒山の研究登山をなし、特に新高主山の山容が北山側からするのが最もよい事を寫眞と共に江湖に紹介した事は、臺灣山岳觀賞上の一新事であつた。臺灣山岳觀賞の點に就いては大正年代から昭和九年頃迄在臺の石川欽一郎氏が畫筆の上

に又文章の上に多大の貢献をなしたが、同氏自身は山に登らない畫家であつた。之に反し自ら登山して臺灣の山を描いた畫家は此の年から在臺して昭和五年に及び、新高山、次高山等の大作を殘した那須雅城氏である。

尙春季早い頃山林課の小林勇夫氏は北合歡山に西側から直登した。

六月に至つて臺灣理蕃史而して登山史上に逆行の一頁がひろげられた。其れは新高山北東側に棲息する郡大蕃が脫走して官命に反し新高山南方雲峰附近に屯する未歸順兇蕃クマホ社に合同した所謂郡大蕃脫走事件である（臺灣山霧第四號〔昭和四年三月〕四三頁—「郡大蕃脫出の前後」）。此の事件では警察官其の他馘首されたものがあり、蕃情惡變したので當局は關係地方の入蕃を禁止して蕃人制壓の非常時に入つた。此の爲新高登山は當然許可されず、從つて暫くの間新高山方面の登山業績は警察方面を除いては皆無となつたのである。此れは質的にも量的にも駁々として發達しつゝあつた臺灣登山界に一大衝動を與へたものであつた。

然し乍ら他の方面では赫々たる登山の業績が少からず作られた。第一は七月下旬卓社大山に登山家最初そして自然科學的探査を目的として臺北高校生にして臺灣山岳會及び日本山岳會々員の鹿野忠雄氏が登つた事である（本誌第二十六年一號〔昭和六年五月〕一四頁—鹿野忠雄「卓社大山登行」）。次いで同氏の能高越、薈萃主山南峰及び能高山登山あり、それから八月二日乃至十五日の間に內タロコのタウサイ溪支流のコワヘル溪源流側より新沼教官をリーダーとする臺北一中登山隊に鹿野氏も加はつて中央尖山（三七〇三・四米）に文化人として初登の記錄が作られた（臺灣山岳第五號〔昭和五年九月〕四五頁—臺北一中登山隊員「中央尖山登山記」、本誌第二十五年三號〔昭和五年十一月〕八〇頁鹿—野忠雄「中央尖山の登攀」）。中央尖山は嘗て或る年の冬季今村榮次郎警部補がタウサイ溪を傳つて登攀を試みたが天候の惡變によつて引返した事があるだけで、全くの未踏峰嶮山

として大覇尖山と列び稱せられ、官民探險家登山家の均しく所謂覗つてゐた焦點であつた。結果は大覇尖山程急峻でなく多數の初心者にもザイル無しで登れたものであつたが、絶頂を除いては岩石脆く油斷の出來ない岩山である事が認められた。名にし負ふ高峻なる二つの尖山が前年より相次いで山に職業關係を有しない登山家の組によつて初登された事は、昭和時代探險登山史の特色であり、又所謂アルピニズムの燃焼の始まりを表現してゐる。

此の他夏季に次高山、能高越及び薺萊主山南峰、ピヤナン・松嶺越、八仙山などが登山旅行の對照になつた事は逐一此處に述べる必要はない。但し之とは別箇に特記したい事は臺灣に於ける登山團體又は個人の內地遠征である。卽ち臺北高校山岳部の一班は日本北アルプスに始めて足跡を印し、又臺灣山岳會の木田文治氏は七月より八月にかけて立山群峰、白馬連嶺中の三四のピークに登り黑部峽谷を探勝して歸臺した。從來臺灣在住の登山家にして內地歸省の折富士山登山位は行ふ者があつたが、近代登山の殿堂である日本アルプスに足を入れたのは正に此の年が最初といつてよく、且つ又其れは何號かの影響を臺灣登山界に與へたであらう。

秋になつてからの大きな收獲は、十月二十七日乃至十一月五日臺灣山岳會主催で行つた南湖大山學術研究登山である。メンバーは山本由松、佐々木舜一、河南宏(以上植物擔當)、丹桂之助(地質)、原田五十吉(動物)、楚南仁博(昆蟲)、見元了(地形)、鈴木宣三(氣象)、靑木繁、倉田武比古、狩集次太郎、松野淸純、藤堂繁夫(以上森林)、松倉鐵藏、古平勝三(以上博物)、江島勝一(寫眞)諸氏外二名の計十八名で、普通のコースを上下し、限られた日數で大業は期待出來なかつたが、臺灣山岳會が學界に貢獻する端緒を作つた。各登山者の報文は、「臺灣山林會報三十六號に載せられてゐる(臺灣山岳第四號七一頁參照)。

尙此の年內に郡大蕃脫走事件後の處置として新高山の東西並に八通關玉里道路の高所に警察官吏駐在所が新設される事となり、後年の登山根據地兼避難所となり得た事は、登山家の均しく感謝する所である。又前年度から繼續又は新規の中央山脈橫斷道路や蕃界道路の幾つかゞ工事進涉して、入蕃登山に至大の便益となりつゝある事も、昭和二—三年頃から特に顯著であつた。

最後に昭和三年度の臺北中心の小登山に就いて見れば、臺灣山岳會員を主として新方面の探究は愈々盛になり、猴山岳、北揷天山(一七四七米)、金包里より竹子山、鳳髻尖岩尾根及び主脈、大屯山粗坑、栄公坑山、皇帝殿山の峠と北側の岩場、烏尖連嶺、東側よりの獅頭山、西稜よりの直潭山、觀音山東稜及び岩峰、五寮より角板山越、カボ山(一六〇一米)、カナビラ山、北側より熊空山、峰頭尖等が新しく既知の部類に登錄され、從來知られた大屯の山々其の他は益々安心して多くの人に步かれた。臺中を中心とする小登山では、臺中州知事に榮轉した生駒氏を中心として南投の火炎山や、大安溪の火炎山が登られた。

昭和四年

昭和三年々末から四年々頭にかけての登山業績は、十二月二十八日から一月六日の十日間に亘る霧社方面から合歡山東峰、北合歡山、畢祿山(三三七〇・〇米)の縱走及び畢祿鞍部からロオン溪を經てクッキリ溪を下つたものを最上とする。此は當時山林課長にして臺灣山岳會代表者たりし杉本良氏の肝入りで山林課調査隊と臺灣山岳會との合同登山であつた。此の內畢祿山は嘗てタロコ討伐の際通られたと思はれるが、確かな記錄がないので昭和四年の一行が初登といふ事になつてゐる。一行は小林勇夫、藤井隆、狩集、奧(以上山林課員)、平澤、鹿

野諸氏及び筆者(以上臺灣山岳會員)と警官及び蕃人の捜索隊であつた。此の行は從來中央山脈を境として東西兩面の蕃人が敵視關係にある爲横斷は出來なかつたのを、總督府から州廳當局を動かして登山中兩者の蕃人の狩獵を一切禁止させ、且つ山脈上で成るべく兩者蕃人を合はせない樣にして人夫交換をするといふ建前で準備された。かゝるマネージメントは内地の登山では夢にも經驗出來ない大がかりなエキスペディションの要素である。臺灣に於て、登山技術上何等の困難なき山行も往々人爲的に不可能又は至難ならしめてゐた事を打破し得た實例である(本誌第二十四年一號〔昭和四年十一月〕一三八頁會員通信、臺灣山岳第四號八二頁消息及び通信、臺灣山岳第七號〔昭和八年十一月〕一六一頁—羚羊人「合歡諸峰と畢祿山」)。

正月の登山には尙、中級山岳で水社大山が臺灣山岳會の青木繁、齋藤三男、古平勝三の三氏に登られ、同じく同會の大橋捨三郎氏によつて李棟山(一九六〇米)が趣味的登山の最初の行を得た。又年末から正月にかけてツーリスト・ビューロー主催の阿里山行、ガランピ行、タロコ峽行があつて、此れは登山ではないが大衆向のハイキングの始めての試みであつた。

又、阿里山口新高登山道路を通つて臺南州警務部長一行及び新聞記者團の蕃地慰問、新道路視察の新高山登山が暮から正月にかけて行はれ、廣く一般人に新高山の新方面を紹介する事になつた。此の阿里山口の新道路といふのは大正十五年十一月に速成した道路の大修理であつて、兒玉山を上下せずに北側山腹を通過し、石山のあたりも同樣北側を容易に通過するやうにし、新高西山の邊も修理したのである。新高下、タータカの兩駐在所は既に前年末に大體落成してゐた。臺中州側の新高、南、バナイコ、ツツジ山等の新駐在所も開設せられ、二月になつてから生駒臺中州知事、赤堀警務部長等の一行は此等を初巡視方々新高山に登山し、歸路は俗稱中線といふ郡

大溪方面を踏査した。

二月後の登山は先づ臺北高校山岳部の活動から始まつた。卽ち三月末には大武山登山班と能高越を中心とする班を出した。大武山へは河南教授、鹿野氏等の組が登り、學校團體の登山としては嚆矢とする。能高越を中心とする行は三月十八日から末日迄かけて齋藤教授、船曳教官引率の下に若干名の學生諸氏が能高山、能高山南峰、白能山（能高山南峰・白石山間の一峰、當時の假名）、白石山を縱走往復し、能高山北峰、薺萊主山南峰にも登り、更に船曳氏は單獨屈强な蕃人をすぐつて薺萊主山に强行登頂往復し、山頂附近ではザイルを使つた。能高越を中心とする斯くの如き活潑なる登山團體の登山は之を以て最初とする。

六月になつて山林課の伊藤太右衞門氏一行は新高主山、東山に登つてから楠梓仙溪流域を踏査してマガツンに出たが、楠梓仙溪は既に先年專賣局の樟樹毎木調査隊によつて調査されてゐたものである。

昭和四年の夏季は前年郡大蕃の脫走によつて閉塞された新高山も臺南州阿里山口からの往復だけが許されて、臺灣山岳會其の他多數の團體登山が行はれた。然し登山の新方面は他の地域に開拓され、七月中旬から臺北高校山岳部の齋藤齊、船曳、鹿野氏等は總勢八名で、學校登山團體として始めて次高山から大雪山・小雪山に縱走した。此の旅行最後は强雨に見舞はれたが、リーダーの適宜の處置により事なきを得た。

又、臺北一中山岳部の新沼佐助氏等の一行は七月末からタロコに入り、トボコから薺萊主山北峰に登つて合歡山方面に下り、合歡三峰を登頂、合歡瀧を經てトロックに出て霧社に到つた。此の行はアマチュア登山團體の最初のトラヴァースとして、又嘗ては東洋一の大瀑布と誤認された合歡瀧の眞實を見た事に於て、世に殘るべき記錄的登山であつた（臺灣山岳第五號〔昭和五年九月〕七〇頁—臺北一中登山隊員「タロコより薺萊主山北峰・

合歡諸峰を越ゆ」)。

尙又、吉井隆盛氏の調査隊は七月十一日ピヤナン鞍部を發してから南湖大山、バトツノフ山、ゲリロー山(二四九〇・二米)、メキーホル山(二二二〇米)、ムカナン山(二一三六米)、三星山三峰(二三五一・四米)、メバヤン山、ヤツブラサイ山、タイヤフ山、プラッサイ山等の長大なる三星山支脈を始めて完全に縱走して十六日銅山駐在所に出たが、ヤツブラサイ山附近海拔約二千米の地點に約二十五町歩の面積を有する地圖に無記入の一山湖を發見し、蕃人の名稱を取つてテニワンの池と命名した。吉井氏は此の登山に引續き、ピヤナン鞍部から桃山に登り、ピヤナン鞍部に出た(臺灣山岳第五號一二二頁—吉井隆成「南湖大山よりムロラフ、三星山を經て銅山に」、同一二四頁—吉井隆成「桃山に登る」)。

尙、鹿野忠雄氏は三月から八月迄臺灣各地を巡歷し、專門とする動物學研究は元より、蕃人調査、登山と夥多な收獲をあげた。氏の足跡は大武山、臺東海岸山脈、內本鹿越、ラックス蕃地、次高山彙(前揭)、ボンボン山越に及んでゐる。

昭和四年の登山は以上の外十二月初旬の筆者の行及び中旬の吉井隆盛氏の大武山登山が記錄されてゐるのみである。筆者の行は阿里山から新高山に登り其の歸途水山からボホーユ溪を經て楠梓仙溪を渴水に乘じて川通し下降して高雄州テブテガイ駐在所に出で、其の後は內本鹿越(サクサク道路)の一部バリサン製腦地を探つた。楠梓仙溪は渴水時と雖も數十回の徒涉があり、一二非常な惡場のへつりがあつた。又此の溪はツオウ族と未歸順蕃クマホ社等ブヌン族セブクン蕃との折衝地とて、公務以外は入山許可せられないものであつたが、筆者は幸ひにも用務を帶びて專賣局員若月謙、臺灣製腦會社員日野義雄氏と同行下溪を完うし得た(臺灣山岳彙報第二年「昭和

五年〕四夏、本誌第二十五年一號〔昭和五年四月〕一七四頁)。

昭和四年度の臺北中心の小登山では、ウライよりカウヤウ方面及び大桶山、塗潭山と獅頭山への尾根、竹子山北角より磺溪へ下降、二占山より觀音山、小觀音山南面の石溪、春花時の栄公坑山、面天山キャンプと面天裏の溪、阿玉溪よりコーレキカッタン、大豹溪より北挿天山、リモガンより角板山方面に北挿天山越、チーロック山、ガットン溪よりコーレキカックン・阿玉山又はルモン山、カウヤウ山より北の溪、桶後溪より宜蘭越、坪林尾越、樹林口ハイキング、北投不動港附近、鳥尖及び北投丘陵岩登、營歌石、鳳髻尖岩尾根西の獨立峰南稜及び東側アブザイレン、角板山ウライより挿天山等新たに記錄に入り、臺中附近では東勢の頭嵙山が探られ、又臺灣山岳會臺中支部發會式は八卦山脈横山で行はれた。要するに臺北は地の理と人の和を以て小登山でも壓倒的に盛であり、特に此の年から後年一般並に特志家の人氣を呼んだ栄公坑山と桶後溪が登山家の領分に入つて來た事と、皇帝殿山や鳳髻尖の如き岩場が何回も詳細に研究されて來た事と、東京でいへば秩父級の挿天山脈が各方面から深く突付かれ出して來た事は注意してもよい。そして臺北附近の山は既に此の年の三月に一先づまとまつて發表されたのである(臺灣山岳第四號三頁—沼井鐵太郎「臺北附近の山」)。

最後に此の年知本越横斷道路(一六六七米?)が全通した事を附記する。

昭和五年

昭和五年は種々の意味に於て臺灣登山界として忘るべからざる年であつた。

先づ前年の年末から正月にかけて、嘉義郡の好意により新高下駐在所を根據地とする新高山各峰の純粋登攀が

行はれた。其の組は臺灣山岳會の木田文治、平澤龜一郎、齋藤三男、青木孝二諸氏及び筆者の五名、之に岡村巡査もクライマースの一員となり、或は主山・北山及び昔時の主山登頂コースと思はるゝ奈落坂ルンゼを、或は南山・南山西南稜の岩にザイルを用ひ、或は東山の登攀に、主山・東山間無名岩峰のアプザイレンに、つとめて岩場の研究と試登に獻身した。今日の眼から見れば其れ等は普通の路線に過ぎないとも言はれるが、蕃情なほ芳しからぬ當時としては一登山に新高各峰を登つた事や、南山・南玉山方面に試登した事や、冬季の新高登攀に關する氣象と岩と用具及び食料品等の研究をした事や、其の他此の組の業績は新鮮なものであつた。特に臺灣に於ける登山新形式の所謂放射線的登行を始めた事は登山發達史上の重點であつた（臺灣山岳彙報第二年〔昭和五年一月〕三頁、本誌第二十五年一號〔昭和五年四月〕一七七頁）。

又、同じ季節に臺灣山岳會の長老大橋捨三郎氏は單獨井上溫泉より鹿場大山に登り、測量及び調査隊以外始めての行であつた。臺灣山岳會臺中支部でも立鷹及び能高方面に二つの大衆登山を行つたが、其の境地と記錄は何等新味は無いにせよ、臺北以外在住者の組でかゝる冬山行が行はれ出した當初のものとして意義を有する。

年末年始の季節には又次高山が登られた。其れは臺灣山岳會の中崎氏及び上西氏の一行で、冬季アマチュア然も警察官の護衛形式なしに登山者と蕃人だけで次高山に登り得るやうになつた最初のものである（臺灣山岳第六號〔昭和七年一月〕二〇頁—上西慶藏「次高登山記」）。尤も新雪後の眞の冬山次高山は之より後半月おくれて警察囑託鳥居氏一行が試登したのを嚆矢とする。但し同氏はシカヤウ大山迄しか登り得なかつた（同上二〇頁脚註及挿入寫眞）。

又此れは登山とは直接關係はないが、臺灣山岳測量開發の功勞者であり臺灣山岳會名譽會員の野呂寧氏が久し

振りで一月初來臺、後進の登山家達とも會合した。

四月になつてから續々と登山新記錄が得られた。卽ち第一は山は低いが、登山家には緣遠い臺東海岸山脈の跋渉（植物調査）で、臺灣山岳會員の臺北帝大助敎授山本由松氏、登頂したのは四千尺級の猫公富士及び新港主山であつた（臺灣山岳彙報第二年〔昭和五年〕二五頁及三二頁）。

次に吉井隆成氏一行の探險調査隊は四月下旬イホホルからシンカン山（三三八一・〇米）に文化史的初登の記錄を得（但し明治四十一年十二月森丙牛、志田梅太郎氏等初登の疑ひ濃厚である、本稿一二頁參照）、それよりシヤカバン山（三一二一・二米、チヤカバン山）を越えて（初登）打訓（ターフン）社に下り、ラクラク溪支流ココス溪方面から南双頭山（ミナミソウタウザン）（蕃稱アントンコン、三三三三・三米）に初登した（此の山の南東にある俗稱タ（ターフン）ーフン富士（三〇三八米）には既に警察官の登頂があつたらしい）。次いで尾根傳ひに雲峰（クンパウ）（蕃稱チンカンボン、三五六九・一米）にも往復初登の後、ラクイン溪源流を過り、シヌベシ山（三四六一・〇米）に初登、其の際同山の東面三三〇〇米の地點に周圍凡そ四百米の高山池を發見シヌベシの池と命名、更に關山の北に横はる雄峰向陽山（カウヤウザン）（シボボス山又はラゴスタウラ山又はランゴスタウラ山、三六一一・〇米）に初登頂、未歸順蕃タマホ社を眼下にしてから安全コースを東方に取り、ブラクサン山（二九九一・八米）初登を登頂の最後として清水溪に下つて二旬に亘る探險登山を終つた（臺灣山岳彙報第三年〔昭和六年〕六頁、臺灣山岳第八號〔昭和十一年六月〕二七頁―吉井隆盛「雲峰附近山々の探險」）。

又五月上旬から下旬にかけて八木久左衞門氏一行の探險調査隊は臺東廳プルブル方面から入り東方支脈を經て關山（クワンザン）（三六六六・七米）の頂に立つた。之も登頂によつて先登者があつた事を知つたのであるが、兎に角昭和五年

の當時一萬二千尺級の殘れる處女峰？　として登山家の焦點だつた關山も、既に確たる登山史を負ふものであつた。此の登山と同時にハイノトーナン山（三一七五・一米）も八木氏等によつて關山から縱走初登（？）されてゐる（臺灣山岳彙報同上）。以上吉井、八木兩氏の二つの探險登山は、恰かも大正年代タロコ蕃討伐直前の能高山・壽萊主山・合歡山・南湖大山探險登山にも似て、昭和年代に殘る理蕃の大事業タマホ社未歸順蕃制壓に直接間接に關係してゐるやうであるが、タロコ蕃討伐の時に比し著しく產業開發的色彩を帶びてゐるのが特徵である。換言すればタロコ蕃討伐直前の探險登山は蕃務本署主管の擧であり、新高山—關山の探險登山は殖產局山林課主管の行ひであつて、其の意義の差が卽ち探險登山時代と近代登山時代との差となるのである。

又、此の年第三の長期探險登山地として五月中旬山林課小林勇夫氏一行の馬太鞍溪水源の山々があつた。コースは拔子からロンダブン山に登り、之より源頭の山々を廻つて丹大山（タンダイ）（三三七〇・九米）に初登頂し（試登は既に大正十三年大石氏が行つた）、更に北方の大石公山（ダイセキコウザン）（三〇四八・五米）も初登、次いで關門山を經て其の北方の一〇一二一尺峰（三〇六六・九米）から東方支脈を縱走して王武塔山（二〇一三・〇米）に到り、長漢社に下山したものである（臺灣山岳彙報同上、臺灣山林會報五十一號一五頁—小林氏の紀行參照）。

其の後間もなく六月には大水窟南方の尖山（三二二一・八米）も山林課近藤盛雄氏一行の探險調査隊に初登されてしまつて（昭和六年三月の初登とも記されたものがある）、南部中央山脈の闇黑時代は過ぎ去つたのである。

以上の官廳側探險と同じ頃、純登山家側にも大なる貢獻があつた。卽ち當時東京に在住してゐた本會員、英國王立地學協會員の英人マレー・ウオルトン氏が、オクスフォード大學出身の若き登山家ケー・シー・グロッス氏を伴つて渡臺、第一期は筆者と共に五月九日臺北發、十四日シカヤウ社から次高山に登り、露營二夜の後先人未

記錄のカランクックン山(三七五八・〇米)及びムトロップ山(三七一二・〇米、シミタ)の二峰に初登し、次いで大覇尖山往復後ボチンシロン山(ヤボラン山)を經て桃山からピヤナン方面に出やうとしたが、蕃人の統御宜しきを得ずして手違ひの爲めムトロップ山以北は斷念し、キヤワン溪源頭より次高山東稜を經てキャワン溪、ピヤナン鞍部を經てピヤナン社に出た。第二期は筆者に代つて臺灣山岳會の井上一男氏が同行して、十九日から南湖大山に登りピヤハウ社に下り、一路東海岸に出てからタロコに入つてタウサイから中央尖山に往復し(新登頂は僅かの所で果さずとの說あり)、二十九日一旦臺北に歸つた。第三期はウオルトン氏單獨で臺中州側から八通關道路を上つて秀姑巒山及びウラモン山(登頂を失す)に試登の後、新高主山を越えて阿里山に出て山旅を終つた。

ウオルトン氏等の行は初登、新記錄の數々を登山界に殘した以外に、外國人迄が新方面の登山をしに臺灣に來たといふ事で、登山界の非常な刺戟となつた。又同氏は臺灣山岳が愛すべき特色あると共に甚だアルプス的なる事(特にアルプ＝草原の發達に於て)、山のスケールと急峻さが日本アルプス以上なる事を確證し、且又臺灣に於けるエキスペディションのマネージメントの改善についての意見を述べ、又外人乍ら日本在來の良き習慣、登山服裝を常用してゐる點で、若き在臺登山家達を啓發し六月十二日に離臺した。兎に角ウオルトン氏の言動は先年の大平氏等と共に偉大な感化を臺灣登山界に與へたのである(本誌第二十五年二號〔昭和五年六月〕一七〇頁會員の登山報、同年三號〔昭和五年十一月〕英文欄五頁 Walton, "The Ascent of Tsugitaka"、臺灣山岳彙報第二年〔昭和五年〕五頁、Japan Advertiser, 1930, Aug. 1～23. 臺灣山岳第六號〔昭和七年十一月〕三一頁越村生譯「臺灣を跋涉して」、Rev. W. H. Murray Walton, Journ. of the Geographical Sociey. June 1933; Rev. W. H. Murray Walton, "Scrambles in Japan and Formosa", 1934.)

夏季に至つて慶應義塾山岳部一行の渡臺登山も有識登山家に正しい興奮を與へたものであつた。一行は先輩大賀道昺氏、部員後藤宗七氏、渡邊良太郎氏其の他四名、私かにシンカン山初登を目指して七月八日着臺したが、其のシンカン山登頂は純登山家として最初ではあるとはいへ、文化史記錄としては二回目又は三回目の登頂であつた。それから一行は八通關道路を上つて大水窟山、秀姑巒山に登り、新高主山を越えて阿里山に出で、更に順路平地から霧社に廻つて數日間の暴風雨を過し、能高越を上つて薺萊主山連峰を縱走し、八月末離臺した。薺萊主山南峰から北峰迄の殆ど完全なトラヴァースは恐らく最初の記錄である（臺灣山岳彙報第三年（昭和六年）六頁、登高行第八號〔昭和六年〕—後藤宗七「臺灣山行」）。

昭和五年夏季に臺灣在住の登山家仲間では格別の業績を擧げて居らず、臺灣山岳會の催しも新高山、次高山の通常登路の登山に過ぎなかつた。

秋から冬にかけては三つの探險調査登山があつた。一は山林課八木、平原兩氏一行の十月に於ける小關山（三二五四・五米）登頂の確たる記錄である。尤も大正十三年六月十日出版の五萬分一蕃地地形圖「卑南主山」を見ると西方荖濃溪側から透仔火山（七八二六尺）を經て點線路の記號が小關山迄通じてあるので、既に蕃務本署測量員に登られたのではあるまいかと考へられる。又明治二十九年邦人として臺灣高山地域探險最初の久留島氏等は、見元氏の臆說によれば雲水山の南鞍部を越えたものだらうとあるが、實は今述べた點線路によつて示された小關山が橫斷地點では無かつたかとも疑ひがかけられても無理はないと思ふのである。

十一月になつてからの事と思ふが、丹大山からウラモン山迄の長大な中央山脈未踏大稜線も、兩端の山から山林課の調査隊が進んで、稜線上に文化人の足跡を印してしまつた。此の地域が純登山家に始めて歩かれ、山名其の

他狀況が登山界に知られたのは昭和六年に其の一部、全部知られたのは昭和十二年であるが、兎に角丹大山・ウラモン山の間のルリラロ山(三一一四・二米)、マルパラナン山(三一六四・五米)、イシキンマツ山(三二八〇・三米)、ウメランパシ山(三〇五三・六米)、プロシコン山(三〇七六・〇米)、マリガナン山(三五六六・六米、別名ウラカバン又はウスマリガナン又はパンサヌン山)、マリアブ・ブンヌル山(三四八七・八米)等の山々に文化史的初登がせられた事になる。

此の年行はれた南双頭山、雲峰方面、關山方面、丹大山・大石公山方面及び丹大山・ウラモン山方面の四つの山行は、昭和年代に於ける最も大がかりな官廳側の探險登山として顯著なものであり、又此れ等によつて中央山脈中部以南未踏の著名高峰もあらかた片付いてしまつたのである。

も一つの秋の探險調査登山は、同じく山林課日高、長谷川兩氏等の桃山から大覇尖山にかけての十一月に於ける夫れであつた。此の一行は森林調査が主目的であつたから、稜線よりも寧ろ大峻嶮溪源流溪谷に面する斜面を歩いたものであるといはれてゐる。

秋から十二月末にかけても亦純登山家の高山での活動が無かつた。此れは一面、十月二十七日に突發した臺灣近代の不祥な大蕃害霧社事件の爲め、各方面の入山が遠慮された故もある。霧社事件は又臺灣登山界の發展を妨げた一巨石に違ひなかつた。當時から一年間位は該地方への旅行者も稀れで、從つて討伐隊以外には能高越すら容易に行はれなかつた。昭和八年の正月迄其の餘波を見る事が出來る位である。本會の武田久吉氏も十二月渡臺したが、新高登山又は八通關越の希望を當局から許可されず僅かに高雄州下五六千尺の山地(京大演習林?)、阿里山位を歩けたに過ぎなかつた(本會々報第四號〔昭和六年二月〕四頁會員通信參照)。

昭和五年度の臺北中心の小登山では、大屯火山彙は益々多く歩かれ、開路的にも磺嘴山や冬瓜山、大嶺峠以東の山脈が新しく一日登山の範圍に入り、火炭窟坑及び之に平行する小溪の遡行や踏めてゐない尾根筋や廢道が試みられ、大衆キャンプも山上で屢々行はれるに至つた。之に次いで流行して來たのが二格山の西脈の山々である。又南勢溪流域では阿玉溪から桶後尖、獅頭山東のルンゼ、ローマン溪より大桶山及南尾根等が新しく探られ、カウヤウ山・バットル山や、大豹溪より北挿天山などが大衆的に登られた。一方臺北近くの五指山も再三歩かれて、附近の岩場や北側の嶮崖も探られた。鳳髻尖の主峰や烏嘴尖が大衆登山地となつたと共に、主峰東の岩尾根の岩登探行も反覆されてゐる。そして此の年の最も注意すべき業績としては、昭和四年頃から木田文治氏によつて始められた「臺北平野から次高山が見えるや否や」の懸案が再三專門家と共同の觀望研究で大體解決された事である（臺灣山岳第五號〔昭和五年九月〕一一六頁—木田文治「臺北平野から次高山が見えるや否や」）。尙又臺中中心の小登山は數は少いが、頭汴坑キャンピング、埤頭山、出雲山、明治溫泉行などが記錄されてゐる。

昭和五年分の最後に筆者の外遊中の登山を擧げて置く。登山が目的でない旅行中の事であつたし、時季も惡かつたので大物はないが、カナディアンロッキーのルイズ湖を中心としてアグネス湖附近ワンダリング、フェーアヴェウ・マウンテン（九〇一一呎）の新雪中單獨行、ヴィクトリア氷河行、岩峰ニードルスの新雪中岩登り、モレーン湖行、バンフを中心としてタンネル・マウンテン（五五〇〇呎）ワンダリング、キヤスケード・マウンテン（九八三六呎）南壁岩攀試登、サルファー・マウンテン（七四九五呎）越え等を行つた。此れは在臺登山家の海外への一發展と見てもいゝと思ふ（臺灣山岳第十號〔昭和十四年三月〕一一四頁—沼井鐵太郎「C・P・R・沿線」）。

昭和六年

前年々末より年始にかけて行はれた高山登山は臺灣山岳會の中崎大三郎、浦上郡太郎兩氏の冬季大覇尖山登攀のみであつた。此れは冬の大覇尖山登攀としては最初であり、登頂だけでも三回目であつた（臺灣山岳彙報第三年〔昭和六年〕一〇頁、臺灣山岳第六號〔昭和七年十一月〕一頁―中崎大三郎・浦上郡太郎「冬季大覇尖山登攀記」）。年末年始の季節に此の登山一つとは如何にも淋しいが、此れは前記の如く霧社事件の直後全般的に高山地域入蕃不許可の方針に抑制された結果である。從つて張り切つてゐた登山家の組も中級以下の山行で滿足しなければならなかつた。之とても記錄は二つに過ぎない。卽ち千々岩助太郎、田口與四郎兩氏外工業學校生徒一行のタマン山（二一五八米）・ララー山（二一〇五四米）縱走、木田文治、齋藤三男、澤谷廸吉、永石淳諸氏の桶後溪流域の大礁溪山及び鳥嘴山・ロホン山連脈の千米級森林の山々登行である（臺灣山岳彙報第三年〔昭和六年〕八頁、臺灣山岳第七號〔昭和八年十一月〕一二三頁―木田文治「桶後溪流域の山々」）。

三月初めには山林課近藤盛雄、中村廣兩氏等の測量隊が南方の南尖山（?、新稱）から大水窟に到る途中で尖山に登頂してゐる。筆者は伊藤太右衞門氏の調査（臺灣山岳第六號九一頁）に從つて近藤氏昭和五年六月と旣に記したが、鹿野氏によれば昭和六年三月八日近藤氏、中村氏の初登となつてゐる（本誌第二十七年三號五二頁）。いづれが眞か、いづれも眞か、未だ終に再調査の機を得てゐない。

なほ將來南部中央山脈の登山に至大の便宜を與へる關山越道路（二九三〇米）は昭和五年に起工し、此の年の春竣工した。

此の年は大覇尖山・次高山グループに關して新しい記錄が續々と生れた年であつて、先づ正月登山後三月下旬に至つて、臺灣山岳會の井上一男、高尾勝夫、田榮藏、臺北高校山岳部山崎、本村、小林諸氏の春雪季の大覇尖山登攀が行はれた（臺灣山岳彙報第三年〔昭和六年〕二二頁、臺灣山岳第六號〔昭和七年十一月〕七五頁—高尾勝夫「春の大覇尖山に登つて」）。なほ此の行でパイホマライが登山者と等しくザイルに結ばれてタイヤル族最初の登頂者たり得たのである。

夏季になつてから臺北商業學校生徒一行は臺灣山岳會を見元了、大宮三郎兩氏に率ゐられて、中等學校登山團體として始めて大覇尖山に登つた。

又、懸案の大覇尖山・次高山間の本部無双の高連峻嶮なる山脈が、此の年の夏純登山家の三組のパーティーによつてトラヴァースされた事は、昭和二年の大覇尖山初登、昭和五年中央山脈南半の探險登山に次いで正に劃期的業績であつた。しかも其の内の二つの組は根據地を異にして殆ど同時にこの大稜線に出會つたので、ジャーナリストが先陣爭ひを云々してスリリングなニュースを報じた事は、一般人に好奇的關心を抱かしめ、登山界に惡果と良果とを等分に寄與した。第三のパーティーは又止むを得ざる案内人夫無しの縱走をやつて一時行末不明と報ぜられ、此れ又社會にセンセーションを起した。次に此れ等各業績を具體的に述べて見やう。

臺北高校山岳部の教官船曳實雄氏（臺灣山岳會員）外學生數名の組は七月上旬臺北發、ピヤナン蕃人と共にピヤナン鞍部から桃山に登り（純粹登山の嚆矢）、次いで山稜を西走してダマラップ山（三三五七・五米）を越えボチンシロン山（三五六七・二米、ヤボラン山又はタラガユン山）に登頂、船曳氏一人のみは西面崖を探り之が大部隊の通過に困難な事を知つて、全隊はボチンシロン山の北側を卷いて大覇尖山に登頂、食糧其の他事情によりシ

ミタの斷崖稜線及びカランタツクン山は東方遙か下に避けて十四日、次高山に達し、シカヤウ社に下山した。タマラップ、ポチンシロンの二山は前年既に調査隊が初登してゐたかも知れないが、確實な登山記錄そして純登山家の記錄としては始めてのものである。又ポチンシロン山の手前（東方）から東側山腹を次高山迄の蕃人狩獵路の先行、學校團體として斯くの如き難コースの實行等も新記錄であつた。

次に日本山岳會員、カナダ山岳會員を兼ねた九州の北田正三氏が再び渡臺して、臺灣山岳會の井上一男、宇佐見守兩氏並に新竹州澁木巡査及び竹東郡蕃人と共に七月十一日先づ井上溫泉より正路を大覇尖山に到り、十三日之に登頂、丁度此の日前記船曳氏の一行は北田氏一行に僅か先んじて登頂し下降して來たのに出會、北田氏一人は單獨で南面中央のチムニーを初登攀し、大覇尖山新登頂路の可能性を確證した。一行は之より稜線傳ひに南下して西側からポチンシロン山に新登頂、ムトロップ山（三七一二・一米又はシミタ又はユンタガ山）に殆ど稜線通りに北東側から新登頂、次いで筆者等前年のコースを逆走して十五日カランタックン山から次高山に到り、シカヤウ社に下りた。此の行こそ大覇尖山・次高山の所謂「聖なる稜線」のトラヴァースを殆ど全部完成した最初である。それに大覇尖山外二峰の「より困難なる新しき側からの新登頂」を功績に殘した（臺灣山岳第七號〔昭和八年十一月〕一三九頁—井上一男「大覇尖山・次高山初縱走の記錄」、山と溪谷第十六號〔昭和七年十一月〕三六頁—北田正三「大覇尖山・次高山の縱走」）。

八月になつて臺灣總督府交通局鐵道部の山岳部員横田太郎、高橋又市、境英雄、今井淳、田内五氏の組は、次高山・大覇尖山のトラヴァースを逆に行つた。初めは筆者等と同樣にシカヤウ社蕃人を連れたが、カランタックン山から先は同行を肯ぜずして去つたので、登山者のみの未踏地行となり、天候の不良も手傳つて、一行は辛

苦を嘗めて縱走した。然し所謂ガイドレス・クライミングの行としてのトラヴァースは此れが最初である（本會々報第十二號〔昭和七年二月〕四頁「臺灣山岳界近況」參照）。

尙例年行はれるやうになつた臺灣山岳會の次高山登山大衆行は、此の年の夏から下山に東稜經由のコースを取るやうになつた。

次高山を中心として更に新方面の開拓をしたのは臺北高校から東京帝大に入つた鹿野忠雄氏（本會員）である。同氏は七月中旬、大甲溪源流の部分的遡行、次高山東山稜の精査、バットアノーミン山（三六一三・六米）少しく南方のユボラン山（三三一一・五米）より次高山迄の稜線の文化人としての初縱走を試み、自然科學的新研究材料を得たと共に登山としての業績を擧げたのである（臺灣山岳彙報第三年〔昭和六年〕三二頁）。

鹿野氏は其の後尙臺灣の山行を續行し、七月末郡大山登山（大正十五年吉井氏初登に次いで二回目）、八月になつて郡大溪無双（ムソウ）方面よりウマボンゴ山（三一二六・一米）初登、稜線を辿つてウラモン山（北側よりの新登頂）、秀姑巒山、大水窟山等を登山縱走し、八日尖山單獨行（文化人第二回目又は第三回目の登頂）、二十六日より新高主山、南山に登り、地圖の所謂南玉山（ナンギヨクザン）（三三九一・二米）に初登、東山へ北東ルンゼよりの新登頂（以上新高グループは警察官眞瀨桓丑平氏及びブヌン族マキリタケシタホアン同行）、九月になつてから郡大を發して東郡大山へ登り（大正十五年高野氏調査初登後始めて）、ウタベ山（三四八四・八米）及び東巒大山（ヒガシランダイザン）（三四六五・五米）へ初登、再び東郡大山を經てリリヤハ山（三四四一・二米）、ワハシパン山（三三五五・五米）、マショゾカン山（三二四六・一米）等の地圖上無名山の幾つかを初登縱走してマシタルンに下り、五日再度ウラモン山への登行を始め、マスブル溪を經てマリガナン山（三五六六・七米）に登り、ウラモン山に再び達し、無双に下り巒大駐在所

を經て蕃地を出て、九月十五日さしもに長い山旅を終つた。鹿野氏山旅の目的は單なる登山のみならず地學的、生物學的及び蕃人の研究にあつたが、一期にかほど多量の登山、しかも少からぬ初登並に先蹤行をなした事は驚嘆に値する。純登山家の立場そして官憲の力を殆ど藉りない科學的探究者として、昔時野呂寧氏や森丙牛氏、近代吉井隆成氏、伊藤太右衛門氏の如き山岳專門職ともいふべき人々に匹敵する登山業績を擧げた事は、臺灣登山史上特筆すべき事柄である（臺灣山岳彙報第三年〔昭和六年〕三六頁、本誌第二十六年三號〔昭和六年十二月〕一頁―鹿野忠雄「新高南山と南玉山の登攀」、同第二十七年一號〔昭和七年五月〕五九頁―鹿野忠雄「新高東山の登攀」、同二號〔昭和七年九月〕四二頁―鹿野忠雄「尖山單獨行」、同三號〔昭和七年十二月〕四五頁―鹿野忠雄「秀姑巒山脈」、同二十八年一號〔昭和八年四月〕三七頁―鹿野忠雄「東郡大山塊」）。

右の記錄に比すれば他の山々に於ける夏季新方面の登山は寥々たるものであつて、新高山、次高山、大水窟山、秀姑巒山等の普通コース登山の外に、臺北一中山岳部がシンカン山に中學校團體として始めて登つた事と、南湖大山に於ける臺北工業學校山岳部千々岩助太郎氏等の日程短縮を可能ならしめた登山を揭げ得るのみである（臺灣山岳彙報第三年〔昭和六年〕三二頁、同第四年〔昭和七年〕五頁）。なほ千々岩氏及び臺北高校山岳部の河南宏氏等は夫々別箇に此の夏日本北アルプスを訪れた。

昭和六年の秋も大きな登山記錄はなくて淋しかつた。只一つ十月中旬二日續きの休日に臺灣山岳會の高尾、田代、小原、岡野、西村、出羽其の他の諸氏が臺北から强行して巒大山に試登し、登頂は終に出來なかつたが、近郊登山の三千米級への延長發展の最初のあらはれとして意義ある記錄であつた。なほ中級山岳又は之よりも低いが特殊の山岳地に短日間の遠出をしたものに、十一月中旬の田代、高尾、出羽、岡野諸氏の鹿場大山登山と、同

じ頃齋藤三男、井上、千々岩、永石、堺、今井諸氏及び筆者の臺北組と宇佐見、田中列次氏等臺中組との同合による南投火炎山登攀があつた（臺灣山岳彙報第三年〔昭和六年〕三六及び四〇頁）。

右の外昭和六年度の臺北中心の小登山は活潑なものであつて、大屯火山彙は益々多くの人々に親しまれ、躑躅花時及び積雪時には特に賑はつた。其の他角板山方面や、猴山岳、直潭山、五指山、南港山等が大衆登山地となり、五寮崙山、六寮崙山、鷄籠山、東眼（トウガン）山、桶後溪より宜蘭越、獅公髮山、汐留の大尖山、ブチヤシ山（ロッペイ山）、南挿天山（一九一五米）、塞口山、鹿場大山（既記）等が近郊登山地に取り入れられた。岩登も北投附近、親指山、青潭溪奥、筆架山北側、直潭山南側の溪、大桶山西側の溪、皇帝殿山、塞口山西の岩峰、鳳髻尖等で行はれた。又臺中中心の小登山では明治溫泉キヤンプ行や新竹火炎山、南投火炎山登攀（既記）などがあつた。

昭和七年

既に本時代に入つて年末年始にかけて通常登山路による新高山其の他の蕃地旅行並に登山は最早年中行事と化して來たが、警察側では登山者宿泊の世話をする警察官の勞苦を思ひ且つ蕃地とても正月は内地山村と違つて新曆による正月行事並に休養をせねばならないので、正月登山は遠慮して欲しいといふ達しが昭和六年末から强調されてゐた。然し澎沛として起つた登山熱の前には、かゝる障害も何等かの手段で乘り越えられて、新高山方面に二つの記錄的登行が獲得されたのである。

其れは臺灣山岳會の中崎大三郎、武上耕一、結城數馬三氏の新高主山、大水窟山、秀姑巒山、ウラモン山（登頂せず）行、及び同會の氷石淳、宇佐見守兩氏と筆者の組の新高駐在所を中心とする放射線的登行の二つであつ

た。前者は正月の秀姑巒山―ウラモン山の新記錄であり、且又中崎氏が南駐在所からウラモン山往復が強行一日で可能である事を登山家的見地から確かめたものであつた。後者は個人及び天候の條件惡くして僅かに奈落坂ルンゼの雪溪より東山の往復登頂、常道より主山、新高駐在所附近の針岩（ティドルス）初登攀位の實績であつたが、全然登山家のみの行であつた事も始めてのものだつた（本會々報第十二號〔昭和七年二月〕五頁、臺灣山岳彙報第四年〔昭和七年〕六頁、臺灣時報一五二號〔昭和七年七月〕一頁―沼井鐵太郎「放射線的登行と新高山」參照）。それから昨年春開通した關山越道路は既に山林課調査隊が一、二回と警察關係の人々が越えた丈であつたが、此の年の二月には石川理蕃課長一行の巡視登山あり、又三月になつて京大沼田教授が高雄州側を廳界迄植物採集に歩いた事がある。

右の外正月から六月上旬迄は不幸にして臺灣高山に關する何等の記錄にも接しない。只中級山岳の若干が登山家に探行されたに過ぎない。卽ち先づ年末年始の休日中、臺灣山岳會の木田文治、今崎秀一、田口與四郎、山村瀧勇四氏は新竹州下のナゼ山（一五三六米、ルック山）、ケイフイ山（一五七六米、ラッカ山）、鳥嘴山（一七九五米、ボレック山）等の山脈を始めて探つた。又、同會の高尾勝夫、出羽佐久一、岡野宗一、小原泰二諸氏は正月初殘雪降霜結氷の北挿天山（一七四七米）にガレ場からヴァリエーション・ルートによつて登つた（臺灣山岳彙報〔昭和七年〕六頁）。又臺中州東勢國民學校の一行數名は同じ頃大尖山（二二二五・〇米、鳶嘴山又はモモマーガル）にアマチュアとして初登した（シルビア第三卷二號〔昭和七年〕五九頁―今川三郎「大尖山に登る」）。越えて二月氷石淳氏と筆者の加裡山（二三一八・七米）登山あり、此の山は既に此の年か前年かに河東組の山地事業關係の邦人に登られてゐた（臺灣山岳彙報第四年〔昭和七年〕九頁、臺灣山岳第七號〔昭和八年十一月〕一七〇

頁)。更に六月になつて臺灣山岳會臺中支部の田中列次氏外十二名が出雲山(イヅモヤマ)駐在所から醜峰山(二〇二〇米、大正十三年九月福谷氏、昭和五年三月福田氏等に登らる)に往復し、翌七月同じく田中氏等三名は大尖山に登つて、愈々此の山脈の登山價値を認識せしめるに至つた(臺灣山岳彙報第四年〔昭和七年〕三九頁)。

尙四月に於て特に附記すべき事は、國立公園豫定地の聲高くなつたタロコに就いて視察に赴いた田村剛博士が、調査後木瓜溪、サンサン溪と合せた所謂大タロコを大風景地の折紙をつけ、東臺灣宣傳協會の努力により其の後探勝者が增加するに至つた事、他は臺灣山岳會員出羽佐久一氏が內地歸省の折に日本北アルプス上高地から槍ケ岳を登つて、臺灣から內地へ積雪期登山の端緒を開いた事である。

六月中頃、筆者は公務を帶びて關山越道路を里壠(リラン)・新武路(シンブロ)方面の東側から越え、登山としては峠頂上附近の約三〇〇〇米のピークに立つたきりだつたが、此の道路を中心にして向陽山や關山、ウハノシン山等種々の登山に關する資料を登山界に提供する事が出來た。(臺灣山岳彙報第四年〔昭和七年〕三五頁乃五六頁、本會々報第十七號〔昭和七年七月〕四頁)。

七月には臺灣山岳會は新高山、次高山の例年通りの大衆登山の外に、二つの大きなエキスペディションを出した。次高山もリーダー千々岩氏の計らひで頂上に泊り(陸地測量部員が山頂に屯して測量中だつた)、之から東稜、キヤワン溪、ピヤナン鞍部を經てピヤナン社迄强行し、一の新機軸を出した(臺灣山岳彙報第四年三九頁)。

エキスペディションの一は佐々木舜一氏をリーダとし河南宏、淸水善次郎、古平勝三、桑子政彦、山河友次、荻坂剛諸氏から成る大覇尖山・次高山トラヴァースの植物調査・寫眞撮影の專門的研究登山であつた(臺灣山岳彙報第四年四四頁、臺灣山岳第七號〔昭和八年十一月〕六〇頁——佐々木舜一「大覇尖山及次高山連峰縱走記」)。

も一つは千々岩助太郎氏をリーダーとし、齋藤三男、田口與四郎、宇佐見守諸氏等から成る畢祿山・中央尖山・南湖大山の大縱走であつた。中央尖山・南湖大山の間は前年度解決された大覇尖山・次高山の縱走と共に心ある人々の第一の探險的及遊技的登山興味の焦點だつたが、之に加ふるに畢祿山・中央尖山も一緒に通して完成され其の間のルムラモル山(?、三四二〇米)、南湖大山南峰(三五〇〇米)等に初登した事は、正に昭和七年中登山業績の筆頭である。此の長大な山稜は登攀技術上の價値は豫想以下だつたが、中央山脈の北中に於て記錄を缺く主稜が無くなつた事に於て、タロコ・溪頭兩蕃敵視の人爲的困難を當局の了解下に案內人夫なしで最後の南湖大山の下りを切り拔けトラヴァースを完成した事に於て、劃期的な仕事であつた。最後の處置は近代登山の巧妙且躍動的なマネージメントの一であつて、之に自信を持つ迄リーダー千々岩氏は再三南湖大山に登山研究してゐたのである。なほ此の行は其の長途なる爲、天候確實ならざる夏季の爲に中央尖山南方無名山其の他の場所では强いて惡場を試登しなかつた(臺灣山岳彙報第四年四四頁、臺灣山岳第七號一四七頁—千々岩助太郎「畢祿山・中央尖山・南湖大山」。

其の他夏季には先づ岡山正氏等が七月ハック大山へアマチュアとして恐らく始めて登頂した(シルビア第四卷一號〔昭和八年〕六五頁、臺灣山岳彙報第八年〔昭和十一年〕二七頁)。それから臺北一中山岳部員が新沼、二宮兩教官に率ゐられて七月大覇尖山に登攀したが、天候激變を慮かつて警察道路から往復二日の强行をなすを得た。之と反對の山の行き方をしたものに、同じく七月下旬見元了氏に率ゐられた臺北商業學校生徒數名がシカヤウ大山中腹に一泊露營して從來二日で往復した次高山登山を三日がゝりでゆつくりやつた行もある(臺灣山岳彙報第八年四九頁)。又八月中旬には九州帝大教授江崎悌三氏は昆蟲採集研究の目的で東より關山越を越え(江崎悌三藏

版「第二回臺灣採集旅行記」(昭和七年十二月)三七頁)、同じ頃伊藤太右衛門氏も同じく關山越をした。

又內地の高山遠征として山とコースは珍らしくないものだが、嘗て本會の長老大平晟氏が遙々新高山・南湖大山を登りに行つたのを逆に、臺灣山岳會の長老大橋捨三郎氏は島田彌市氏と共に無岳、大天井岳、槍ケ岳等を踏破し、元氣で臺灣に歸つた事は記してもいゝと思ふ。

秋になつてからは中級山岳では新竹の有志登山家が十月十五乃至十七日の二日半で、ピリン溪(風尾溪)から鹿場大山に登り、上ノ島溫泉を經て下つた强行登山があり、又稀れに蕃人が通るといふ阿里山塔山(二四八〇・五米)の南面峭壁を十一月營林所員一行が文化人として最初に登攀した(臺灣の山林九九號(昭和九年)四一頁—南山燕「塔山斷崖正面攻擊記」、臺灣山岳第十號(昭和十四年三月)六一頁)。

高速山地では十月及び十一月の二回山林課の大調査隊として始めて大霸尖山・次高山のトラヴァースを、北からと南からと實行した。但し此れ等は臺灣山岳會の其の夏の行と同樣いづれもシミタの最惡の惡場は避けて行つたらしい(臺灣山岳彙報第四年五七頁、同第五年(昭和八年)四頁)。

なほ本年理蕃史上に又も一のブレーキとなつた大關山事件なるものが十月九日に起つて、折角開けた關山越道路も暫く一般に閉される事になつた(臺灣山岳第七號(昭和八年十一月)三五頁—瀨野尾寧「大關山事件の顚末」參照)。

此の年何月か不詳であるが、陸地測量部の齋多技師は次高山南走山脈中のアトハン山(三二八四・五米)に初登し、之を佳陽大山と命名した(臺灣山岳彙報第六年(昭和九年)三頁)。尙又昭和五年乃至七年の間に伊藤太右衛門氏は東側臺東廳から大武山に登山したやうであるが、年月は確としない。

昭和七年度の臺北を中心とする小登山は、前年よりも更に其の分野を廣く且つ深く進められて行つた。新しく登山家既知のリストに入つた山地は、ケイフイ山・烏嘴山の山脈や北挿天山のヴアリエーション・ルート及び加裡山の如き既記のものから、大屯火山彙の烘爐山、石曹子坑、火炭窩坑、大屯山西の溪、面天山北の溪、小觀音山火口瀨、竹子山南東の溪、大屯山の粗坑、八連溪、南勢溪流域では竹坑山、タボーク山、ガットン溪よりシラック溪、挿天山脈ではブチャシ山より北挿天山、南挿天山よりララー山、其の他基隆水源地の山々、宜蘭側より阿玉山、白石山より鹿窟尖等あり、此等の内或るものは直ちに初心者同行の大衆登山にも適用された。大屯の山山が隈なく歩かれるに從つて登山家は一方挿天山脈の未踏境を追求し、他方近隣の谷間と岩場を探求したり、新竹州の五指山や馬那邦（マナパン）山へ小遠征を試みるやうになつた。又臺灣山岳會が臺銀和樂路會に依頼した七星山登山コースの一齋調査は集中登山の一新形式であつた。岩登は鳳髻尖に於て最も深く研究されたが、其の附近の惡絶な塞口山石壁の新登攀、直潭山南面の溪、龜山附近のルンゼ、筆架山北の斷崖、汐留大尖山西の溪、大屯山の粗坑、八連溪、面天山裏の溪、皇帝殿山なども探索され、且又一般の求めに應じて臺灣山岳會は四日間に亙るロッククライミングの講習會を開催したりした。

臺北に於ける小登山が斯くの如く登山意識潑剌たるものがあつたに對して、他の都市では活躍が極く少く限られてゐた。卽ち新竹を中心として五指山及び鹿場大山、臺中を中心として大尖山の山脈、喜義を中心として大坑山、花蓮港を中心としてハロク臺、クッキリ山等に過ぎない。

昭和八年

昭和七年々末から八年々始にかけての季節程冬季登山が振ひ立つた事は灣臺登山界始まつて以來無かつた。第一に池田雄之進氏をリーダーとする臺灣山岳會の菁萊主山南峰及び能高越は何等新奇のものでは無かつたが、霧社事件以來久し振りで同會員の通過であり、又、天長斷崖横斷の新道路によつて木瓜溪の美を傳へた事で聊か注意に値する。第二に武上耕一、浦上郡太郎兩氏の中央尖山登山は、コースは新しいものでなく、登頂も臺北一中、ウオルトン氏(?)、山林課寺西・伊勢兩氏、千々岩氏等に次いだものであつたが、冬山としては最初の行であり、又日數短縮の可能性を發見した事で注意せられる登山だつた(臺灣山岳第七號〔昭和八年十一月〕一一五頁—武上耕一・浦上郡太郎「冬期中央尖山登山記」)。第三に齋藤三男、今野三郎兩氏と筆者の清水山(ティスザン)(二四〇七・三米)行は、案内人夫無しで最も急峻な東海岸側からの山稜及び岩谷を登攀し、石灰岩山の登攀的性質を調べる事が出來た。清水山の初登は既に大正五年頃測量の爲に行はれ、近年にも陸地測量部員が登山して頂上に六日間滯在したといふ(本會々報二十二號〔昭和八年一月〕一〇頁、臺灣山岳第七號九二頁—沼井鐵太郎「清水山」)。第四に出羽佐久一、岡野宗一兩氏は八通關から積雪の新高主山及び東山を試み、其の間の新しいルンゼを初登攀し、主山附近で岩登練習も行つて來た事に新記錄の價値が認められる。

以上は臺灣山岳會のセミオフイシアルな山行だつたが、尙此の他に同會の田口與四郎、田中武男、山下只三、松本芳夫四氏は中級以下の山岳ではあるが、南勢溪源流地の北挿天山、タマン山、クル山(二一〇一米)、メクイシモ山(一九〇六米)、シナレク山(一八六六米)等挿天山脈南方の過半登山家未踏峰を登つて新記錄を提供した。又同會の小原泰治氏は菁萊主山西面の峭壁を試登したが、同行の蕃人に逃げられた爲、絶頂を空しく殘して下山した。此の西側よりの直登は全く始めての記錄である。それからBBS山岳會と稱する一組はタロコからロオン

溪を經て畢祿山に登つた。此れは既に冬季にも通られたコースだつたが、タロコから此の山だけを目的としての往復は始めてだつた。此の他能高越、ララー山越、ララー山方面、上ノ島溫泉方面等の山越えや植物採集を兼ねたハイキングも行はれて賑やかな登山界の冬だつた。急に角斯界も漸く夏山偏重の舊態から脱しつゝある事を示したのである（臺灣山岳彙報第五年〔昭和八年〕八―一一頁）。

一體臺灣高山の積雪期は一定してもゐないで、年によると曆の上の眞冬でも雪が消えたり、又は十二月から五月迄銀嶺が輝いたり、六月になつて降雪する事も稀にある。然し先づ一月中旬から二月一杯又は三月上旬頃迄が眞の冬山の雪で、三月中頃から四月にかけては凍結融解の輪廻を反覆する春雪となり、其の後は全く溫帶地方高山夏山樣の殘雪となつて五月中にとけてしまふのが通常であるやうに見える。其の内の眞の冬山の時季に登山を試みる事は、一般社會の休日の關係もあつて中々實行され難い。昭和八年も其の通りで、折角正月に冬山隆盛の氣運を見ながら、其の後何の報告も得られなかつた。そして三月には新高山行の二つの報告が臺灣山岳會の機關誌に見られるが、其れは登山記錄的の何物でもなく、又例年と違つて降水量（降雪量）が非常に缺乏した年だつたので相當數の登山者も新雪凍雪に惱む事は全然無かつたらしい。

なほ三月には登山間接の事象として、新高山北邊の郡大溪及び丹大溪に住む郡蕃及び丹蕃の移住が開始された事を知る。蕃人特に高山地域蕃人の低地移住は所謂蕃人授產及び統御上の行政手段であるが、登山案内人夫の供給上に關しては、其の後の丹大方面の如く、大分問題になつて來るのである。

四月下旬陸地測量部千葉技師の一行が臺灣に渡つた。此れは其の後數ケ月に渡つて一班は次高山中心、二班は畢祿山中心、三班はハック大山中心に地形測量する爲と報ぜられた。元來測量目的の登山は山中又は山頂に滯在

する事最も長く、地形圖發行の基礎實測は隨分多くされてゐるものであるが、其の仕事は長期に亙つて質實である爲に、登山記錄は殆ど公表されてゐない。公平な登山史編纂に當つて此の點が誠に遺憾であり、從つて登山家の編む登山史は登山家記錄的登山史の範圍を餘り多く出てゐないと言つてもいゝのである。

五月下旬から六月にかけて佐々木舜一氏は植物調査の目的で他の調査隊と共に臺東海岸山脈の猫公富士に登り、後木瓜山(一四二六・一米、初登は夙にせらる)及びタロコ大山に登つた。又鹿野忠雄氏は六月十二日臺東海岸山脈の都鑾山に登頂し、次いで紅頭嶼に渡つて同島最高の紅頭山(五四五米)にも登つた(臺灣山岳彙報第五年四九及び五四頁)。

六月には臺灣始政記念日の十七日を期して臺灣山岳會の記念すべき二つの事業が世に生れた。其の一は新高登山地圖の發行であり、一年有餘專門家及び會の主腦者關係者の衆智を集めて出來た、最も信頼し得る登山用地形圖であつた。其の二は十八日に落成式を擧げた大屯山・小觀音山間鞍部附近の登山家・ハイカー用純山小屋振衣亭の建設竣工である。尙又臺灣山岳會は既に生れてゐた阿里山國立公園協會並に大太魯閣宣傳協會と共力して、或は展覽會或は國立公園豫定地登山を行つた。後者は本會の槇有恒氏を聘してタロコ峽から合歡連峰・嵩萊主山連峰縱走、能高越東側の登山檢分をしたもので、六月二十日乃至二十九日の行、大太魯閣宣傳協會から後援を依頼された臺灣山岳會からは同行の代表として永石淳、中崎大三郎兩氏を派遣した(臺灣山岳彙報第五年〔昭和八年〕三四—三七頁及び四一頁、臺灣山岳第七號〔昭和八年十一月〕卷末圖版及び一七九頁、本誌第二十八年三號二〇一頁、臺灣時報一六六號〔昭和八年九月〕八一頁及び同一六七號〔十月〕九六頁—永石淳一「太魯閣峽より嵩萊主山連峰縱走記」)。

七月の所謂登山期早々臺灣山岳會は新高山及び南湖大山に普通の登山班を出したが、新高山班は婦人數名を含む全くの大衆班で、高山病者發生し、リーダー及び其の格の人が大分苦勞した登山であつた。立派な登山道路が出來ても新高山程の高度になると萬人に萬全とはいひ得ない事を示した一例である。此の行新高駐在所では霰に擊たれ、秀姑巒山脈の高所は眞白く降りつゝあるのを目擊した(臺灣山岳彙報第五年四一頁)。

此の夏季は昨年秋の大關山事件既に其の年當初落着し、又昭和三年郡大蕃脱走以來新高・八通關警備線直南の入蕃不許可方針の主因だつた未歸順蕃タマホ社頭目ラホアレ一派の正式歸順が濟んだばかりの時で、臺灣の山歩きには好運來のシーズンだつた。此の風雲に自ら知つて乘じたわけではないが、同志社大學及立敎大學の各山岳部が夫々一班を臺灣に遠征させ、各箇又は共同登山をして內外を刺戟したのである。此の二つの內地學校山岳部の臺灣遠征は長日間島內各方面に渡り組として活躍した事で其後も今日迄餘り比を見ざる所謂快速强力部隊の遠征だつた。特に同志社大學の組は華々しい記錄を擧げた。臺灣としての記錄登山だけを揭記すれば、七月中旬後同志社大學兒島勘次、入江保太、鹽見正の三氏は京大植物學敎室の大井氏と同行して南湖大山ブナッケイに三夜滯在し、豫定の中央尖山往復は出來なかつたが、各方面から主山登攀、南峰往復(入江、鹽見兩氏)を行つた。又七月末から八月初旬迄は臺灣山岳會の新高山特別班として行つた筆者が總リーダーとなり、上記同志社山岳部三名及び立敎山岳部小原勝郎、山田正夫、湯本正久、中島雷二の四氏と共同登山を新高山各峰に試みた。卽ち南山東稜を最高點から二つ東のピーク迄、南山西南稜(三五八四・〇米、小南山)の初登縱走(以上臺南州伊達巡査同行す)、主山・東山稜線北壁のRⅢルンゼ登降、RⅣルンゼ下降、東山東峰北稜Ⅰ西面より稜を經て東山東峰新登頂(兒島、入江二氏及び筆者)等を記錄し得た、最後の登攀は高距四百米の岩登で過半アンザイレンし、臺灣に於て

最長のものであつた（新高主山・東山稜線北面並に南山の地點記名に就いては臺灣山岳彙報第五年〔昭和八年〕四六頁拙稿及び圖版參照）。なほ又南山北方約三六〇〇米地點及び臺中州側道路長命水附近で行つた二つのハイキヤンプも恐らく最初のものであつた。それから同志社の兒島及び鹽見氏は八月中旬大覇尖山・次高山縱走をしたが、其の間ムトロップ山南側野營地に三夜滯在して、兒島氏は同行のタイヤル族ウタオ・ナウイと共にムトロップ山北壁（シシタ）最初の下降を敢行し、三叉點南面下の溪を登つてから、も一人ユーミン・ピツをも伴つてポチンシロン山西壁を登攀往復した。兒島氏等の積極行動はなほ止まず、八月末臺灣山岳會の關山班に加はり、リーダー千々岩助太郎氏と共に關山越を西から越え、その途大關山駐在所からウハノシン第四溪と稱する凋澤から中央山脈に達し之より南方直ちに關山に登つた。純登山家としての關山登頂の最初であるが、此れは警察關係に於ては非公許登山である、又登高を熱望するの餘り一行中の一人が先駈けしリーダー及び警備の警察官の感情を害した事は未歸順蕃なほ不穩の疑ひがあつた際とて遺憾であつた。なほ以上の新記錄の外に普通の登山旅行として上記兩山岳部の一行は大甲溪道路、能高越、大覇尖山往復等を行つてゐる（本會々報二十八號〔昭和八年九月〕七頁、臺灣山岳彙報第五年四五—五〇頁及び五三頁、立教大學山岳部々報6〔昭和九年六月〕中島雷二「新高山塊・能高越え・大覇尖山」、關西學生山岳聯盟報告第五號〔昭和九年七月〕二八頁—鹽見正・入江保太・兒島勘次「臺灣遠征（一九三三）報告」、兒島勘次著書『臺灣の山』〔昭和九年七月二十五日發行、全六二頁〕、臺灣山岳第八號〔昭和十一年六月〕六一頁—千々岩助太郎「關山」）。

なほ右の他大覇尖山・次高山の縱走は臺南高工山岳部一行も遂行し、大覇尖山のみの往復は臺北工業山岳部でも行つたが、後者は歸途マダラ溪・カリ溪合流點を經由して結城駐在所に出る新コース（蕃路）をトレースした。

又春から在臺旅行中だつた鹿野忠雄氏は八月中旬から知本溫泉を發し知本越（一六六七米？　臺東屏東道路）を越えて屏東に到り、標高は低いが特異な此の横斷道路の現狀を山岳界に報じた（臺灣山岳彙報第五年四八及び五四頁）。

概觀して此の年の臺灣の夏山は登山家の寄與が更に新しく深味を增したが、一方又登山の量も前年よりも遙かに增大し、學校關係以外一般社會人及び婦人の登山及び蕃地旅行が盛になつて來たやうであつた。阿里山から新高山に向つての自動車道路も一部開鑿されつゝあつたが、其の工事中なる故を以て、此の夏は兒玉山越えをしなければならなかつた。それから八通關並にタータカ駐在所にも新宿舍の建設が着手された。新高山以外に大衆行のあつた所は大平山、ピヤナン・松嶺越等であつた（本會々報二十八號七頁）。なほ七、八月中在臺登山家は島外には相當發展し、日本北アルプスの穗高・槍、小槍、燕の諸岳、四國の五劔山、九州の久住山、鶴見岳、北海道の藻岩岳、手稻岳、余市岳、札幌岳、大雪山、十勝岳、朝鮮の金剛山等に登つた。

昭和八年の夏山は九、十月にも活潑な登山者を迎へた。第一に本會員田中薰氏が九月上旬鹿野忠雄氏及び鹿野氏の助手アミ族トタイプテン君と共にムルロアフよりゲリロー山、バトッノフ山を經て南湖大山に縱走し、ブナッケイを中心として氷河地形の觀察研究をしたのである。登山としては南湖大山主山、北峰、東北峰、東峰及び之よりマビーサン山への稜線を下つてタウサイ峰（三〇三〇米餘、新稱の石灰岩峰）初登頂、シラガン溪源頭の岩小屋發見と溪下降よりタケジン附近に出る新ルート開拓が記錄されてゐる（本會々報二十九號〔昭和八年十月〕六頁、本誌第二十九年一號〔昭和九年五月〕二五頁―田中薰「南湖大山の記」、臺灣山岳彙報第五年五六頁）。

次に十月初旬臺灣專賣局の野間口徹志氏（臺灣山岳會員）を伴つた筆者は、和社溪樟神木所在地に於ける久須乃

木祠祭典に列席の後、東埔より新高山(主山)に登り、主山北東尾根(最も長大なる北側支稜)を下り、主山北稜に試登したが、落石の多い條件の悪い日だつたので登攀は下端のみで中止し同稜周囲を偵察して阿里山側に下り、阿里山からは廢道を傳つて阿里山々塊を北に縱走して、烏松坑山(二二六六米)、五叉崙山(二二〇〇米)、金柑樹山(二二二〇米)等を經、溪頭(地名)の東大演習林事務所迄一日で長驅した。同じ頃鹿野忠雄氏はトタイブテン君と共にピヤナン社より桃山に登り大顆尖山往復、次高山に縱走、山上では屢々滯在して各專門の觀測研究を遂げたが、ムトロップ山南側野營地附近で同行蕃人に逃げられ、登山としても辛苦を嘗めたものだつた(臺灣山岳彙報第五年六一頁)。

次いで十月下旬には佐々木舜一、手島龍雄兩氏は最近公許後第一回の關山登頂及關山越を行つた。此の登山の目的は植物及森林調査であつた。斯くて種々の問題を登山界に送つた關山並に關山越も今後一般登山家に親しまれると思つた矢先、十一月末に至つて黑壠附近の逢坂(アウサカ)駐在所に突如蕃害が起つて再び此の地域は一時閉ざされたのである。記述は少しく戻るが、十月末から十一月初めにかけて早坂博士、青木繁氏等數名をメンバーとする臺北帝大山岳倶樂部では地質、森林調査及び植物採集が目的で阿里山口から新高山を越えた(臺灣山岳彙報第五年六五及び六六頁)。

又十月下旬から十一月下旬にかけて、長期登山研究の第一人者鹿野忠雄氏は、やはりトタイブテン君を相手に次高山彙を精査し、佳陽(カヨー)からミノロー溪を遡つて劍山(ケンザン)(三二二七・〇米、ビリホン)に初登、佳陽大山、フケホン山、ユボラン山、バットアノーミン山を縱走、一旦スカイラン溪に下り、シカヤウより再び三度次高山に登つて滯在、總計二十日ばかりの露營生活を過してシカヤウに下りたが、此の探究で確信を得た同氏は既に豫報してゐ

た本山彙の氷河地形に關し終に詳細な報告を學界に投ずるに至つた（本會々報三十二號〔昭和九年一月〕五頁、臺灣山岳彙第六年〔昭和九年〕三頁、本誌第三十一年二號〔昭和十二年三月〕一四二頁）。

昭和八年度の臺北中心の小登山は又一層旺盛な活氣を呈したが、此の年前後から小登山でも探險には近代スポート的登山の精神及び行き方で行ふ登山家と、靜觀派或は低山趣味或はハイキングの精神又は行き方で行ふペデスツリヤンとの二種別が區別して見られるやうな傾向を生じた。指南宮から猴山岳登り、桃園臺地ハイキング、五指山、鳥尖連崗、角板山越、安通越、鷄籠山、大嶺峠、其の他大屯火山彙の通常のコースが屢々歩かれるのは後者の場合である。臺灣山岳會が大屯山に作つた山小屋振衣亭は其の開拓者によつて新味のある山行に用ひられたとはいへ、大部分はワンダラー、ハイカーの塒となるのであつた。臺灣山岳會の月例登山地には嘗て先輩が開路的苦心をした山、例へば直潭山、加裡山、三針後山、塞口山、大桶山、ブチャシ山、チーロック山、竹坑山、ララー山等が取り入れられた。そして此の年登山家の新領域となつた山地は、江頭（カンタウ）より面天山への稜線、栄公坑山北尾根、竹子山北峰、小觀音山火口瀬、同山火口壁西部及び西稜、同東側の溪谷、桃園臺地、塞口山、小阿玉山、南挿天山より北挿天山、ブチャシ山よりカボ山、ガットン溪・ルモン山・ハブン・中嶺越、そして臺中支部と合同して再び大尖山へ、及び治茆山一つ手前のピーク迄小遠征等であつた。岩場では、鳳髻尖岩場は本格的に數回新箇所が登降され、又此の年から基隆島が登山家に渡航登攀され、石笋尖山東稜の岩稜及び白山の岩場が新しく初登攀され、八連溪下降、面天山北の溪等も再び探究された。昨年迄臺北に次いで登山の盛だつた臺中市中心の小登山は僅かに臺北組と合同の大尖山行より外は知られてゐない。それに取つて代つたのは善きリーダー又は果敢なクライマーを有する宜蘭又は嘉義中心の小登山であつた。卽ち宜蘭では阿玉山、太平山の旣知山地の外に烘

爐地山、三針後山、鴻子山(礁溪富士)が記錄され、嘉義では岩仔山・半天岩山・大湖山の縱走・際頂山、獺頭山等が登頂リストに入つた。特に際頂山の行は遭難の一歩手前によく危地險崖を脱し得たものであつた(臺灣山岳第七號一七三頁—井口刀水「或る日の際頂山」)。

昭和九年

前年末から年始にかけての冬季登山は更に活氣を呈し、蕃地正月登山が或る州は全部禁止又は場合によつては撰擇されて禁止されたにも拘らず、臺灣登山界の冬山への着目が益々顯著となつて來た事を示した。

先づ新高山方面では四つの異る登山が報告されてゐる。臺灣山岳會の岡野宗一、橋爪清兩氏は氏等が屬する臺銀山岳部の喜多村氏と共に長命水附近にキャンプを張り(冬山長命水キャンプは最初)、東山北面直下の雪と蒼氷のルンゼ(東山北RI?)をアイゼンを履きピッケルを振つて登攀、東山・主山縱走もやつた。又、同會の山下只三、松本芳夫、大窪七郎三氏並に筆者は沙里仙溪・タータカ鞍部を經て新高下に到り、氷雪におほはれた主山北稜をアンザイレンして下降、大半を了したが天候不良、組の條件も惡くなつたので中止して頂上に引返した。又、趣味登山會の小林武男、小泉清兩氏は次高山から新高山迄登山及び蕃地旅行の短日間快速記錄を得た。此の他に秀姑巒山と新高山とをかけた臺灣山岳會藤田安二、下澤伊八郎兩氏の行がある(秀姑巒山よりの下山路は秀姑巒溪に沿ふ蕃路を取つた)なほ新高山通常コースの登山は他に少くとも五組はあつた。他の山岳では大武山連嶺が久し振りに臺北及び臺南の二つの組に登られた。臺北組は臺灣山岳會の新井良三郎、田口與四郎兩氏と總督府鐵道部山岳部の今井淳、松元巖兩氏の四名及び土肥巡査部長、平出巡査、下パイワン蕃人九名で、北大武山に

登つた。臺南組は臺南高工山岳部員六名で、南大武山に登つた。南湖大山及び中央尖山も臺灣山岳會員を主とする組に登られた。南湖大山の方は中崎大三郎、武上耕一、結城數馬、浦上郡太郎、野村諸氏、ブナッケイからは登山者のみで濃霧と吹雪の中を主山にアンザイレンして登頂敢行、ブナッケイに天幕を張り、下山路は前年田中・鹿野兩氏の踏んだシラガン溪源頭のコースに從つた。中央尖山の方は江藤英雄氏及び小熊博氏で、タウサイから既知のコースを登降した。それから山は中級の標高だが、北部山地に著しい登山家未登峰シッキウッス山（二四二〇米、シッキュス山）へは、臺灣山岳會の木田文治、土肥辰夫、德田佐、今野三郎、澤谷廸吉、横田時晴諸氏並にルモアン社蕃人五名が其の東尾根から登り、天候不良の爲暗夜强行下山した。此の山は既に近年陸地測量部員によつて恐らく初登せられてゐたものである。以上の外、能高越、ピヤナン越、ピヤナン鞍部及び太平山、中嶺越等の大小の通常コースがこのシーズン中に歩かれた（臺灣山岳彙報第六年〔昭和九年〕六―七頁、臺灣山岳第八號〔昭和十一年六月〕七一頁―木田文治「シッキウッス山登行」、ケルン第十號〔昭和九年三月〕二五頁―沼井鐵太郎「新高の冬山―主山北稜の試み」）。

年末年始登山が斯くも盛だつたにも拘らず、此の年は夏のシーズン迄大きな登山は全く無いといつてもよかつた。臺灣山岳彙報には近郊登山の外は僅かに四月中旬中級山岳のゲリロー山（二四九〇・二米）に太平山から木田文治氏が登つた通信と、千々岩氏、宇佐見氏又は筆者が內地及び朝鮮出張の際大菩薩峠、谷川岳一ノ倉澤、槍ケ岳、北漢山及び金剛山毘盧峰を訪ねた通信とが錄されてゐるばかりである。勿論之等とて何等登山記錄の新しいものでもなく、ゲリロー山の如きは何回も事業關係其の他で登られてゐたのである。なほ臺灣山岳會では此の年から夏季登山期直前に街頭進出をして臺北市內デパート內に「山の相談所」を開き、前からやつてゐた通俗

講演展覽會「山の夕べ」と共に爾後毎年開催する例となつた（臺灣山岳彙報第六年二九頁）。

昭和九年の夏季登山は、新高山の普通コースに於て最も多數且つ登山者激增だつたが、八月初旬タータカ駐在所近くに宿泊所「鹿林山莊」が竣成して益々便利となつた。大霸尖山と鹿場大山、南湖大山等も登られたが、七月中旬後者に於ける臺灣山岳會の登山はピヤナン鞍部方面への下山コースに蕃地地形圖八九〇〇尺峰から支尾根を有勝・鞍部の中間に下りる快適なルートを始めて下る事が出來た。又女性登山家の次高山登山は既に昨夏始めてなされたが、今年は南湖大山へも大崎忠一氏令妹が登つて、漸く新高山と嵩萊主山南峰以外登つた事のない女性（高砂族以外）の臺灣高山登山が始まる事になつた（臺灣山岳彙報第六年三三及三九頁）。

七・八月中そして昭和九年中最大の質量的エキスペディションが神戸商大山岳部臺灣偵察班日比野眞二、石田宗太郎、奥田五郎諸氏によつて遂行された。卽ち七月二十一日タウサイから中央尖山東尾根のボッカン狩獵小屋に出で、それより南湖大山・中央尖山間大鞍部に出る新コースの蕃路を通り、南湖大山に登り主山南西の岩小屋に始めて泊り、主山南東面で岩攀練習（タウサイ峰？）、之より中央尖山等を經て畢祿山迄縱走し新設道路により一旦タビトに下り、八月一日から新設合歡越道路を上つて合歡山・嵩萊主山連峰を縱走、能高越に出て八日埔里に下つた。南湖大山・畢祿山の縱走は文化史的トラヴァースの第二回であるが、北から南走は最初である。其他南湖大山・嵩萊主山に於ける岩攀等、此の山旅は全く記錄的のものであつた。此の大縱走の直後同校山岳部長の田中薫氏は再度臺灣を訪ね、タロコ奥地から登つて畢祿山・合歡山・嵩萊主山・能高山連峰の地形調査をした。

秋十一月半ば迄は登山史に記すべき何物もないやうである。十一月下旬臺灣山岳會の山小屋二つが新時代の名山南湖大山に建設せられ、其の後間もなく會長幣原坦氏によつてブナッケイのものは南湖山莊、キレットイのも

のは寄歴亭と命名された。共に臺灣蕃地の如き特殊山地に於ける番人無住の登山者用山小屋として最初のものであるが、其の様式は時代と土地に適する原始的なものであつた。又昨年頃から盛になつて來た國立公園運動は、遂に本年十一月北部の大屯國立公園協會をも生むに至つた。尙又内地鐵道省の登山・ハイキング宣傳奬勵策に追隨して、本島鐵道部でも本年春頃から此の方面に着目し、同部山岳部並に新たに囑託を依囑された筆者などが仕事に取りかゝつたが、此の年の秋には臺灣鐵道沿線から見える山の調査・撮影・スケッチを始め出した。又登山とは少しく違ふが、筆者が中心になつて右の仕事の一つとして芝スキー及び砂スキーを臺北近郊の低山や海岸で始めたのも此の年の秋冬の交からであつた（臺灣山岳彙報第六年四七及び五一頁、同第七年（昭和十年）三頁）。

高山登山業績は十二月になつて合歡越、新高山及び大霸尖山・次高山に見られた。共に登山としては別に記錄的のものではなかつたが、新高登山にはストーヴ煖房の設備された鹿林山莊や東埔の新設一般用宿舍（警察倶樂部）が利用された事が報ぜられ、大霸尖山・次高山の縱走は既に氷河地形問題の投げられた本山脈に同學の會員佐々保雄氏が渡臺研究の登山であつた（臺灣山岳彙報第七年三及び九頁）。

最後に昭和九年中の臺北中心の小登山實績を見れば、臺北近郊の山では大屯火山彙の山々、五指山、二格山、獅頭山等が多く登られてゐる。近郊の山にも人氣の推移があつて、前年山小屋振衣亭が大屯山に作られ、臺北州の同山彙施設が進展して歩き易くなつた爲に一般ハイカーは勿論臺灣山岳會の錚々たる連中も此の方面に足を入れる事多く、老梅溪遡行・竹子山登頂の如き新記錄も生れたが、一時登山家の積極的活動目ざましかつた挿天山脈奥山や南勢溪流域方面では、僅かに阿玉山、桶後溪越、大桶山等が報告されてゐるに過ぎない。以上の他に登山家の新領域となつた山には、倒吊嶺、伏獅山、南勢角山、新竹五指山、鷲公髻山（一六一二米）、白石山等の名

が數へられる。岩場では皇帝殿山、鳳髻尖、筆架山、面天山北の溪、基隆島等の既知の外に、烏塗窟や金爪石の獅子岩・半平山等の新しいものが探究され、峰頭尖が久し振りに探査されて地理が始めて明かになつた。大體臺北附近の岩場漁りも此の年位迄であつて、以後は新しい場所も報告されてゐないやうである(臺灣山岳第十號(昭和十四年三月)一四—六二頁—沼井鐵太郎「岩場と石溪の臺北附近」參照)。臺北以外の都市中心の小登山では宜蘭から太平山・ゲリロー山(前出)、臺中から八仙山、臺南から關子嶺が報ぜられてゐるばかりである。

昭和十年

此の年初めの前年末からかけてのシーズンは高山に最も緣の深い臺中州が登山大衆に對して全然蕃地(山)を閉し、又他州でも蕃人使役上人爲的の不便を生じた事もあつて、當局が先に唱導した蕃地開發の大義を疑はしめたのは遺憾であつた。然し主として臺灣山岳會員の正月の登山は、此の一時的時勢逆行にも拘らず旺盛な意氣を示した。先づ南湖大山へは前年十一月半ば竣成した臺灣山岳會の山小屋開きの爲筆者がリーダーとなつて十四名の多數で登つた。登山は普通コースだつたが、雨と雪とに終始惱まされた。隊員中には高山地形研究の學徒佐々保雄氏や本山に於ける女性登山家冬季最初の小原美枝子孃が加はつてゐた。又高嶺深谷ハイキングコースの代表ともいふべき合歡越には臺灣山岳會から二つの班を出した。又帝國最南の高峻大武山連嶺には二つの縱走隊あり、其の一は大武山・霧頭山(二八二二・一米、蕃稱パラトダン)の初縱走で、臺灣山岳會の千々岩助太郎、田口與四郎、新井良三郎、齋藤三男四氏が大武山から北に進み、後二氏は都合で兩山間最低鞍部からコチャボガンに下つたが、前二氏は縱走を完うし文化史的新記錄を得た。又井下爲三氏外三名は警察官三名、蕃人三十名を伴ふ大

部隊で從來文化人記錄の無かつたクナナウ社より南大武山への登路から登り、南大武山・大武山の縱走を完うした。此の他既に一二回行はれたタウサイから南湖大山への登山が向陽會山岳部で行はれ、又特別關係を以て臺中州入蕃を許可された組の新高山數隊、次高山、合歡越數組、之に大覇尖山、大覇尖山・次高山縱走、低山で桶後溪越等を加へれば、一年前に比し決して登山界の退歩を示してゐなかつた（臺灣山岳彙報第七年〔昭和十年〕六—七頁、臺灣山岳第九號〔昭和十二年二月〕七九頁—千々岩助太郎・田口與四郎「大武山・霧頭山縱走」）。

今述べた最後の情勢は二月になつて一旦保證された感がある。卽ち在花蓮港の臺灣日日新報社員渡邊氏は先年合歡越をした際の槇有恒氏の助言を實行し、二月十一日臺灣高山上で最初のスキー條痕を合歡山高原に印した。當時氣溫零下五度、積雪五尺、氣壓四五四粍と報じてゐる（臺灣山岳彙報第七年一七頁—渡邊よしたか「臺灣最初のシュプール記錄」、同一八頁—沼井生「合歡山スキー一家言」參照）。

然し乍ら昭和十年を通算して見れば前年に比し記錄的に稍々沈滯してゐる事は見逃し難い。但し此れは登山の量をいふものではなく、普通一般の入蕃者登山者は增加の傾向であつた。登山の一般化は七月女性登山家座談會が臺灣日日新報社主催で開かれた事でも推察充分である。

夏季登山で未だ大衆的になつてゐない地域に屬するものでは、關山越、蒼萊主山連峰等が報ぜられたばかりである。秋から冬にかけても僅かに京大出身平吉功氏の合歡越及びタウサイよりの中央尖山・南湖大山登山、並びに筆者の臺灣山岳訣別行、能高山試登を含む阿里山・能高越が記されたのみであつた（臺灣山岳彙報第七年〔昭和十年〕四四及び四六頁、同第八年〔昭和十一年〕三及び一四頁、臺灣山岳第十號〔昭和十四年三月〕一二頁—千々岩助太郎「蒼萊主山連峰を往く」、國立公園第十卷第五號〔昭和十三年十一月〕—沼井鐵太郎「阿里山より能

高越」。何といつても高山記錄の淋しい年であつた。

因に本年十一月には非公式ながら陸地測量部から次高山、南湖大山、中央尖山、合歡山等の標高が訂正されて發表された。

都市を中心とする昭和十年の小登山は、量的には勿論、記錄的にも高山地域程の澁滯は來さなかつた。卽ち臺北中心では鳳髻尖西側、中嶺越などが登山界に改めて知られ、阿玉溪側よりルモン山、大嶺峠より五指山などの變つた行き方がされ、竹子山東南の溪も再び試みられた。哄哩岸岩場、石笋尖山東稜なども岩登行されてゐる。他の既知の山々については一々言ふに及ばない。臺中では秋に合歡越、新高山などの高山行と共に八仙山、霧社方面、松柏坑、出雲山、水井子等小登山の計畫があつたが、實行詳細は報告されてゐない。其れよりも山行が振つたのは木田文治氏をリーダとする宜蘭中心と臺南中心であつた。宜蘭からは虎頭山、大礁溪山、湖底嶺より四堵山、烘爐地山南稜が新しく開路登頂又は試登され、臺南からは大崗山、壽山、新化水源地、關廟から臺南高雄州方面が歩かれた。

昭和十一年

前年不振の後を受けて昭和十一年の臺灣登山界は再び活潑な記錄を後世に殘した。

先づ年末年始の臺灣山岳會の登山には新高山各峰登攀と南大武山行があつた。前者は格別新記錄でも無かつたが、メンバー十一名の顏觸れを見ると、各峰登攀や長命水キャンプをやつた稍々大衆向の最初のものゝやうにも見える。南大武山行は千々岩助太郎、池田雄之進、內藤喜啓三氏がブンティ社蕃人を連れて同社から從來と別の

コースを登つたもののやうである。大武山連嶺はいづれの側からするも水に乏しい事が此の行でも裏書きされてゐる。此の他の高山では、臺灣山岳會員の宇佐見守氏が新高主山より縱走して南山東稜往復後西南稜南面に露營、老濃溪側岩稜下を卷いて南玉山・錢頭雁山間鞍部に出で、之より南玉山岩尾根に取り付き縱走、西南稜は今度は楠梓仙溪側を卷き南山・主山の鞍部に出た。ザイルは南山東稜と南玉山尾根で二回使つたといふ。南玉山登頂は鹿野氏以來登山家として二回目だが、行き方を異にして新記錄の箇所もある積極的な山行だつた。又、臺灣山岳會員松本芳夫、山下只三、大窪七郎三氏は之も嘗て鹿野氏が二回目登頂以來登山家に登られなかつた卓社大山に過坑（コイケン）駐在所から露營三夜を以て登降した。此の他に鐵道部山岳部員は南湖大山に登り、ブナッケイの水場の涸渴と山小屋南湖山莊の荒廢とを報じた。合歡越は新高山の普通コースと共に相當歩かれたやうである。又中級山岳では鐵道部山岳部の新井、田村、萩原、今井四氏が加裡山に新コースより登り、絶頂に前年九月陸地測量部の建てた一等三角點の櫓及び藥小屋のある事を報じた。以上が本年分の當初の業績である（臺灣山岳彙報第八年〔昭和十一年〕五―七及び一四―一五頁、本會々報五三號〔昭和十一年一月〕六頁）。

三月になると先づ臺灣山岳會員小原美枝子嬢が男女の山友二人と共に積雪五六尺の合歡越をして其の途合歡山及び北合歡山に登り、クウサイから相樂巡査部長等と共にピリン及びデレック二つの獵小屋に夫々露營して中央尖山に登つた。頂上では積雪三尺位であつたといふ。小原嬢等（蕃娘アッパイを含む）は女性として最初の中央尖山登山者であり、又積雪最多の時季に同山に登つた最初の組である。合歡山・北合歡山の積雪期登山も女性としては之を嚆矢とする（臺灣山岳彙報第八年二四頁）。

右と同じ頃から始めて玆に劃期的なエキスペディションが新たに記錄された。其れは神戸商大山岳部一行の

南湖大山及び次高山彙の積雪期近代登山である。一行は會員田中薫氏を遠征隊長とし、山本明、石田正三、奥田五郎、阿部武道、土橋芳雄諸氏の現役學生、隊友として足立源一郎畫伯並に内地職業山案内者の丸山靜男氏等八名。先づ大甲溪から進んで三月二十六—三十一日は南湖大山に費す。北峰下からは隊員のみで荷を携行し、北峰西肩にキャンプ、之よりスキーでブナッケイに下り主山南肩より登頂した。四月三日より次高山彙登山を開始し、キヤワン溪經由タマラップ山に登り、西側のタッタク・シンタ附近をベースキャンプとして、五日ポチンシロン山に登り偵察及びスキー練習、六日より九日迄大覇班（田中、足立、石田、奥田、土橋諸氏）は三叉點・大覇尖山間のパサラユン山下にアドヴァンスド・キャンプを作つて大覇尖山往復登攀、次高班（山本、阿部、丸山諸氏）は三叉點へアドヴァンスド・キャンプを作つてムトロップ山（シュミタ）、カランタックン山（タラクッシャ）を經て次高山に到り、東面カールを降り東稜三〇四〇米地點でビヴァック、東稜からキヤワン溪に下つた。一行が總てのキャンプを撤收し、ピヤナン社に出たのは四月十日であつた。使用蕃人は最初の準備地ピヤナン鞍部まで三十五名、南湖大山、次高山、大覇尖山の登山ではピヤナン社青年各十七名と報告されてゐる（ケルン三十七號〔昭和十一年六月〕一三頁—山本明「臺灣の山と蕃人」、同二六頁—山本明「臺灣遠征日誌」、關西學生山岳聯盟報告第七號〔昭和十一年七月〕山本明「雪蔽期の臺灣山岳」、臺灣山岳彙報第八年二〇及び三五—三八頁參照）。

右の登山は種々の點で記憶すべきものであつたが、特筆すべきは積雪期の臺灣高連山地に於て近代登山裝備（スキー・シュタイグアイゼン、ザイル、キャンプ等）と近代登山形式（ベースキャンプ、アドヴァンスド・キャンプ、登攀隊の分類と共れの警備隊・運送班との分離及び連絡）とを以てした最大最初の登行である事である。

學生登山集團の微々として振はぬ臺灣に於ては、斯かる遠征の好刺戟も何等效果を引出さなかつた。七八月になつても新高山、南湖大山等普通の登山が報告されたのみであつた。却つて神商大遠征は內地岳界を刺戟して、七八月大阪商科大學山岳部泉隆次郎氏外七名の大覇尖山・次高山縱走（大體神商大のコースに從ふ）、本會員にして福岡山の會理事山田光男氏の新高山、次高山及び合歡越登行などを見たのである（臺灣山岳彙報第八年四七頁）。

夏季以後年末迄臺灣高山の記錄的登行は一向發表されてゐないし、又筆者の聞知せるニュースも何等無い。此は一面に於て前揭した事があるやうに此の時代卽ち近代登山時代が昭和十年附近より更に次の時代に移り變らうとする傾向を示して、登山は最早日常社會の異常事でなくなり、餘程新奇な登山でなければ登山の代表機關（臺灣山岳會）に通報されなくなつた事をも意味すると見る事が出來る。次の時代とは大衆登山時代であるが、本稿に於ては便宜上今迄と同一の章で進めて行く事にする。

昭和十一年の臺北中心の小登山では、加裡山新コース（前出）、中嶺越、基隆山より澳底、丁火功山、崎頂及び八里庄砂スキー實習及び調査、六寮崙山、北挿天山・ロッペイ山縱走、挿天山越、阿玉山、皇帝殿山岩登が記錄的に注意に値するで、他は登行一般化し特に言ふ必要がない位になつた。臺日ハイキングコースなるものが發表されたりして、臺北中心の量的の山行は急にハイキング風な萬人向な行き方に變りつゝあるやうであつた。臺中及び宜蘭を中心とする小登山は、臺北に比して遙かに登山家未踏地が多い爲に、熱心なリーダーの在る所、盛に開路小探險登山が行はれて、臺中附近では大崎忠一氏の出雲山、橫嶺山、大屏風山、埠頭山、中心山、大南邊山、火炎山、集々大山、鳳凰山等、宜蘭では木田文治氏の中嶺、三角崙山等の記錄を見てゐる。

昭和十二年

昭和十二年は前年登山景況の龍頭蛇尾なりしに比し可なり記錄的に發展した年で、島外からも積極的登山があつたが、又在臺登山家の大分活躍した年であつた。

先づ年末年始のシーズンには、臺灣山岳會の創立十周年記念登山が各山群に催された。其の最大なるものは新高山以南の新高山彙及び中央山脈を一巡する計畫であつたが、實施されたのを見ると十二月二十七日から一月三日迄平澤龜一郎氏を隊長とし、吉井隆盛、坂田寅吉、愛桓諄、瀨川孝吉、德永芳雄六氏で八通關から新高北山に登り、次で尖山から雲峰に縱走し（一部新コース）タマホ社に下つてから關山越の中ノ關に出で、以後本隊は關山越を東に越え、德永氏のみは更に相當深い新雪を冒して關山及び向陽山に登山し一月八日關山越道路を離れた事を知る。尙本隊は八日八通關道路の黃麻・蕨兩駐在所中間から石南純林の稜線を辿つて大里仙山（二〇三九米）に登頂し歸途に就いた。以上の行新高山彙南半の豫定遂行が出來なかつたのは、臺灣の御多分に洩れず、降雪によつて先づ蕃人（ブヌン族）が登行を肯ぜず。次いで同行の警察官が尻込みした爲であつた（臺灣山岳彙報第九年〔昭和十二年〕一八頁—平澤生「裏新高を征く」、臺灣山岳第九號〔昭和十三年二月〕一五頁—德永芳雄「裏新高から關山越へ」）。

右の外臺灣山岳會の記念登山は次高山、新高山、中央尖山・南湖大山縱走（タウサイより入りエキジウに下る）が行はれ、又同會員によつて大覇尖山も試登され、風雪に惱まされた所もあつたが、いづれも既知のコースだつた（臺灣山岳彙報第九年六—九頁及び一四頁、臺灣山岳第九號〔昭和十三年二月〕二五頁—木田文治「次高山冬期

登行」)。新高山及び合歡越は本期も大衆的に歩かれたやうである。

二月上中旬になつて鐵道部員五名の一行が阿里山口より新高山に向つたが、主山頂上手前の稜線で積雪と風雪の爲追ひ返された。然し其の直後又二名の同部員は主山越が出來たやうである。一體臺灣高山上の積雪期狀態は前にも記した事があるやうに不定ではあるが、大體一月中頃から二月中頃又は三月上旬にかけてが內地流の嚴冬季に相當するものゝやうに考へられる。本期は新高山の外に南湖大山が臺灣山岳會の岡野宗一、橋爪清兩氏によつて二月中旬に登られた。此の登山は前年三・四月神商大山岳部の行と同樣な裝備と登山形式で行はれたもので、やはり北峰下から登山者のみの難行で之を越え、氷點下寒冷のブナッケイにビヴァックしてアイゼンとピッケルで或るルンゼから岩稜を經て主山に登り、スキーは山中隨所で登降する手段よりも寧ろ樂しんだ方であつた。此の行は神商大の行よりも一層嚴冬的だつた狀況に於て新記錄と見做すべきものであらう(臺灣山岳彙報第九年一五頁、ケルン五一號「昭和十二年八月」三六頁—岡野宗一「積雪期南湖大山」、臺灣山岳第九號「昭和十三年二月」四五頁—橋爪淸「南湖への旅」)。

三月には通常の蕃地入り山越えであるが、ピヤナン越が小原美枝子孃に、能高越が黃甲氏によつて步かれてゐる。此れ等は本邦女性又は本島人が自ら進んで山に入つた證査の例として見る事が出來る。又小林武男氏の一行は四月中央山脈を能高越より南に縱走に取りかゝつたが、どういふ風に行つたか中止したか、詳細は報告されてゐない(臺灣山岳彙報第九年一九及び二二頁)。

七月になつて早々臺北一中登山隊生徒七名は新沼、瀨古兩敎官に率ゐられてタウサイから中央尖山・南湖大山の縱走を行ひ平岩山(ヘイガンザン)駐在所に下つたが、大部分旣知コースであつた。臺灣山岳會の夏季大衆登山班其の他の組は

例年の如く新高山、次高山、合歡越に行つた（臺灣山岳彙報第九年三四頁、三七—三九頁）。然るに此の季二つの新記錄的大量登山が行はれたのである。

其一は七・八月の交臺灣山岳會常務理事千々岩助太郎氏が同氏の主宰する臺北工業學校山岳部の先輩中井晴八郎氏及び現役生徒近藤正德、廣畑日出夫兩氏を率ゐて、巡査村田涉氏及び郡蕃並びに巒蕃のブヌン族蕃人十一名の警備隊と共に、大水窟山・秀姑巒山・ウラモン山・マリガナン山（パンサヌン山）の登山家既知の山稜より更に北進してイシキンマツ山（三二八〇・三米）より丹大山に往復し、更に東郡大山塊中のコロコロアン山（三三七七・四米）、テナンコラン山（三二〇〇・九米）を經てカトグラン社に下つた、露營五夜の縱走登山である。此の行の中央山脈縱走は文化史的記錄二回目、登山家として最初、そしてイシキンマツからコロコロアン、テナンコラン方面へは恐らく最初の文化史的記錄であつて、千々岩氏等は登山界長年の懸案を解決したものであつた（臺灣山岳彙報第九年四〇頁、臺灣山岳第九號〔昭和十三年二月〕五七頁—千々岩助太郎「秀姑巒山・ウラモン山・丹大山縱走」）。

他の新記錄大量登山を行つた組は內地から渡臺した大阪藥學專門學校山岳部野口榮一氏等五名の遠征隊で、七月中旬から約一ヶ月間に關山、ウハノシン山（三二三一・五米、初登）、錢頭雁山（二八六一・八米）、南玉山、新高南山及び主山、秀姑巒山、ウラモン山、南湖大山等を踏破した。錢頭雁山から南玉山に續く新高山彙南方の主脈は既に警察又は他の官憲探險隊に通過せられてゐたやうに聞いてゐたが（年月不明）、さうであつても登山家の通過は始めてである。ウハノシン山も或は同じ狀態ではないかと疑はれた事もあるが、兎に角兩者とも登山界に於ける明確な初登記錄であるに違ひない。又此の山旅は終始登山者に愉快な思ひをさせたらしい（臺灣山岳彙報

第九年四〇及び四四頁)。

右の二つの天晴れな登山業績を最後として此の年は年末迄何等高山の記錄が登山界に報告されてゐない。勿論陸地測量部並に臺灣官憲の實務登山は連年繼續されたに相違ないが、資料入手の機なき今回は不幸にして物語る事が出來ない。

昭和十二年の臺北中心の小登山では、鷄罩山、八里庄砂スキー場、枕頭山、皇帝殿山、ロホン山(ブチヤシ山)、白石山、新竹五指山、鳳髻尖等の記錄が注意せられる。又宜蘭中心の小登山では三角崙山、竹子崙山が報告されてゐる。他の都市中心では何等記錄すべきものが無いやうであつた。

昭和十三年

此の年は筆者本篇執筆の最後の年であるが、圖らずも亦臺灣高連山地探險の大略結末を告げた年でもあつた。卽ち次高山彙、新高山彙及び中央山脈上の高き稜線の內で、僅かに小關山・卑南主山の間が文化人未踏地の顯著なものとして殘つてゐたが、此の部分が前年末から本年正月にかけてトレースされたのである。臺灣山岳會常務理事平澤龜一郎氏は氏の勤務する總督府理蕃課公務を以て殖產局農務課瀨川孝吉氏(臺灣山岳會員)並びに警備隊の小澤警部補、木村文治氏(アミ族出身巡査)、石田良民氏(ブヌン族出身巡査)及びバリサン社、上寶來社、タマホ社、內本鹿社各蕃人計十四名を同行し、十二月二十九日より一月八日に亘り、先づ內本鹿越の瀧見駐在所より卑南主山に登り、北に進んで雲水山(三〇一〇・三米、初登)、小關山、ハイノトーナン山を經て關山に到り、瀧見より露營三夜を經てウハノシン第二溪を下つて大關山駐在所に出で、以後關山越をして新武路に出た。縱走

は技術的には殆ど困難なく、只最後の下りが一行いづれも不案内地だつたので苦心したり、山上で霧氷と寒氣とにあつて蕃人操縦に骨を折つた事が報ぜられてゐる（臺灣山岳彙報第十年〔昭和十三年〕六頁、臺灣山岳第十號〔昭和十四年三月〕六頁—平澤龜一郎「卑南主山から關山への初縱走」）。

臺灣山岳會としての年末年始登山は例によつて一般化された新高山と合歡越の二つの通常コース行であつたが、會員の內には大水窟山・秀姑巒山・新高北山及び主山をかけた者もあつた。此のシーズンには旣に新高主山の頂上に小屋が出來て居り、阿里山側の登路も大改修されて南山稜縱迂廻をさけてゐた。然し臺北高校生二名の年末二十八日に於ける沙里仙溪側墜落遭難で新高山は時ならぬ賑やかな探査行が繰り返された。幸ひにして警察當局、當事者高校山岳部の活動並に臺灣山岳會木田文治氏等の應援により遭難者は翌及び翌々日に渡つて生存救助せられ、正月數日後無事下山した（臺灣山岳彙報第十年一四頁、臺灣山岳第十號六七頁—臺北高等學校山岳部「冬の新高山遭難の顚末に就いて」）。

五月末から六月初めにかけて平澤龜一郎、吉井隆盛、瀨川孝吉氏等の山地開發調査隊は、タウサイから中央尖岳及び南湖大山に登りエキジウ溪に下つて、南湖大山登山は此の行き方を最良案とすると推奬した（臺灣山岳彙報第十年三〇頁）。同じ頃山岳寫眞家岡田紅陽氏は臺灣國立公園地の視察撮影に招かれて、次高山、タロコ峽、新高山及び大屯山彙を廻つた。

夏季には南湖大山、大覇尖山、新高山、合歡越等が幾組かに登られ、又久し振りに渡臺した慶應山岳部の小森宮章正、山本雄一郎、加瀨錄郎、大和二郎四氏は八月中タウサイより中央尖山、南湖大山、次高山彙を歩いた。然し本年の夏山では終に年末迄目ざましい新業績は樹立されなかつた。

昭和十三年の小登山では臺北を中心とする皇帝殿山、石笋尖山、竹子山東の溪等の活潑な岩山行及び三貂角岬廻り、大屯山粗坑、加裡山、坪林越え强行、石底より景尾溪越え、西帽子岩の峠、ララー山等の記錄が稍ゝ行き方が變つて注意されたばかりであつたが、一方ハイキング熱は汲然として時勢を壓倒し、先蹤行積極登山は斯界に忘れられたかの感がある。此れは一面都市近郊の處女地が餘す所少くなつたのにも歸せられるが、臺灣登山界指導者群の登山意識及び觀念の變轉をも示す事になると思ふ。

最後に昭和十三年末から十四年初めにかけて行はれた二つの銘記すべき登山新記錄を附記して置く。其の一は臺灣新聞社主催臺灣國立公園奬健徒步コース實地踏査委員の第二隊の行で、之に參加した臺灣山岳會の木田文治氏の手記によれば、新高山彙の南山以南の稜線を南玉山、錢頭雁山、南面山と進みマスホワル社に下つたもので、南面山は純登山家として最初のやうである。又早稻田大學山岳部は大擧して遠征し新高山附近集團登山を行ひ、地域内には南は南山、北はウラモン山、そしてヴアリエーション・ルートの新記錄として東山東峰北稜よりの新登頂、主山北稜よりの新登頂、主山・東山稜線北壁に若干の初登攀を積雪中に行つた。此れ等はいづれも本篇の次に加へらるべき登山史頁に書き加へなければならないものである（臺灣山岳彙報第十一年〔昭和十四年〕一〇及び一七頁本誌第三十四年一號〔昭和十四年九月〕一頁―早稻田大學體育會山岳部「冬の新高山群」）。

附、臺灣高山探險の結末

次の表は今迄縷々として述べ來つた所のものを基として、山脈別に北―南の順に大體配列した臺灣高山登山記錄の大展望である。山は三千米以上の高山を主としてゐるが、重要地點又は特殊山岳は其れよりも低いものでも

揭げて置いた。

中央山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
バトツノフ山（三二二一）	大九、六、太平山—南湖大山の途	
南湖大山北峰（三五八〇）	明四三、四、ビヤナン社—（エキジウ溪）—タウサー蕃越の途（往復）	大三、四、ビヤハウ—南湖大山（主山）の途？ 大九、六、太平山—南湖大山（主山）の途 大一五、七、——ビヤナン鞍部 昭一一、三、スキー使用積雪期登山 昭一二、二、〃　嚴冬期登山
南湖大山（主山）（三七四〇）	同右？	大三、四、ビヤハウ— 大九、六、太平山より縱走 昭二、三、ビヤハウ—（積雪期） 昭七、八、畢祿山より縱走 昭一一、三、スキー使用積雪期登山 昭一二、二、〃　嚴冬期登山
南湖大山東峰（三六〇〇）	同右？	昭二、三、—マビーサン山へ縱走

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
タウサイ峰（三〇三〇餘）	昭八、九、南湖大山東峰より往復	昭二、三、南湖大山東峰—マビーサン山の途岩峰下通過 昭九、七、岩登
マビーサン山（三二〇九）	昭二、三、南湖大山東峰より縱走	
南湖大山南峰（三五〇〇）	昭七、七、畢祿山—南湖大山（主山）の途	昭八、七、南湖大山（主山）より往復岩登
中央尖山（三七〇三）	昭三、八、タウサイ—コワヘル溪より往復	昭三、以前試登 昭五、五、タウサイ—東峰支脈より 昭七、七、畢祿山—南湖大山の途 昭一一、三、積雪期登山
ルムラモル山（三四二〇）	昭七、七、畢祿山—南湖大山の途	
畢祿山（三三七〇）	大三、合歡方面より？ 昭四、一、合歡山—ロオン溪—クバヤン	昭七、七、—南湖大山へ縱走
北合歡山（三四二二）	大二、一〇、合歡山方面より往復	昭三、春、西側より新登頂 昭一一、三、積雪期登山
合歡越（三二六五）	大・二、一〇、同右の際高所通過 大三、軍用道路成る 昭九、新道路開通	昭一〇、二、臺灣高山最初のスキー使用

合歡山（三四一六）	大二、九、霧社—櫻ケ峰—（往復）	明治末年及大二、試登 昭四、七、—合歡瀧—トロツク 昭一一、三、積雪期登山
合歡山東峰（三四一八）	大二、九、同右	明治末年及大二、試登
屏風山（三二四八）	大三、合歡山—溪—？	蓍萊主山北峰との中間は横斷せらる
蓍萊主山北峰（三六〇五）	大二、一〇、合歡山方面より往復	明四四、一二、試登 大三、タロコ討伐隊越ゆ 昭四、七、トボコー—合歡山東峰 昭五、八、能高越より縱走（初？）
蓍萊主山（三五五八）	大三、一三、蓍萊主山南峰より（何年なるや確證なし）	明四四、一二、及大二、一〇、試登 昭五、八、能高越—蓍萊主山北峰の途（初？） 昭八、一西、西面試登
蓍萊主山南峰（三三六〇）	大二、一〇、能高山より初縱走の際？ 大三、又は八、又は一三、（何年なるや確證なし）	
能高越（舊道三三〇八）（新道二八六〇）	明三九、一二、埔里より往復（道路開鑿前） 大二、一〇、能高山より縱走？ 大七、三、舊道開通 大一五、新道開通	明四〇、九、最初の横斷（位置？）

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
能高山北峰（三一八二）	大二、一〇、能高山より縱走	
能高山（三三四九）	大二、一〇、マヘボより直登—北方に縱走	大八、安東軍山—能高越の途
能高山南峰（三三三三）	大六、以前？ 大六、一二、路線？	同右
白石山（三一三七）	大八、安東軍山—能高越の途	
安東軍山（三〇八八）	大三—七？ 大八、濁水溪上流より登り北に縱走	
（安東軍山—關門山の北方）（三〇六六米峰）	（此の間中央山脈稜線記錄不詳）	
三〇六六米峰（關門山北方）	昭五、五、丹大山より縱走—王武塔山へ	
關門山（三〇五二）	清朝同治十三年三月關門越道路竣工	明二九、一〇、西側より（本邦人最初） 昭五、五、丹大山—三〇六六米峰の途
大石公山（三〇四八）	昭五、五、丹大山—關門山の途	
丹大山（三三七〇）	昭五、五、ロンダブン山—關門山の途	大一三、一一、試登 昭五、ウラモン山迄縱走

マルバラナン山（三一六四）	昭五、	丹大山—ウラモン山の途	
イシキンマツ山（三二八〇）	同右		昭一二、八、—テナンコラン山へ縱走
マリガナン山（三五六六）	同右		昭六、九、マンタルン—マスブル溪より新登頂—ウラモン山
ウラモン山（三八〇六）	大一五、九、秀姑巒山より往復		昭五、—丹大山へ縱走 昭六、八、無双—ウマボンゴ山（三一二六）—新登頂
秀姑巒山（三八三三）	大一三、一二、大水窟山より		大五、二、試登 大一五、九、—ウラモン山往復
大水窟山（三六四四）	清朝同治一一、—光緒元年？ 明四一、二、八通關道路より		大一三、一二、—秀姑巒山
八通關越（三二七三）	清朝同治二、—光緒元年（明八）舊道開鑿 大一一、新道路完成		明二九、九、本邦人最初
尖山（三二二一）	昭五、六、（又は六、三）南方より大水窟への途		昭六、八、北方より單獨行ヴアリエーション・ルート 昭一一、一二、南駐在所—雲峰の途
タウンタウン山（三二八三）	昭一一、一二、南駐在所—尖山—雲峰の途		
雲峰（三五六九）	昭五、四、南双頭山より往復		昭一二、一、尖山—タマホ社の途（登頂せず）

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
南双頭山（三三三三）	昭五、四、ターフン社—コマス溪側より	
シヌベシ山（三四六一）	昭五、四、南双頭山—ブラクサン山の途	
向陽山（三六一一）	昭五、四、シヌベシ山より往復	昭六、？　關山越より
關山越（二九三〇）	昭五、　道路完成	
關山（三六六六）	明四一、一二、東側より初登—南主稜を下る？ 明四二、四、初登	昭五、五、東方支脈—ハイノトーナン山の途？ 昭七、　關山越ウハノシン溪より 昭一二、一、積雪期
ウハノシン山（三一三一）	昭一二、七、關山より	
ハイノトーナン山（三一七五）	明四一、一二、關山より？ 昭五、五、關山より縱走	昭一三、一、卑南主山—關山の途
小關山（三二五四）	昭五、以前？ 昭五、一一、初登記錄	明二九、七、本邦人中央山脈入りの最初 本山の東方通過？ 昭一三、一、卑南主山—關山の途
雲水山（三〇一〇）	昭一三、一、卑南主山—關山の途	明二九、七、本邦人最初の中央山脈越は本山南鞍部？

卑南主山（三三〇四）山	昭二、一一、	内本鹿越より往復	昭一二—一三、	關山へ縱走
内本鹿越（二三六四）越	昭二、	道路完成	昭二、二、	卑南主山南方二五七五米の地點に遙拜池發見
（内本鹿越—霧頭山）	（此の間知本越附近を除き他は記錄不詳）		
知本越（一六六七）越	明四三、？ 昭四、	本邦人横斷 道路完成	昭二、春、	知本越北方バユ湖初踏査
霧頭（二八二二）山	昭九、以前	初登	昭一〇、一、	大武山より初縱走
大武山（三二三一）	明四二、一一、	西麓より初登	昭三、一、 昭五—七、？ 昭一〇、一、	南大武山迄縱走 東側より新登頂 霧頭山へ縱走
南大武山（二八二二）	明治末年東側太麻里より		昭三、一、 昭九、一二、 昭一〇、一二、	大武山より縱走 クナナウ社より プンテイ社より

ハツク大山山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
ハツク大山（三三四〇）山	大五、五、	（山脈東部記錄不詳）

タロコ大山山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
タロコ大山（三二八一）	大九、	（本山並本山脈記錄不詳）

カンタバン山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
カンタバン山（三二八三）	大一三、三、	昭和初年東方稜線探査あり
卓社大山（三三四三）	大一一、三、過坑より	（兩山間其他記錄不詳）

ロンダブン山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
ロンダブン山（二九四七）	清朝同治十三年三月關門越道路竣工	明二九、一〇、關門越にて（本邦人最初） 昭五、五、拔子—登頂—ニンアブ鞍部—丹大山 （山脈南方は未記錄）

東郡大山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記録（年月及路線）
コロコロアン山（三三七七）	昭一二、八、ウラモン山—イシキンマツ山—カトグランの途	
テンナンコラン山（三二〇〇）	同右	（テンナンコラン山分岐點—東郡大山の間未記録？）
東郡大山（三六〇四）	大一五、一〇	大五、二、試登 昭六、九、郡大—東巒大山の途
東巒大山（三四六五）	昭六、九、東郡大山より往復	大五、二、試登
リリヤハ問（三四四一）	昭六、九、東郡大山—ワハシパン山—マシタルンの途	
ワハシパン山（三三五五）	同右	
マシヨゾカン山（三二四六）	同右	

カシバナン山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記録（年月及路線）
カシバナン山（三二九三）	大一三、一一、	（山脈大部分記録不詳）

郡大山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
治茆山（二九一五）	大一一、初登—巒大山へ縱走	
巒大山（三〇七五）	明四一、二、	大一一、治茆山より縱走
郡大山（三二九二）	大一五、一〇、	
八通關山	清朝同治二、—光緒元年？	

シンカン山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
シヤカバン山（三一二一）	昭五、四、シンカン山南側溪の途—打訓社	
シンカン山（三三八一）	明四一、一二、北面より？ 昭五、四、北面より初登—シヤカバン山	（山脈大部分は記錄不詳）

ブラクサン山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
ブラクサン山（二九九一）	昭五、五、シヌベシ山より縱走	

次高山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
イザワ山（三三四一）	大五、六、チンシボ—大覇尖山附近の途	
小覇尖山（三三六〇）	大五、六、チンシボ—イザワ山—	
大覇尖山（三五七三）	昭二、八、井上溫泉—イザワ山—南東稜より（人類初登）	大五、六、及昭二、七、試登 昭五、二、桃山より—南東稜 昭六、一、冬季最初、南東稜ヴアリエーション 昭六、三、春季積雪期、タイヤル族初登 昭六、七、次高山へ初縱走 昭六、七、南面チムニーより新登頂 昭一一、三、積雪期ポチンシロン山方面より往復

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
ムトロツプ山（三七一二）	昭五、五、次高山より縱走	大一二、一〇、大霸尖山との最低鞍部より試登 昭六、七、大霸尖山—次高山の途北東側より新登頂 昭八、八、北壁下降 昭一一、三、積雪期ポチンシロン山—次高山の途
カランタツクン山（三七五八）	昭五、五、次高山—ムトロツプ山の途	昭一一、三、積雪期ポチンシロン山—次高山の途
次高山（三八八三）	大四、七、ビヤナン鞍部—キヤワン溪—東稜—	大九、一〇、モギリ—大安溪水源より 大一二、七、シカヤウ—シカヤウ大山より 昭二、一一、大雪山へ縱走 昭五、一、冬季及積雪期登山 昭五、五、ムトロツプ山へ縱走 昭一一、三、積雪期ポチンシロン山—ムトロツプ山より登頂—東稜—キヤワン溪
シカヤウ大山（三三六三）	大一二、七、シカヤウ—次高山の途	昭五、一、冬季の積雪期登山
バツトアノーミン山（三六一三）	昭六、七、ユボラン山—次高山の途	

桃山々脈

ユボラン山（三三一一）	昭六、七、初登—次高山	昭八、一〇、劔山—バットアノーミン山の途
佳陽大山（三二八四）	昭七、佳陽より	同右
劔山（三二二七）	昭八、一〇、佳陽—ミノロー溪—初登—バットアノーミン山	

大雪山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
桃山（三三二三）	大一〇、ピヤナン社—？	昭四、七、ピヤナン鞍部—新登頂？ 昭五、一一、—大覇尖山に到る
タマラップ山（三三五七）	昭五、一一、桃山—大覇尖山の途？	
ポチンシロン山（三五六七）	同右？ 昭六、七、桃山—大覇尖山の途	昭六、七、三叉點より西側斷崖—新登頂 昭一一、三、積雪期タマラップ山との中間迄キヤワン溪より上り—登頂スキー使用

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
ボツコル山（三二八六）	大九、一〇、モギリ—次高山の途？ 昭二、一一、次高山—小雪山の途	
トンノフコワレ山（三三七六）	昭二、一一、次高山—小雪山の途	
キシュン山（三五八八）	同右	
大雪山（三六〇〇）	大四、六、大甲溪より	昭二、一一、次高山—小雪山の途
コハン山（三二〇七）	昭二、一一、次高山—小雪山の途	
小雪山（三〇四三）	大五、大甲溪より	昭二、一一、次高山より縱走

新高山脈

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
新高北山（三八三三）	明三四、九、八通關方面より 明二九、九、八通關より！ 明二九、一一、〃？ 明三三、四、阿里山より縱走！	大一五、夏、金門峒及岩登 清朝末初登？ 明四五、四、春季積雪期記錄？ 大一三、八通關、主山間登山道完成

新高山（主山）（三九五〇）			大一五、五、北山—主山—東山 大一五、一一、阿里山口登山道完成 昭八、一〇、北東稜下降、北稜試登 昭九、一、北稜試降 昭一〇、一、西壁より新登頂？ 昭一三、—一四、冬季積雪期北稜より新登頂
新高主山・東山稜線	大一五、以前？ 大一五、五、主山—東山稜線記錄		昭四、一二、・RⅠの頭下降 昭七、一、積雪期RⅠ—東山、新高駐在所上ニードルス初登 昭八、一、RⅢルンゼ？積雪期 昭八、七、RⅡ、RⅣ下降 昭一三—一四、北稜Ⅰ及Ⅱ登攀
新高東山（三八八三）	明二九、一一、八通關方面より？ 明三二、一二、〃		清朝末初登？ 大一五、五、主山—登頂—東稜— 昭六、八、東峰北RⅣより新登頂 昭八、七、東峰北稜Ⅰより新登頂 昭九、一、北RⅠ？より新登頂 昭一三—一四、東峰北稜Ⅱより新登頂
新高西山（三五二八）	明三三、四、阿里山—主山の途		
新高前山（三二三六）	同右		

山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
新高南山（三八一五）	明三七、四？、主山稜線より？ 明四二、一一、〃　？ 大一五、以前　初登確實	昭八、七、最高點東（二つ目のピーク迄
新高南山西南稜（三五八四）	昭八、七、南山—南玉山附近縱走（往復）	昭五、一、試登 昭六、八、岩稜南側通過—南玉山 昭一〇、一二、南玉山—岩稜下北側通過—主山南山鞍部
南玉（三三九一）山	昭六、八、南山—西南稜南側—（往復）	昭一〇、一二、錢頭厫山鞍部より新登頂 昭一三—一四、南面山（縱走
錢頭厫（二八六一）山	昭一〇、以前？ 昭一二、七、茎濃溪—登頂—南玉山	
南面（二八四〇）山	大正一二、二、甲仙—登頂—楠梓仙溪	昭一三—一四、南玉山—錢頭厫山より縱走

鹿林山脈・阿里山脈

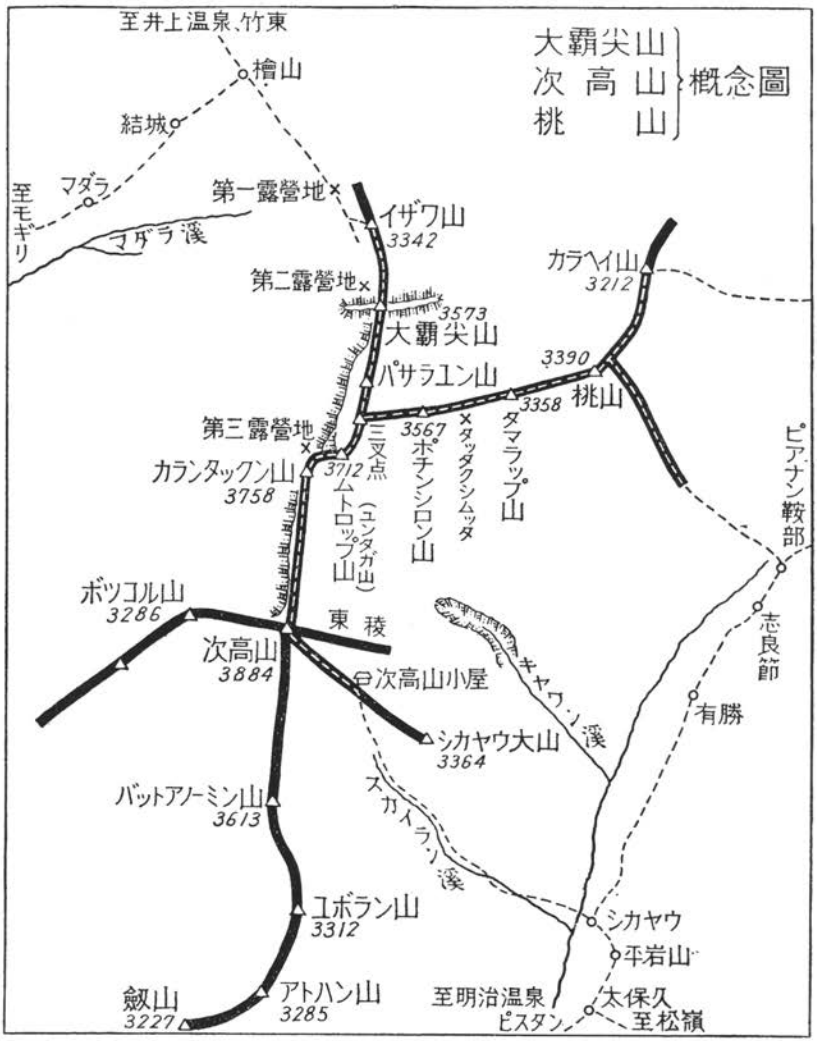
山岳	初登（年月及路線）	試登・新記錄（年月及路線）
鹿林（二八四〇）山	明三三、四、阿里山—新高山縱走の途？	
塔（二四八〇）山	大正年代？	昭七、一一、南壁より新登頂

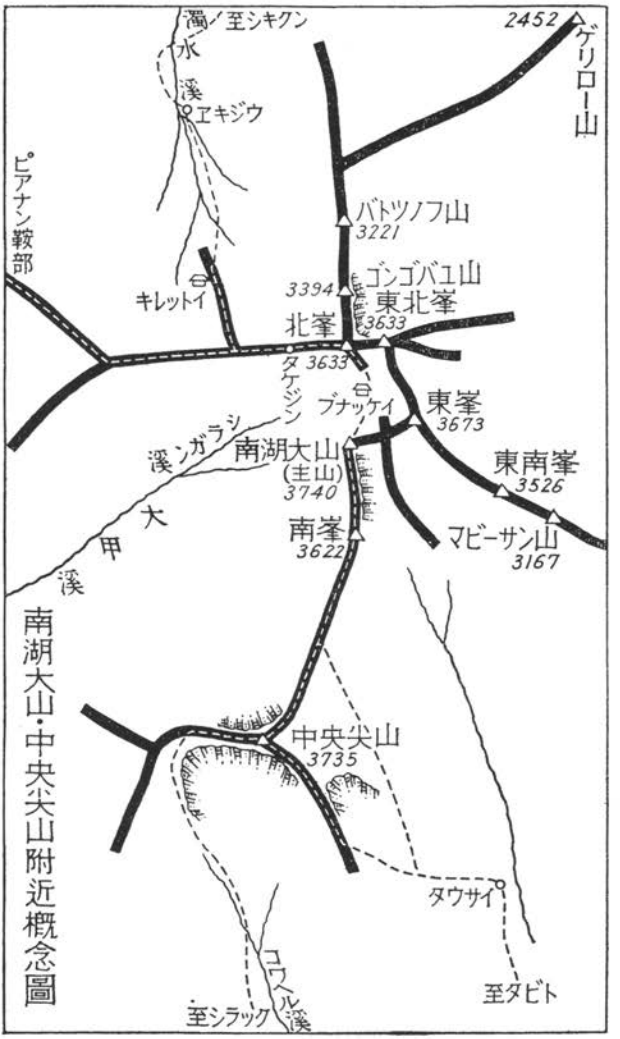
右の表を地圖と照合して行けば、大體に於て臺灣高連山地の既知と未知の部分がわかると思ふ。卽ち少くとも山脈稜線中で未記錄(文書又は登山界に知られないもの)は、中央山脈で安東軍山・關門山附近の間、內本鹿越・霧頭山の間の大部分、中央山脈から分岐する山脈ではロンダブン山脈、東郡大山脈、カシパナン山脈、シンカン山脈其の他の內に相當あるやうであるが、此等の內に著しい高度の所は殆ど殘つてゐない事は斷言出來るのである。結局の所として臺灣高山の探險登山又は初登が一應結末を告げた事になる。特に登山家の野望を限りなく滿たして呉れるやうな長高な處女稜線は無くなつてしまつたと言つていゝのである。

但、純粹登山の立場からいつて、臺灣山系全體には登山家未踏の稜線もまだあるし、縱走以外の通常ヴァリエーション・ルートは頗る豐富に未知のまゝ殘存してゐるし、所謂近代登山部門の岩登・溪谷上下・積雪期登山は今手がつけられたばかりといつてもよい。又、科學的、藝術的其の他內地一般に行はれつゝある種々な登山概念の異る山行の仕方を以てすれば、無限といつてもいゝ位の新分野が開けて來るであらう。

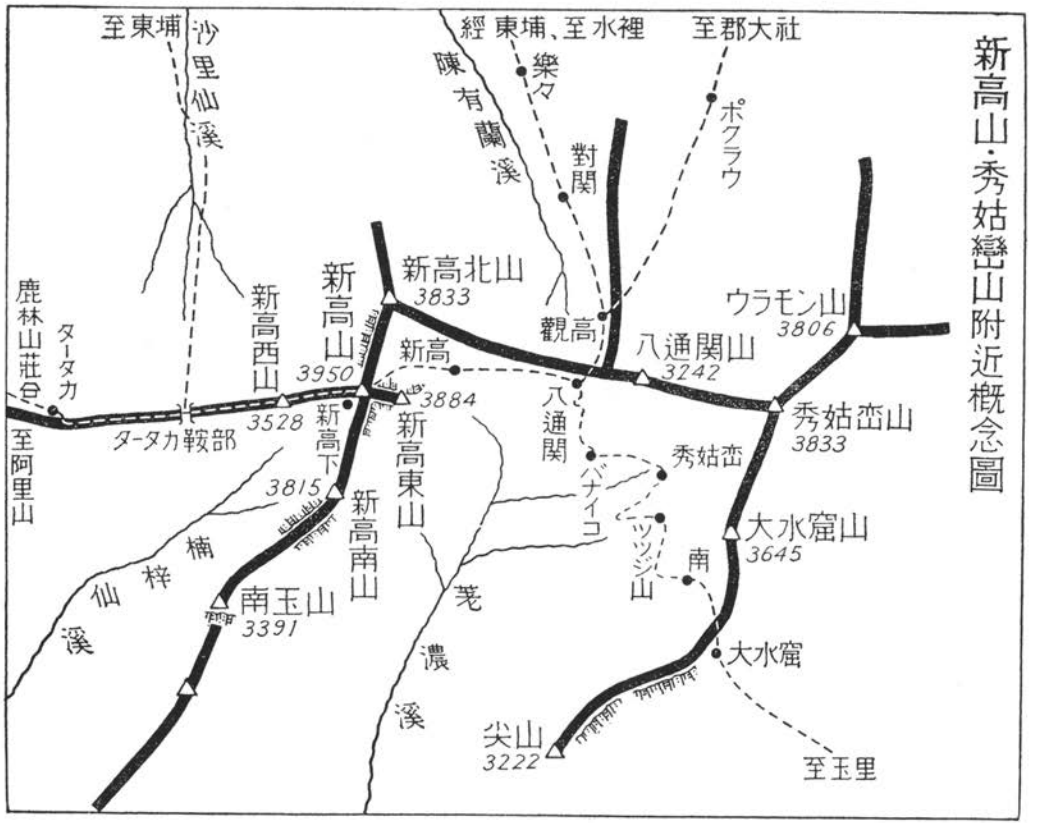
本文に於て筆者は昭和十年の頃から更に次の時代——大衆登山時代に移り變らうとする傾向を示してゐると說いた。然し此れは決して文字通りに歷史區劃を形成する意味の豫言ではない。時代の影響と地方條件と主として在臺登山家群の思想と素質と餘力の如何とによつて、今後暫らくは幾つかの主流が臺灣登山界の內に平行し交錯し合流し盛衰するであらう、其の內新しき主流の一つが登山の平易化常識化卽ち換言すれば大衆登山時代の潮流だといふのである。

以上の附章を以て臺灣登山小史の結論とする。(昭和十四、五、三一、東京にて筆者)


概念圖
大覇尖山
次高山
桃山
至井上温泉、竹東
檜山
結城
至モギリ
マダラ
マダラ溪
第一露營地
イザワ山
3342
第二露營地
3573
大覇尖山
パサラユン山
3390
桃山
3358
カラヘイ山
3212
第三露營地
3567
ポチンシロン山
タッタクシムッタ
タマラップ山
カランタックン山
3758
3712
三叉点
ムトロップ山
(ユンダガ山)
ピアナン鞍部
志良節
有勝
ボッコル山
3286
東稜
次高山
3884
次高山小屋
キャワ・ノ溪
シカヤウ大山
3364
バットアノーミン山
3613
スカイラ・ノ溪
ユボラン山
3312
シカヤウ
平岩山
叙山
3227
アトハン山
3285
至明治温泉
ピスタン
太保久
至松嶺



南湖大山・中央尖山附近概念圖



新高山・秀姑巒山附近概念圖

小五臺山登攀

竹中要

一、動機……一〇九
二、調査……一一〇
三、準備……一一二
四、行動、登攀……一一三

一、動機

昨夏を期して遂行した城大蒙疆學術探檢隊の小五臺山(セウゴダイザン)登攀は實はかなり古くより計畫された事柄であつて、決して或一部に見られるが如く時勢に阿つて急作されたものではない。そのことは現地に於て軍諸關係並に該地方政府諸關係より非常に好意を以て迎へられた一原因となり、登攀の實行を圓滑に運ぶ上に大變良い結果を齎らしたと信じてゐる。

抑々此の計畫は昭和十年七月、城大山岳部員並に同豫科スキー山岳會員合同の赴戰高原(フセンコウゲン)を廻る山々への集團登攀を實行してゐる間に其の端を發してゐるのである。私は豫てから山西省五臺山(ダイザン)に登り度い希望を持て居り、そ

の意志表示を、その旅行中に於てした所、即座に一同の賛成を得たのである。

そこで秋になつて五臺山の地圖を集めて準備に移つたのである。所が偶然に五臺山の東北方大行山脈中に五臺山(海拔三、〇八〇米)よりも高い小五臺山(海拔三、四九一米)を發見したので急に豫定を變更し、寧ろ五臺山を從にして、それよりも近くて高い小五臺山を主として登山計畫を進め樣ではないかと云ふことになり、その準備に移つたのである。

二、調　　査

所が小五臺山の高さは地圖によつて標高に甚だしい差があるのみならず、或ものには其の存在さへ明かでない。そこで、その存在と大約の高さとを取調べる必要があるので、昭和拾一年二月、當時城大文學部學生の泉端一君に委囑して天津方面に於て種々の文獻を漁り且精密な地圖の入手を志したのであつた。然るに精密な地圖に於ても、種類によつて標高に非常な差異があるので、泉君は一應現地附近の樣子を探らねばならぬとの考を持ち、當時の天津軍の好意に依つて、張家口方面行の飛行機に便乘して、涿鹿縣城の上空、高度約二、七〇〇米の點より南方約二十五里の地點に、一面黃土に覆はれた灰褐色の大地の上に、唯一つ白銀に輝く小五臺山塊を見付けたのである。そして其の高さは飛行機よりも高く、大約三千米前後の山であることを推測した。今左に二、三の地圖並旅行記より拾つた小五臺山の標高を掲げて見る。

(一)　海拔三、四九一米(北臺) O. F. v. Möllendorf (1979) に依れば北臺が最高である。

(二)　海拔三、四九一米　上海一九三四年度版中華民國地圖　Richthofen; China atlas.

(三) 海拔三、四六〇米　H. Hermann; China, Commercial and historical atlas.

(四) 海拔一一、四四七呎　Bartholomew; The times atlas & gazetteer of the world. The Oxford advanced atlas.

(五) 海拔二、六二五米(北臺) E. Licent (1929) の第二回目の北臺登攀記によれば北臺は上記の通りであり、同じくリサンの第一回目 (1917) の北臺登攀記に依れば西臺は北臺よりも遙かに高いと云ふ。

(六) 海拔二、六四〇米　〇〇〇〇祕密地圖 (十萬分の一)

(七) 海拔一、二〇〇—一、四五〇米　中華民國祕密地圖 (十萬分の一)

山の存在も確かとなり、京城からの距離も餘り遠くはなく、天津駐屯軍の意向も、文化的の事業であるから出來るだけの後援はするとのことであつたので、いよ〳〵昭和十一年の夏を期して登攀を決行することに決意したのであつた。所が不幸なことに岳友前川君を濟州島漢拏山(サイシユートウカンナ)に失ひ、その遺體の發見が非常に遲れた爲、遠征隊の組織並に準備に取かゝることが出來なかつた。そこで昭和十一年は終り昭和十二年となつたが、北支の空には何か知ら重苦しいものが感じられたし、かくて赴戰(フセン)高原に我々の山小屋を造ることゝなつたので、昭和十二年の行動は見合せたのであつた。所が同年七月には北支事變が勃發し、續いて支那事變と擴大したので、當分我々の希望も達せられないかと少からず失望したのであつたが、其後事態は好轉して吾々が多年の希望であつた小五臺山並に五臺山行は可能の曙光を見るに至つた。

昭和十三年三月には、私は大學の助手となつた泉文學士と共に、先づ北支並に張家口方面の軍部との打合せに出掛けたのであつた。匪賊の狀態が餘り險惡にならない限りは、文化的行動は宣撫工作に於ても必要なことであ

るから、寧ろ歡迎するとの厚意ある言葉に欣喜雀躍し、當現地方面部隊と連絡しては如何とのことにて、蔚縣迄黄塵を浴びてトラックを驅つたのであつた。勿論其の間には種々の困難に遭遇したが無事張家口と蔚縣との間を往復し、現地部隊にて匪賊の樣子並に今後の見通しも聞き、且白凱々たる小五臺山を目の邊りに望み胸をときめかしたのであつた。尙又小五臺山についての種々の傳說、佛敎上のこと、並びに夏季二ケ月間のみ白雪を見ない等のことを該地方の有識者から聞いた。

此の時は五臺山は尙ほ共產匪の巢窟にて到底一歩も近寄ることが出來なかつた。そこで五臺山に代へるに內蒙探檢旅行を計畫し、小五臺山登攀と併せ行ふことになつた。

三、準　備

準備の第一は資金の問題である。幸なことに資金の方面のことは城大の速水總長と山岳部長の尾高敎授とが責任を以て當つて下さることになつたので後顧の憂はない。次はメンバーの編成である。元來は山岳部員並びにその先輩を中心として計畫したのであつたが、時世が百八十度の大廻轉をなしたので、學術班を重要視して編成することゝなつた。併し內蒙踏査旅行の方は山岳部員並びにその先輩を中心として、小五臺山登攀後に行ふことゝした。そして小五臺山行には京城よりの參加人員は十四名、內蒙行には十名と決つた。所が、後章に於て述べる通り、種々の事情で匪賊の活動が盛んになつた爲、小五臺山の登攀を延期して內蒙踏査旅行の方を先に行ひ、從つて隊の編成も內蒙方面が多人數となり、且學術班も內蒙に中心を遷す樣になつた。

其處で資金の問題とメンバーの編成とが解決すれば後は裝備と食糧とを如何にするかの問題である。此の問題

は豫て此の日あるを期して數年來集團登山形式を採つてゐたので、山岳部員並びに先輩の諸君は餘程慣れてゐたので、可成安心してゐたが、其れでも尙充分なる計畫を立て、四月上旬より七月七日、荷造りを了り、張家口に向け發送する迄相當心配をした。裝備の方面は服部君を主として、食料の方は大西君が擔當した。醫療の方面は伊藤、武藤兩君が準備をした。

裝備方面で最も注意を拂つたのは給水を如何にするかと云ふ問題であつた。夏季日中の酷熱に對して、黃土地帶を行くのに如何なる方法をとるか。小五臺山の方面は山中に入れば水の問題は比較的容易に解決されると思ふが、內蒙に於ては仲々簡單には片付けられない問題である。其處で湯タンポ十個と岡崎式濾水器を準備した外、隊員各自は約一升入の特製水筒と軍隊用の淨水錠とを携帶した。次にテントであるが、此れは普通のウインパーテントを用ひることゝして特別に何等の加工も施さなかつたが、ベースキャンプ用のテントにはフライを附して二重屋根とし、入口の全面に寒冷紗を附けて害蟲に惱まされる事無く入口を開放し得る樣にし、入口の庇は長くして、光線の射込むのを防ぎ、通風を良くする爲にはベンチレーターを備へた。次にヘルメットは暑熱に對して必要缺くべからざるものであるから携帶することゝし、但し、普通品しか入手出來なかつたので雨に對して膨れるといふ缺點を持つので、之を補ふためにゴム引の完全な防水地で被ひを作り、その後半は襟首の燒けるのを防ぐ爲に、長く肩の上迄垂れる樣にした。又黃土の泥濘に備へてゴム長靴を携帶した。次に黃土地帶の黃塵と强い光線とをさける爲には理硏のウルトラジン眼鏡を使用した。其他の點については大體春山から夏山にかけての程度の旅裝を標準として考慮を拂つたのである。(裝備品目錄參照)

次に食糧であるが、それは上にも一寸述べた通り、內蒙方面の旅行を先にし、且その方面への隊員が多くなつ

た爲め、勢ひ食糧は小五臺山方面のものを內蒙に廻し、內蒙用のものを小五臺山用に振替ることゝなつたので、以下食糧については兩方面行のものを併せて述べることにする。

食糧は隊員の標準主食を一人一日に、米三合、パン半ポンドと定め、小五臺山の山中と蒙古高原での食料として、總計四百二十人前の米を京城にて準備し、パンは一部は森永會社製の乾パンを京城で購入し、殘りは張家口で普通のパンを仕入れることゝした。副食物は暑さと疲勞とに依つて招來される食慾の減退と嗜好の變化とを如何に防ぐかと云ふ點に中心を置いて、刺戟性の食品、酸味の勝つた品、淡白な味の物を主とする樣にした。尙又魚肉・牛肉等の鑵詰でも成るべく一種類の鑵數を少なくして、種類を多くして嗜好の變化に對して備へる樣にしたのである。(食糧品目錄參照)

次に問題となるのは荷物の包裝である。長距離の間を汽車・トラック・苦力等種々雜多な樣式で輸送され、且幾度も積換への行はれるのに對して、如何にして荷物の混雜と紛失とを防ぎ、或は荷作りの破損をまぬがれるかと云ふことには頭を惱ましたのである。殊に現在尙戰時狀態にある地域であるから一層複雜と困難とを加へる筈である。食料品の荷作りは總て蓋付きの石油鑵詰めとし、蓋は電線用絕緣ゴムテープで密閉した。此の石油鑵二個を更に木箱に納めて釘付けとし、その木箱には箱の總ての面に行先を示す色條をペンキで塗つた。赤條は小五臺山方面とし、綠條は內蒙古行としたのである。箱の總ての面に色條を塗つたのは、如何樣に荷積がしてあつても直ちに判別出來る樣にとの考へからである。更に箱の外面には內容を表はす「食」或は「裝」の文字を記し、パッキングリストと照合する爲の各シリーズを表はすアルファベット及び番號を黑色で書いた。

小五臺山方面の食料は二十人三日分を一シリーズとして、A・B・C・Dの四のシリーズを作り、この一シリ

ーズは五の木箱から成つた。別に調味料のみを集めてEなるシリーズを作り、之等は九個の木箱に納めた。亦張家口で調達するパンを入れる爲にFなるシリーズを作り、之は張家口迄慰問品を入れて送つた七個の木箱を用ひた。乾パン百二十箱入りの木箱をGシリーズとした。

内蒙古方面も同様に十一人三日分を單位とし、A・B・C・Dなる四のシリーズを作り、他も小五臺山の場合に準じた。

裝備品のパッキングについても種々苦心したが、餘り永くなるので割愛する。（近刊「蒙疆の自然と文化」裝備及び食糧の章參照）

裝備品目錄

一、共同裝備

A　天　　幕

B・C用　二重屋根、五人用、家型テント　四張

食料物品用ピラミッドテント　二張

A・C用　ウインパーテント、四人用　二張

サブマリンテント、三人用　一張

ツェルトザック　一張

軍隊テント（内二十枚は隊員各自に配給）　四十枚

備考　警備兵は別にテントを持參す

B　寢　　具

二重、眞綿三〇〇匁入り、シュラーフザック　十個　毛　布　二十枚
眞綿八〇〇匁り、シュラーフザック　六個　マ　ッ　ト（一、五尺×六、〇尺）　十枚
羽毛入リ、シュラーフザック　一個　同　（二尺×四、五尺）　七枚

C　燈　火

アセチレンランプ及カーバイト（四十日分）　四個　ろーそく　二百本
手提アセチレンランプ　二個　ラテルネ　七個

D　料　理　道　具

五升鍋　一個、大鍋　二個、フライパン　二個、湯沸し　二個、庖丁　二個、飯盒　二十個、湯たんぽ（貯水及水運搬用一升八合入り）十個、ラディユス　三個、ガソリンタンク　三個、ガソリンポンプ　三個、コツヘル　二組、アルコールタンク（水筒にて代用）　十個、濾水器（岡崎式）　一式、マッチ（十個一包み）　二十包

E　道　具　類

携帶用シャベル　四個、十字鋤　一個、ねじまわし　一個、鋸　二個、金槌　二個、釘拔　二個、ブリキ用鋏　二個、鉈　二個、ペンチ　一個、麻縄　百米、針金（三種類）各六十米、針（一寸二分針、一寸針、八分針、ネジ針）若干、裁縫用具（針、絲、鋏、毛拔き、瓜切り）二組、バケツ（布製）　二個、漏斗　四個

登山班專用

ザイル（十二粍徑）　四十米　一本、同　三十米　三本、豫備綱（十二粍徑）　三十米　二本、同（二十粍徑）

白銀に輝く五臺山（察南・西合營附近にて）　竹中　要

北臺　東臺　西臺

新雪の小五臺山（察南・蔚縣城にて）

竹中　要

十五米　一本、ヘッドライト（替電池付）　三個、ピッケル　二本、双眼鏡　二個

F　通　信　用　具

道標用二色旗　百枚、信號用發煙筒（三種）　九本、同　照明火　六本

G　氣象觀測器具

寒暖計（地中　二個、地上　二個）、最高最低寒暖計　二個、氣壓計並に高度計（携帶用）　四個、濕度計　一個、風速計一個、クリノメーター　二個

二、個人裝備

A　衣　類

制服　防寒用衣類（山服）、ヘルメット、毛織下着類、シヤツ類、靴下、下着類、手袋、腹卷

B　道　具　類

昆蟲除け網、水筒（一升入り）、光線除け兼塵除け眼鏡、扇子、マスク、磁石、地圖及地圖入れ、時計、ナイフ、携帶電燈（替電池及電球）、食事道具（食器、コップ、箸、ナイフ、フォーク、スプーン）、化粧道具、手帳及び鉛筆、紙、手拭、ハンケチ類、風呂敷、麻繩、小袋、靴紐

C　靴

山靴、ゴム長靴、地下足袋

D　雨　具

ウインドヤッケ(或ひはレーンコート、又は合羽)、防水布(軍隊テント使用)

食料品目錄

標　準　食（一人一日量）

一、朝

米飯一合半

味噌汁(乾燥野菜並に生野菜)、魚干物、佃煮、嗜好品若干

二、晝

パン半ポンド

バター若干、魚干物、サーデン、ハム、ソセージ以上適宜、ジヤム類1/4鑵

三、夕

米飯一合半

牛、魚肉各半鑵宛、漬物、佃煮、魚干物以上若干、吸物(野菜鑵詰)、嗜好品若干

外に果實鑵詰1/4鑵、紅茶、コヽア、ミルク、シロップ、菓子以上適宜

I 準備量

A 小五臺山方面（赤バンド印入り荷造り）

十日×二十人　必要料
四日×二十人　豫備　計　二百八十人分、一日

B 内蒙古方面（緣バンド印入り荷造り）

十一日×十一人　必要料
二日×十一人　豫備　計　一百四十三人、一日

總計　四百二十三人分、一日

II 食糧品表（Aは小五臺山方面、Bは内蒙古方面を示す）

I 主食物

米　一日一人三合　（A 八四〇合　B 二四九合）

メリケン粉（現地購入）　パン（張家口にて製造購入）一日一人、〇、五ポンド（A 一四〇ポンド　B 七一、五ポンド）

II 調味料

粉味噌　一日一人一袋（A 二八〇袋　B 一四三袋）

砂糖（角砂糖、氷砂糖を含む）一日一人五〇匁（A 一四〇〇匁　B 七一五〇匁）

醤油　五升入罐（A B 一罐）

鹽　一日一人五匁（A 一四〇匁　B 七一五匁）

酢の素　B 三本　A 二本
味の素　B 二個（大）　A 一個（大）
胡麻油　B 三個　A 二個
花かつを　B 七個　A 五個
ハイシカレー　B 一五箱　A 一〇箱
七味唐辛　B 四個　A 三個
ジャム類　B 三〇個　A 一五個
ミルク　B 一〇〇個（小罐）　A 三〇個（〃）

Ⅲ 野菜干物

とろゝこんぶ　B 五〇〇〇匁　A 三〇〇〇匁
わかめ　B 一二束　A 六束
乾椎茸　B 一〇五〇〇匁　A 一〇五〇〇匁
凍こんにやく　B 一〇〇〇匁　A 五〇〇匁

Ⅳ 佃煮類　一日一人八匁（三〇gr）

若さぎ、短冊、小鯛、鮒　B 八四〇〇gr　A 四二九〇〇gr

Ⅴ 牛肉類罐詰

いりこ　一日一人三匁　B 八四〇匁　A 四二九匁
スープの素　B 一〇個　A 五個
胡麻鹽、胡椒　若干
カレー粉　B 二〇〇箱　A 一〇〇箱
トマトソース　B 五〇〇個　A 二五本
バター（1/4ポンド入り）　B 二〇〇個　A 一〇〇個
マーマレード　B 二〇〇個　A 一〇〇個
マヨネーズ　B 二〇〇本　A 一〇〇本

切干　B 二〇〇匁
干瓢　B 一二束　A 六束
凍豆腐　B 一〇袋　A 四袋
乾燥野菜　一日一人約1/4袋　B 一〇〇袋　A 七〇袋

（主として中食用、カレー用）

富岡ボロナソーセージ　B A　一五七罐

鎌倉ハム（大）　B A　一〇五個

（主として夕食用）

牛肉すき焼（大）　B A　一〇五罐

オリンピック　B A　一〇罐

森永牛肉大和煮　B A　一〇五罐

牛肉大和煮　B A　一〇五罐

牛肉コーンビーフ　B A　二〇一〇罐

VI 魚肉類罐詰

赤貝串焼　A A　一〇五罐

サーディン（トマト、オイル）　B A　三〇一五罐

貝と野菜煮　B A　一〇一五罐

螺榮　B A　一〇一五罐

あけぼの鮭（大）　B A　二〇一〇罐

同ピースソーセージ　B A　三〇二〇罐

同ハム（小）　B A　一〇五個

同（小）　B A　一〇罐

牛肉寳來煮　B A　一〇罐

牛肉松茸煮　B A　一〇束

牛肉野菜新道煮　B A　一〇五罐

うなぎかば焼　B A　一五八個

おでん　B A　一五八罐

帆立貝柱　B A　一〇一五罐

貝柱　B A　一〇一五罐

あけぼの鮭（小）　B A　一五一五罐

VII 魚干物

櫻干　B A　一〇五枚
干鰈　B A　二〇〇〇匁
鰯　B A　一〇〇〇枚

VIII 野菜類罐詰

松茸ボイルド　B A　一〇五罐
お多福豆　B A　一〇五罐
松茸味啉煮　B A　一〇五罐
筍（大）　B A　一〇五罐

IX 漬物類

らつきやう　B A　二五個
福神漬　B A　二五〇五罐

X 果物類罐詰

三菱パインアップル　B A　一〇五罐
枇杷　B A　二四二罐
森永蜜豆　B A　七四罐
梨　B A　七四罐

丸干鱈　B A　二〇〇〇匁　一〇〇〇gr　一五〇〇gr

グリーンピース　B A　一〇五罐
初松茸　B A　一〇五罐
森永アスパラガス　B A　一〇五罐

奈良漬罐詰
梅干　B A　二五〇罐　八〇〇〇匁

櫻桃　B A　二四罐
無花果　B A　二五罐
蜜柑　B A　七四罐
桃　B A　二〇罐

XI 茶類

ココア	B A	四缶 二缶	
番茶	B A	四袋 二袋	紅茶 麥茶

XII 嗜好副食品

鯛味噌	B A	一〇缶 五缶	東京でんぶ
松浦漬	B A	一五缶 八缶	からし漬
わさび漬	B A	一〇缶 五〇缶	うに
旅の友(食事の友)	B A	一〇個 五個	淺草海苔(味付)
鹽辛若干			

XIII 其の他

酒類(葡萄酒、ビール、日本酒、其の他)

菓子類(ドロップス、ビスケット、飴玉、板チョコレート、支那菓子)

果汁(ジュース、シロップ)

サイダー類、支那素麺、素麺類

四、行動

泉・服部の兩君は先發隊として七月九日に京城を出發した。多年あこがれた感激の一歩は踏み出されたのだ。四月以來三ケ月に亘つて苦心した一切の準備も完了し、七月七日には張家口へ向つて總ての荷物は發送され、最早我々には希望のみ輝いてゐる。多忙であつた三ケ月の準備を終つた隊員は心からゆつくりした氣持で先發隊を驛頭に見送つた。我々も間もなく同じ汽車で出發するのだと云ふ喜びに浸つて。

先發隊は途中各地にて連絡を遂げ、十四日に張家口に着いたのであるが、我々の危惧してゐたことは現實となつて現はれた。それは、豪雨・洪水・橋梁の流失・匪賊並に敗殘兵の活動である。そこで軍當局及び諸官憲との打合せの結果內蒙踏査を先づ行ふことゝ決まつた。

七月二十一日に本隊は京城を出發した。官民の非常な盛大な見送りにこたへつゝ心は既に蒙疆の地、小五臺山に飛んで、途中汽車の不通に遭ひ第一歩から困難にぶつかつて、豫定を變更するなどのこともあつたが、全員そろつて七月二十五日張家口着。官民並に小學兒童の大歡迎に感激する。

內蒙踏査が先となつた爲隊員並に員數に本質的な變化を生じ、小五臺山方面用の裝備食料を內蒙用と振替へる爲、又トラック並ガソリン等の準備のため、且又各方面との打合せのため二十六・七・八の三日を費やした。

七月二十九日、官民、小學兒童の盛んな見送りを受けて內蒙踏査に出發、八月十七日、無事目的を果して全員張家口に歸着した。

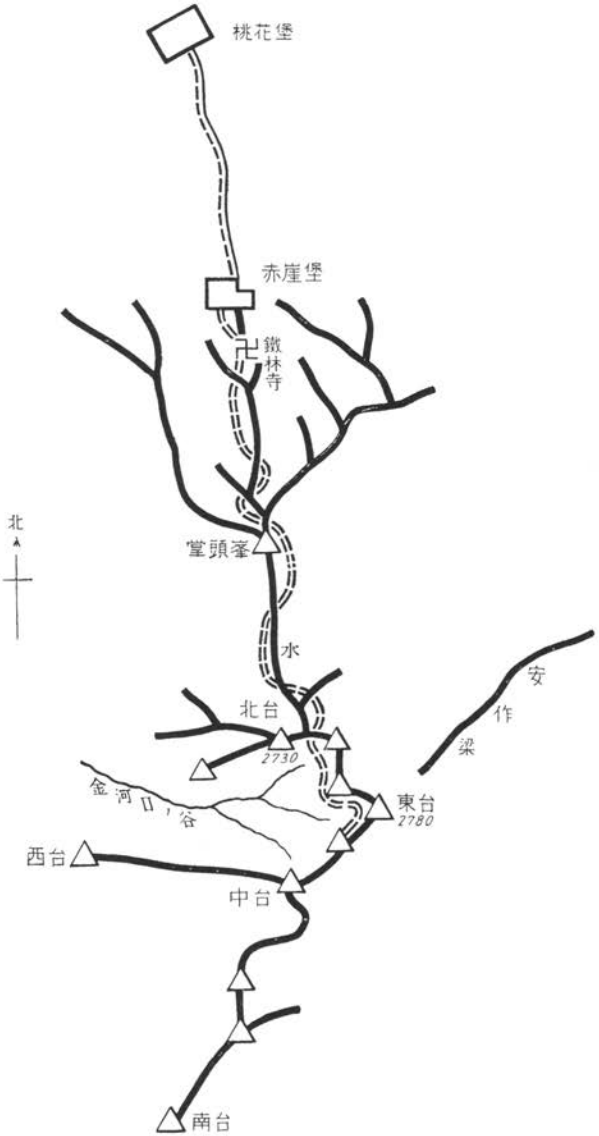
小五臺山登攀

數年來待望して來た小五臺山の登攀は可能であるか。早春には稍々靜かであつた匪賊、敗殘兵、共產匪は雨季

北臺上より東臺を望む　　竹　中　　要

北臺上より西臺を望む　　竹 中　要

北臺上より中臺・南臺を望む　　竹　中　　要


桃花堡
赤崖堡
鐵林寺
北
堂頭峯
水
安
作
梁
北台
2730
金河口ノ谷
東台
2780
西台
中台
南台

に於ける豪雨、洪水、橋梁の流失を機として跳梁し、遂に我々の登攀豫定を一ケ月遲らしめた。而も尙、八月十七日內蒙旅行を終つて張家口に歸つてからも、小五台山行が如何なる運命を辿るか、それは神のみぞ知る事柄であつた。時々刻々の偵察報告に依つて、喜憂交々到り、氣が氣でなかつた。十九日夕景、援護隊長の到着に依つて、急に出發は決つた。早くとも二十四日以後の出發豫定は、切り上げられて二十一日には全員揃つて張家口より南四十五里の蔚縣城へ向ふことゝなつたのである。

八月二十一日

トラックの縱列は黃塵を卷き立てゝ高距約七〇〇—一、〇〇〇米の黃土の臺地を一路南へ南へと走つてゐる。垂直に切り立つた黃土層の斷崖、旣に黃ばんだ粟畑の波、崩れかゝつた土塀に圍まれた家、そして稀に見かける疲れ切つた農民、總て黃と灰色に塗りつぶされた天地である。唯點在するポプラ(ドロノキ)のみが熱帶的な厚ぼつたい濃綠色の葉を擴げて僅かに活力の源泉と綠蔭とを與へてゐる。

何臺も〳〵大麻の纖維を滿積したトラックが擦れ違ふ。農民達の汗の結晶が金に替えられて日本へ運ばれるのだ。彼等は昨日の搾取と奪掠との地獄から保護と交替との樂園へ浮び上つたのである。麻緒を山と積んだトラックの上には「日の丸」が飜へり、鐵兜が儼然として保護の任に當つてゐる。

正午すぎ、我々はドロノキの竝木の蔭で晝食を攝つた。附近の農民が水桶を擔つてサービスに來た。好意には感謝するが用心して誰も飲む者はない。僅かに辨當箱を洗ふ程度だ。我々が棄てた罐詰の殼や辨當の食殘しを小僮達が競つて拾ふ。大人も又拾ふ。

我々のトラック隊は相變らず濛々たる黃塵をたてながら海拔千三百餘米の峠へと登つて來た。目指す小五台山

は遙か數十粁の彼方に淡青色に漂渺と望まれる。やがて峠を越へて桑乾河へと下つて來た。化稍營(カシヨーエイ)の橋は春三月に來た時は架設中であつたが、それは六月の洪水で跡方もなく流され、今度は察南政府の努力によつて永久的の素晴らしい橋が殆んど完成されてゐる。

いよ〳〵黄土層の地隙に沿つて進む。此のあたりはしば〳〵匪賊の通路となつて討伐のあつた所だ。春もトラック路が崩れたり、匪賊の見張りに出會つたりした所だ。颯爽と白い蒙古馬に乘つて一少尉が丘陵の間から現はれて來た。彼は東京農業大學出の偉丈夫である。しばしトラックを追ひかけて來て『僕が君達の保護をしてやるから元氣でやれ』の言葉を殘してくれた。邊疆の地で聞く最も懐しい力强い言葉だ。

小五台山がすぐ左手に見える西合營(セイゴーエー)の城門を過ぎて、それより路は西南(右手)へ折れる。路傍に建てられた我が勇者の墓碑に敬意を表した。

夕景蔚縣(ウケン)城門を潜つた。街路は旗の波に埋つてゐる。何事であらうかと奇異の目を見張つた。よく見ると赤、黄、青の色紙には「歡迎京城大學蒙疆學術考察隊」「歡迎京城大學小五臺山調査團」「歡迎察南聖峯五臺山研究隊」「日察文化的提携」等の歡迎の字句が連ねてある。初めて我々の歡迎であることを知つた。城門の入口迄盧縣長を初めとして縣廳の役人や小學校の兒童達が手に〳〵旗を振つて出迎へてくれた。其の上小學校の兒童の一隊は樂隊入の假裝行列をしての大歡迎を示した。我々は此の樣な歡迎を今後二度と受けることがあるであらうか。盧縣長と白石班長との先導で縣公署に到り、自警團員の捧げ銃を受けて署内に入り、そこを假の宿と決めた。夜は盧縣長の支那料理の歡迎宴に招かれ、日察如一の交歡を盡した。

二十二日、早朝泉君と施療班の伊藤、大西の兩君とは援護隊主力と共に密偵を連れて桃花堡(トーカホ)へ先行した。勿論

沿道は匪賊の巣窟である。少なきも二、三百人より多きは數千人を數ふる各種の匪賊は精鋭なる皇軍に出會ふことを一途にきらひながら、而も最も多き奪掠を望んでゐるのである。援護隊は午前中に桃花堡を確保した。

二十三日、雨のため活動は中止。施療班のみ昨年秋避難したオランダ人の宣教師の家を借りて活動する。

二十四日、本隊は援護隊の一部と三田警長の率いる自警團に護られて桃花堡へ向ふ。桃花堡は蔚縣の東方十數里、城壁に圍まれた古い町である。泉君は軍の援護のもとに赤崖堡迄自動車路を土民に急設させた。其の間數里。トラックにて一時間足らずの行程である。この自動車路の開設は萬一の場合に備へて援護の完璧を期することが出來るし、我々の行程に二日の日數を節約することが出來る。此の爲各種の食糧、裝備の輕減は輸送の困難を半減してくれた。私は桃花堡で軍の斡旋せられた民衆大會に望み、日本を盟主とする東亞の團結と、文化提携とについて述べた。

五年前此の旅行を計畫して以來、泉君によつての涿鹿縣城上空よりの小五臺山の航空測量、佛人リサン並に獨人メーレンドルフの旅行紀による計畫、筆者と泉君との下調査、軍の好意による航空測量並に密偵、地方人を使つての調査等に依つて、小五臺山の密貌は漸く明かにされた。それによると、赤崖堡—鐵林寺—北臺は七里行程にて登攀路あり、又白樂站—金河口—北臺間、金河口—西臺—南臺—中臺間、白樂站—章家窰—化干寺—西臺—南臺—中臺間も各々登攀可能である。併し山名と海拔高距には殆んど一致點を見出さなかつた。（旅行前に種々の取調べから作られた地圖參照）

我々は兎に角北臺と西臺との間の谷を成るべく奥深く進んで、匪賊の襲擊をさけるため部落と一定の距離を保つてベースキャンプを置き、其處より西臺、中臺、南臺、北臺、東臺等に登攀の計畫を立てゝゐた。併し此の地

方は匪賊の巣窟である。而も時あたかも漢口の攻略をひかへてゐる。軍は僅かの兵力を以て廣大なる地域の治安に當たつてゐる。その苦しい中から、莫大なる兵力を割いて我々の援護をして貰つたのである。これ等の事情を考慮した結果我々は急遽北臺だけに登り、直ちに下山するべく決定した。

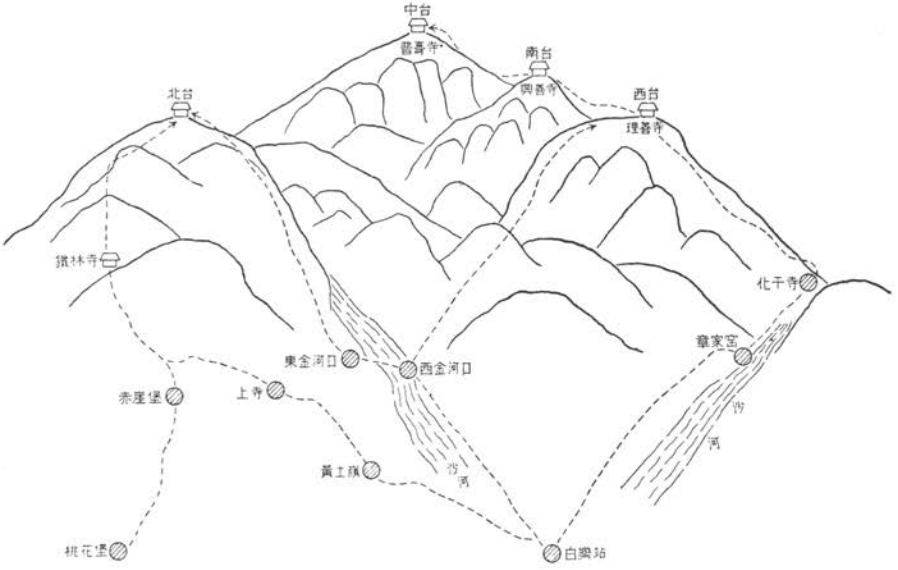
二十五日、未明に起き出でゝトラックにて赤崖堡に向ふ。此の間約一時間足らず。沿道の部落にては誰に聞いたか「日の丸」を振つて歡迎する。赤崖堡に到着すれば部落民總出で我が登攀隊と援護隊とを歡迎してくれる。日は漸く地平線を離れたとみえて掌頭峯の頂上東斜面は二、三寸ばかり黄金色に輝いてゐる。軈て日が陰つて小さい笠雲が懸つた。一寸暗い氣持になる。

四十人の人夫に荷物一切と無電機一組とを持たせ、〇〇名の直接援護隊。三田警長の率いる十名の自警團員。隊員十四名(通譯、無電技師共)の大部隊はいよ〳〵登攀第一歩、鐵林寺に向ふ。赤崖峯は海拔高距一、〇九〇米、それより岩膚の露出した石ころ道を上つて行く。美しい黄苓(ワウゴン)や麝香草(ジヤコウサウ)が點在する。赤崖堡より一時間足らずで鐵林寺に着く。

鐵林寺は海拔高距一、三二二米。掌頭峯(ショートーホー)より下つた小五臺山塊が黄土臺地へ接觸せんとする點に、一小段丘をなして突出せる展望絶佳の地である。名刹鐵林寺は引續いて永年の内亂のため燒き拂はれ、今は僅かに破壞された外廓のみ秋草の間に埋れてゐる。此處で援護隊長と別れて、一途山頂へと向ふ。

これよりは谷間に沿つて急に登つて行く。今日迄北支蒙疆方面に旅してより一ヶ月餘り、清く澄んだ水を見たことはなかつた。谷間には日本内地を忍ばせる清流が下つてゐる。久しぶりに美味しい水を腹一杯に飲んだ。景觀も變つた。炎熱のために草木の燒き切れる樣な灰褐色の黄土の景觀から、草木の生々とした風景へ移つた。灌

旅行前に作られた地圖



附 圖 說 明

1. 「五臺」とは西臺・南臺・中臺・北臺・東臺を云ふ。但し東臺は涿鹿縣にある。

2. 頂上の廟は全部破損し、使用出來ない。

3. 途中山中には宿所はない。

——此の地圖が間違であることは後の地圖で判明する。例へば南臺は西臺と中臺との間にはないし、東臺は明らかに存在する。——

木も出て來る。ヤナギ、ハシバミ、ライラック等。

海拔高距一、八八〇米に到つてタウヒを見出した。時に午前十時十分。古くは一面の針葉樹林であつたらしい。伐採と山火の爲に灌木林と草原とに化したのであらう。谷向ふにはタウヒが點在してゐる。一同あえぎながら登つて行く。援護隊の人達は重い武裝に滿身の汗で氣の毒である。

第一の鞍部、高距二、一四〇米に正十一時到着。隊員一同休息する時間も惜しいと、動物、植物、鑛物等の採集に努力する。高距二、二六〇米の草原にて中食。此處は掌頭峯の直下である。暖かい陽光に當つて乾パンを齧り鑵詰を切る。時は既に晩秋、エーデルワイス、ワレモコウ、ウメバチサウ等の秋草のみ黃ばんだ草原の間に目立つ。遙か彼方の山々には雲が去來してゐる。左手(西側)安作梁(アンサクリヨウ)の谷間から雲が湧いて來た。天候が崩れるらしい。今朝の笠雲が氣にかゝる。急いで腰を上げて出發する。

掌頭峯の頂上直下を卷く。高距二、三九〇米。午後一時十五分。見上げると一谷隔てゝ、頭上におひ被ぶさる樣に北臺は屹立してゐる。幾筋もの稜線の岩膚に雲間を漏れた陽光が當つて夢幻的な風景を現出する。山は既に晩秋、千草は黃褐色に染まり、禾本は實を結んで風に搖れ、エーデルワイスは長く伸びて色褪せ、黃花のポピーは後れ咲を二、三あはれに殘してゐる。下界は見渡す限りの畑、一面に黃ばんでゐる。點々靑黑く見えるのは馬鈴薯畑か大麻畑ででもあらうか。そして川が網目の模樣をなして擴がつてゐる。

山腹を、そして稜線を氣持だけではあせりながら、遲々として進んで行く。午後三時三十分北臺登頂。今こそ數年來望んでゐた山頂を踏んだのだ。遠く故國を離れて壹ケ月餘、此の邊疆の山頂に立つた喜びに目頭が熱くなつた。

天候は次第に險惡となつて來た。寒風も加はつて、山頂の「日の丸」ははた〳〵と音を立てゝゐる。我々は急いで西南斜面の岩窟寺と呼ばれるパコダへ下つた。

パコダは破壞されて今は見る影もない。鐵製の佛像が百體ばかり投出されてある。此處は北風を避けた岩壁の中腹に、恰も鳥の巢の樣に懸づた天然の窪みに、稍々人工を加へた恰好の避難所である。急に雨がやつて來た。一瞬、眼下の深い谷も眼前の西臺より東臺へつゞく尾根も何も見えなくなつた。

今日我々は途中掌頭峯南尾根附近で北臺東南尾根に人影を見つけさては匪賊ではないかと、一時はあやぶんだのであつた。併しそれは百人の赤崖堡附近の地元民が心からの歡迎の爲に、昨日來我々に先行して北臺に登り、水と焚木とを準備してゐてくれたのであつた。我々の大部隊と此等百人の人達とを入れるには此の巢は餘りに狹いので、赤崖堡の人達には氣の毒だが下山してもらふことにして、雨中直ちに援護隊長へ宛て無事登頂と感謝の手紙を書く。又無電で直ちに張家口の察南政府と連絡をとり、各方面へ無事登頂成功を報告し感謝の意を表する。

間もなく雨は晴れた。眼下の目の眩む樣な深く切り立つた金河口の谷を隔てゝ斜陽を浴びた小五臺山塊は雄暉なる姿を現はした。密林は谷底より尾根筋近くの二千六百米内外迄も上り、それより上は赤裸々な岩尾根である。一同圓座を作つて祝盃をあげる。

夕食後霽れ上つた北臺頂上に再び立つた。

多田氏に依つて北臺は海拔高距二、七三〇米と測定された。頂上より見た夕陽を浴びた大景觀は廣大無邊とでも形容しやうか。北面すれば察南の高原は黃一面に塗りつぶされて蜒々蒙古高原へ續いてゐる。今朝迄、小五臺山と同樣に高く望まれた山々は今は何處にあるか丘程の高さにも見へない。一面の平原である。東面すれば大行

山脈の餘波は延びて雲霧の間に消えてゐる。南面すれば深い底の知れない樣な急峻な金河口の谷間を隔てゝ、右手(西)には西臺の尖峯が鹿島鎗型に屹立し、それより尾根は一直線に正面中臺へ續く。中臺より左側へ廻れば幾度か小起伏をなして稜線は山塊中最も壯麗な山へ續く。此の山の名は未だ確定されてゐない。リサンの記錄の「案內者は此の山の名を知らなかつた」に該當する。支那の古文獻によつても、又同伴した鐵林寺の僧侶によつても、その名稱は確定出來なかつた。併し我々は此れが東臺(倒刺山又倒刺梁)に當ると決めたい、測量の結果此れが山塊中の最高峯であり、海拔高距二、七八〇米あることを知つた。そして人々は北臺が一番高いと云ひ、リサンは西臺が一番高いと云ふが、我々は明らかに東臺が一番高いことを確言する。東臺より手前(北)へ向つてはいくつかの突起をなした瘦尾根が北臺へと續いてゐる。中臺より南方へは山又山の連續でその中に南臺が遠望される。

東臺が最高峯と決まれば是非東臺山頂へ立ちたい。折角此處迄來たのだ。もう一息だ。まして東臺登頂の記錄はないのだ。是非我々の足で踏みたい。だが私は責任者としてこれ迄に援護隊の勞を煩はした上に、尙東臺へ登りたいとは言ひ出し難くい。そこで大聲を張上げて「東臺迄直線距離で約二粁、尾根づたいに約五粁、三時間行程位なものだね」と登山班の人達に話す。

夜になつた。泉、服部君達から是非東臺へ明早朝行かせて來れと申出があつた。私としては高木直接援護隊長の許しさえあれば差支ない旨を申し、相談の結果、明二十六日午前中に歸つて來られる所迄行くことに一決する。東臺攻擊隊員は泉、伊藤、服部の三君と決める。寒さが加はつて來たので急いでテントの中に潛る。兵隊さん達は夜通し焚火の傍に露營である。

二十六日「今から行つて來ます」の聲に目が覺めた。日本時間の午前六時半、未だ薄暗い。輕快な旅裝の三人は山の斜面を猿の樣にとんでゆく。私は急いで靴をつけ白い息を吐きながら後を追つた。七時無電臺の尾根（山神廟の尾根）へ取付いた。前方へ向つて「ヤッホー」の聲をかけた。答へはあつた。尾根筋の第三の瘤を左に卷いて居る所だ。既に先頭の泉君は見えない。伊藤君は消えた。服部君も一寸振向いただけで直ぐ卷いた。ふと私の頭の中を不吉にもエベレスト攻擊の若くて雄々しいマロリーとアーヴインの最後、雲が卷いてオーデルの視界から二人が永久に消え去つた光景が通り過ぎた。勿論エベレストと小五台山とは比べものにならない。併し匪賊の危險に曝されてゐる我々である。誰が東臺の中腹に匪賊が居ないと保證が出來やうか。殊に小五臺山の南麓河北省側には共產軍の大部隊がしつてゐるのである。私は冷えきつた手を摩擦しながら尾根の上に立つて半時間餘り見守つた。併し彼等は再び尾根の上に出てこなかつた。

テントの所に歸えつて登頂成功に對しての祝電を受取り、朝食をすませた。すが〳〵しい朝光は東臺の鞍部より斜に中臺と西臺とをつなぐ尾根を桃色に染めてゐる。深い暗い金河口の谷間からは霧の樣な薄雲が上つて來る。急に皆が騷ぐので、前方を見ると東臺の上に陽光を浴びて、かすかに三つの人影が望まれる。遂に東臺上に立つたのだ。時正に八時二十五分、所要時間一時間と五十五分、豫定より一時間以上も早く登頂したのだ。三人の登攀者は驀然に絕頂へと急いだに違ひない。

我々に許されたる範圍内の目的は達した。

いよ〳〵下山である。十一時北臺頂上出發と決め、一同北台上にて紀念撮影をする。十一時半過ぎ東臺登頂組は本隊に追付き、我々は感激の握手を交した。昨日に比べて今日は一段と快晴である。登頂のあとの充ち足りた

氣持を抱いて、吾々は足下にひろがる平原の方へと、この想出多い山を下つていつた。

遙か下界からは時々大砲の音が聞えて來る。匪賊の蠢動が激しいので、討伐が初まつてゐるのであらう。平原を蟻の匐ふやうにトラックが赤崖堡へと向つて來る。今晩は桃花堡泊りの豫定だから、こんなに早く來る筈はないのだが。何か情勢に變化が起つたのかもしれない。急いで下る。途中滿洲人の若くて元氣な通譯がつまづいて、頭から先に三四間の崖を落ちたが、下が小段になつてゐて無事であつた。午後四時頃鐵林寺に着く。矢張り匪賊の情況に變化があり、至急桃花堡を引上げるやうにとの命が來てゐた。すぐ赤崖堡へ。トラックで桃花堡へ。荷物の整理に一時間足らずの餘裕が與へられ、すぐ援護隊長の招待による野戰料理の宴を開く。部隊の將校達と桃花堡の自警團幹部と我々とで小五臺山の登頂を祝し、お互に無事で目的を達したことを祝ふ。宴後直ちに西合營へ。匪賊の危險を慮つて夜行をやめ、城内の古い建物にアンペラを敷いて寢る。夜通し殷々たる砲聲を聞く。

八月二十七日　早朝、朝霧を突いて蔚縣城へ。蔚縣城内の縣公署に歸着した我々は宿願を達した喜びに、今日一日はのんびりと休養する。

其後八月二十八日から三十一日まで、代王城（ダイオージヤウ）の發掘、五岔村（フンソン）の炭田調査、山西省廣靈（コーレイ）の戰跡視察などに費した。盧縣長より施療に對する感謝狀を受け、又小學校に與へた紀念旗に對する答禮を受ける。

九月一日

昨夜來雲を被ぶつてゐた小五臺山塊は正午に到つて急に晴れ上つた。見れば頂上より八合目にかけて白銀に輝いてゐる。いよ〳〵山頂には冬が訪れたのである。

九月二日

朝霧は低く畑面を匂つて流れ、豊穣な粟は黄ばんだ穂先を靜かに垂れてゐる。我々のトラックは朝日を受けて黄土地帶を再び北へ張家口へと走つてゐる。

（附記）稿を終るに際して、此の登攀旅行を愉快に無事終了することが出來たのは偏へに出先軍部並に察南政府當局の厚意と理解とによるものである旨を書添へて玆に心からの感謝の意を表する次第である。

二つのスキー行

松久義明

一、熊の湯より野反池へ

上信國境の殆んど大部分が夏季或は積雪期に歩き盡された後、尙志賀高原の赤石山から野反池の北西方大高山に到る稜線が、僅かの距離ではあるが未踏のまゝとり殘されて居た。

その大高山から野反池に滑りこむ夢を抱いて、昭和十二年三月學生々活最後の日を了へて、その日を限りとしてちりぢりに別れ去つて行く友との別離もあはたゞしく、久しぶり重いルックサックを脊負つて東京を離れた。

未だ調子の出ない身體に重い荷物で熊の湯までの登りは樂でなかつた。熊の湯では今回の同行者正勝君が喜んで私を迎へてくれた。

數日のトレーニングで漸く調子を戻して、三月九日、明日の出發を豫定して正勝君と二人で赤石山までラッセルをして戻ると、豫ねて打合せをしておいた六合村田代原の獵師大塚政美、秀雄の兄弟がやつて來て居た。兄は三十代、弟は二十五歳の元氣のよい兄弟で、積雪期の大高山近傍に就ては入山屈指の精通者である。殊に二人共スキーがたくみである事は一層私達を嬉ばした。

裝備は極く輕裝で、萬一のビヴァークの用意も大塚兄弟の元氣な言葉に從つて出來るだけ簡單につけ加へたにすぎなかつた。

十日午前四時十五分熊の湯を出發。滿天の星のまた

たきも落付いて風もない靜かな黎明であつたが氣溫はや高目であつた。昨日のシュプールを辿つて草津街道を登つて行つた。大塚兄弟はいゝ加減なワックスをのばして藻繩をスキーにまきつけた簡單なもので海豹皮をつけた私達に一向遲れる氣配もない。

午前六時四十五分赤石山頂に登りついた。山稜のブッシュをさけて尾根の北側を捲き二千米圏鞍部に出て尾根通し鯛の岩の頭に出たのであるが、此の間左右から澤が深く喰込んで尾根筋の屈曲が烈しいので時々見透しをつけてはコースを求めて行く。大塚兄弟も尾根筋を辿るのは初めてであるが鋭い勘を働らかせて私達を導いて行つた。

雄高山（オスタカ）（二〇四〇米）に近づくと尾根はやせて湯の澤を見下し乍ら上州側に少し張り出した雪庇の上を大した高低もなく頂上から四十米下に登りついた。夏季は恐らく幣軸に被はれて居るのであらう、カチ〳〵に凍つた樹木のない急斜面を、四人横に並んで階段登りを始めたが、エッヂの磨りへつたスキーでは此の四十米の登りで大汗をかいてしまつた。午前八時二五分狹い頂上に立つ。

尾根は此處から南に急角度に折れて居るが、頂上直下の露岩をさけて一度東に降り露岩の下をまいて再び廣くなつた尾根を降ると、入山から魚の川への魚獲りの路が乘越すオッタテ峯（一八八〇米）に出て更に三十米も降るとかなり廣く雪の消えた草地のヒラクサと云ふ地點に飛び出した。此處で第二回の朝食をする。スキーを放り出して、草を敷いて茶を沸かす夏山の樣な氣分だが、ルックサックからとり出した握飯はボロボロに凍つて居た。九時四十五分再びスキーをはいてヒラクサ東方の突起を越し大高山西南鞍部の茶釜と云ふ地點に出てこゝから二百四十米程の大高山最後の登りにかゝつた。ヒラクサと茶釜の間の突起は地圖に記されたほどのものではなく高々四十米程の上下であつたと記憶して居る。

大高山の登りは赤石山以東初めての登りらしい登りで樺の疎林の廣いさして急でもない斜面を大きくター

ンをくり返して登つて行けた。若しも吾々とは逆に野反小舎を根據として赤石山に向ふならば此の斜面が唯一の快適な降りとなつて、時間の點からも勞力の點から言つても此の逆コースはさして興味のないものであらう。その後一ケ月程遲れて草津スキークラブの人達がやはり大塚兄弟をつれて此の逆コースを採つて野反を早朝に出發したが志賀高原にはかなり遲く着いた模樣であつた。

午前十時四十分南北に脊せて東西にのびた大高山頂に立つた。意外に早く登れたので柚の梢を折り敷いて四方に擴がる景觀に眺め入る。

相變らず風はないが空はいつの間にかベールをかけた樣に茫曇り初めて、こゝ暫く續いた晴天も今日で終りを告げるかの樣であつた。魚の川を隔てゝ連らなる岩菅山から烏帽子にかけての素晴しい展望に心を殘して降りにかゝる。大高東南の一九二〇米圏、高澤の頭までは國境より幾分信州側を、そこから國境を離れた左に高澤の源流の水流記號の初まるあたりを目がけ廣い斜面を滑降して、三引(一九〇九米)へはゆるい小澤をつめて頂上北側の鞍部に登りついた。此の一九〇九米の名稱に就いて中村謙氏は三壁と言はれ、日本登高會編の「上越の山」の附錄地圖には獨標一九〇九米は高澤山(柳)と記載され同時に三ビキの名稱は一九〇九米北方尾根の一九三八・七米に與へられて居る。

國境線はこゝで一度北に去つて更に東方に轉じて白砂山に連らなつて居るのであるが、吾々は國境と離れて三引の東側を捲いて辨天山への尾根に滑り降つた。辨天山からの路が消えるあたりまで來ると雪は殆んど消えて居て、これでは野反池畔にはもう雪がないのかと思ひ乍ら茅戸の上をガサ〳〵スキーをはいたまゝ渡つて、一七八〇米の突起に出ると雪が再び現はれ、誰も彼も歡聲を揚げて、池の畔りへとスキーを飛ばしていつた。午後一時三十分辨天山北尾根の蔭にある小舎の前でスキーをぬいだ。戶は開いて居たが小舎の主人六平さんは登つて來てゐなかつた。

あたりの積雪は一、二尺位でいたる處茅戶が現はれ

こゝを根據とするスキー生活の季節は最早すぎ去つたかの樣であつた。二時半頃禿の頂點に人の姿が浮び上つて池の方に降りて來た。それを待ち乍ら私達は明日の知れない此の雲行きを眺めて今日中に花敷まで降りてゆかうと決めて了つた。六平さんは脊負つて來た荷の一部を床下に隱して午後三時三五分小舍を離れた。

根廣禿に登つてから花敷への降りは南側なので雪は少なく、石戸屋山から下は雪はとぎれとぎれで無理して滑り續けた私達も門松見張所ではとう〳〵スキーをかついで了つた。根廣から花敷の關晴館に著いたのは午後五時二十分であつた。

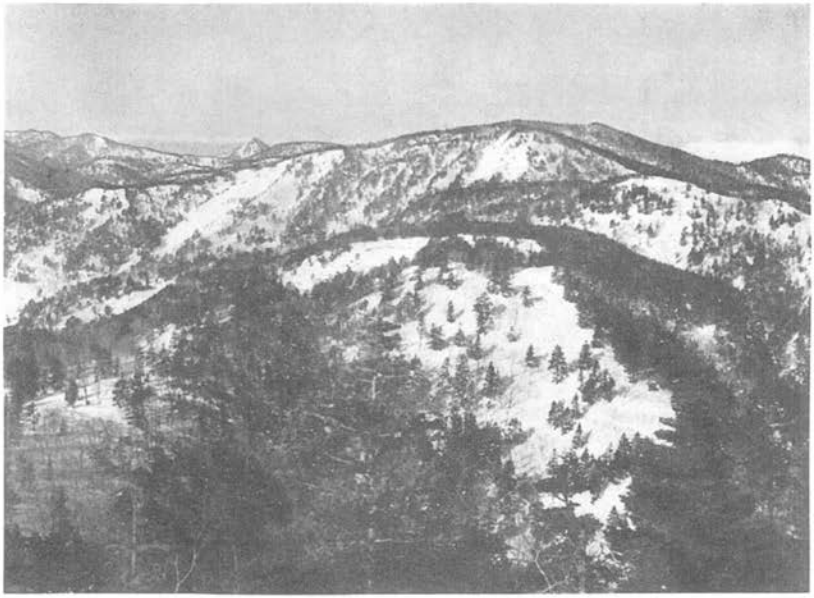
翌朝は案の定雨が相當烈しく、宿を出て田代原で大塚兄弟に別れ草津近くまで來ると冷たい雨は吹雪に變つて吹きまくり初めた。

二、岩菅山より苗場山へ

大高山の頂きに想ひ乍ら、その東壁を氷雪に輝かせて居る岩菅山から烏帽子岳へかけての偉容をふり仰いで、更に東北遙に平頂をくり擴げて居る苗場山を望んで以來何時かは此の二つの山を結びつける、信州から越後にぬける長いスキーの山旅を試みようと考へて居た。然し十三年の冬はその機會もなく、十四年の三月漸く宿志を果す事が出來た。

此の山稜は赤石、大高間とは異なり多分に高山の風貌を具へて居るので、果してどの程度迄スキーによる走破が許されるか目當てがつかなかつた。然しこれまでに積雪期の岩菅山縱走は、次の三パーテイによつてなされて居た事が後になつて判明したが、此等先蹤者のあつた事を知らなかつた私は、此の偵察の爲發哺から野澤へのコースを試みてその途上、岩菅連峯の北側、烏帽子岳の降り或は苗場山の秋山側の狀況を詳細に觀察して漸く縱走可能の確信を抱くに到つた。

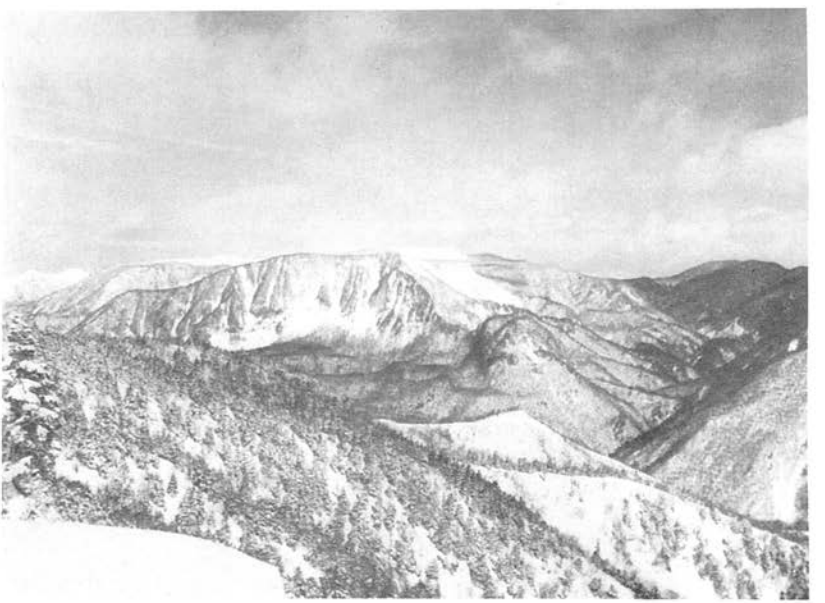
三組の先蹤者と云ふのは、第一に發哺から切明に縱走した東京の湯本三郎氏、上林のせきやの主人關德永氏外三名の一行で、德永氏に照會した處に據れば、一行は昭和三年三月二十一日午前八時發哺天狗の湯を出



雄高山（2040 m）より赤石山　　松 久 義 明

オッタテ峰より大高山西南の突起を望む　　松 久 義 明

大高山より岩菅山を望む　　松久義明



烏帽子岳笠法師岳鞍部より苗場山を望む　　松久義明

發し烏帽子頂上には午後二時位に着いたのであるが、笠法師岳への登りで相當困難して笠法師の頂上に着いたら日が暮れ、切明への降り口を見失ひアカヌケ澤と云ふ惡い澤に入りこんで了ひ切明に着いたのは午前零時三十分であつたとの事である。此のパーティは海豹皮の代りに藁繩を用ひ、ワックスとしてはパラフインを用ひたといふ。

吾々が和山に着いて更に二つの逆コースに依る記錄を知つたのであるが、昭和十年五月十九日日本登高會の簑口治信氏がショートスキーを用ひて苗場ヒュッテから大岩越えをして和山に二泊の後二十一日岩菅を越して發哺に行かれた模樣であり、昭和十三年には東京の阿藤重雄氏が和山の獵師一名をつれて三月十七日岩菅に登つて行かれた。此の日は晴天であつたが此の獵師は笠法師の直下で尻込をして戻り、それからは單獨で登高を續けたが岩菅頂上からの降りでコースを誤り雜魚川に降りその日は横手の小舍に泊り翌日發哺に出たとの事であつた。

今度は前と異なり大塚兄弟の樣な精通者は求むる事が出來ず、その代りスキーの巧な竹節善衛門を同行する事になつた。

三月十四日發哺藥師の湯に登つて行つた。夕刻からパラ〳〵小雪が降り出して明日の出發も駄目とあきらめて十二時近くまで帳場で話しこんで、午前三時頃たゝき起されると、雪は何時しかやんで星が輝いて居た。

午前四時三十分出發。堅く凍つた薔雪に昨夜の雪がうすつらと積つて居た。寺小舍峯に登りつくと夜が明け放たれて背後の北アルプスはモルゲンロートに輝いて居るのだが、行手の岩菅山頂には眞黑な雲がとりまいて西北の風がすさまじく吹き上げて居た。昨夜スキーにワックスを塗り忘れたので遂に寺小舍の降りの粉雪にシールスキンをはがされて了つた。凍つたスキーにシールスキンをはりつけるのはとても面倒な苦勞だつた。

案じて居たノッキリから三〇〇米程岩菅山頂への最

後の登りのクラストも大した事はなく、午前八時四十五分頂上に立つた。

先程までこの山頂をとりまいて居た黒雲は遙か苗場に向つて移動を續け、さかんに東南に流れて居た。が風は相當に強く雪煙を吹き上げ寒さはきびしかつた。石室の入口は南向きで殆んど吹溜りに埋れて居た。風に追はれる樣に山頂を東に降り、裏岩菅の大きなドームへ廣い尾根を登つて行つた。

午前九時四十五分裏岩菅山頂に立つ、廣い頂上で、此處から東を眺めると頂上から東北に百五〇米程降つて、尾根が東に轉ずる處から山稜は急激に瘠せて烈しい氣配を示して居た。唯一の希望をその北側に求めて、大きく廻轉をし乍ら五萬分の一岩菅山圖幅上の平穩村の穩の字の西南の露岩の手前に行つて詳細に眺めると、山稜は此の岩を第一のステップとして急激に瘠せ、暫くはアレート狀に惡場となつて居る樣子であつた。

南側は一氣に魚の川にまで削り落ちて居る壁であるが、北側はアレートをなして居る露岩の基部まで樺の若木が疎林となつて這ひ上つて居るので、いくらか急ではあるが此の岩の基部に沿うて愼重なトラバースを始め三十分程で高の字の東あたりで再び尾根に戻る事が出來た。其處から暫くは南側に少さく雪庇を張出した瘠尾根を少さく上下をくり返して、尾根が再び廣くなると間もなく十一時十分東側が斷崖になつて居る烏帽子の山頂に達した。

氣に懸けて居た烏帽子岳の降りは思ひの外困難の樣子もなく、却つて目の下に眺められる笠法師岳の登りは、これは又相當に瘠せて然かも右にも左にも逃げ場が見當らない樣であつた。笠法師岳の彼方、鳥甲山はその特長のある東壁を屹立させて、その裾を流れる中津川に沿つて上ノ原あたりの人家も散見する事が出來た。西北の强風にあほられ乍ら一瞬此等の展望を終つて、急いで北側夏路の降つて居る急傾斜を滑り降り一寸した平地に出て風をさけて晝食にした。野澤の毛無山頂で此の降りを眺めたとき烏帽子から逆落しに、む

しろオヴアーハングの氣味で、どんな降りかと思つて居たが、そのオヴアーハングの急崖よりも北寄りに降るので、思の外容易で傾斜角度は横手山の北側程度であつた。

正午平地から又少し降ると笠法師岳との最低鞍部になつて、そこから夏には針金の懸けられてあるアレートを這ひ登る、此のコース中最も厭な登りであつた。

遂にスキーをかついで圖上第一の露岩の記號のあたりまで這ひ登つたものゝ、第二の露岩に行く手を阻まれて餘儀なく山稜の右側を捲くべく再びスキーをはいた。東につき出た雪庇の下を愼重にトラバースし始めたが、僅かにバランスを保つて居る雪は靜かにくり出すシュプールにも容易にずり落ちて足許からザザツと雪崩落ち、その度に腕を山側に深くさしこんで僅かに確保してスリップを逃れた。午後一時十五分鞍部から一時間餘を勞して漸く笠法師直下に這ひ上る事が出來た。

こゝでシールスキンを外して最後の滑降に移るのであるがコースは夏路通り辿る外はない。然し此の夏路の尾根を見出す事は、笠法師直下から暫く續く等高のトラバースが意外に長い爲、ともすれば頂上の少し北から東北に出て居る標高尾根の枝尾根を降り勝ちであるから、此處でも又愼重にルートを求めねばならなかつた。それでも尙少し早目に降りに移つた吾々は氣が付いて夏路尾根に移る爲、澤一つ横切る苦勞をせねばならなかつた。

一五〇〇米あたりから尾根は逆落しに降つてブナ林に入り、それこそ雪と一緒にズリ落ちる樣に降つて切明の出合より幾分雜魚川寄りに出た。午後三時。魚の川にかけられた頑丈な釣橋を渡ると切明の一軒家の前である。和山までの一里の路は疲れた私達にとつて短かいものではなかつた。午後四時十五分溫泉の人々を驚ろかせ乍らスキーをぬいだ。

翌十六日、眼をさますと雲が低くたれこめて、チラチラ雪が降る。駄目とは思ひ乍ら仕度をして階下に降りて行くと昨夜依賴しておいた案内の獵師が來て居

た。午前七時宿を離れた。

輪樏を穿いてコシキを手にした案内の獵師は私達の登高振りをもの珍らしげにふり返り乍ら登路を東北、五萬分の一苗場山圖幅の楊川の楊の字の東方にとつて登り出した。

苗場山頂西方一八八一・七米檜の塔から西微南楊川の二股に落ちこんで居るユミヂ尾根が積雪期や秋山の獵師達の登降路であるときいて此の尾根を登らうとしたのであつた。

楊川を渡り上ノ原路に出るまではゆるに登りで上ノ原路を横切ると急激な尾根の登りとなる。その頃再び雪が降り出して風も出て來た。愼重なターンをくり返して一六〇〇米附近のガレの様な處を登りつめた。此の頃案内獵はしきりに歸らせてくれと云ひ出したが相手にせず尙一八〇〇米あたりに登りついたが此處で遂に歸して終つた。

漸く山頂の一端にとりついたばかりなのにこゝで引返すも心殘りなので、ブランコンパスの針を合せて山頂の北寄りの崖に沿つて登路を求めて行つたが、ガスは增々濃くなり、横なぐりに濕雪を吹き付けられ、漸く二つ目のピークを捲いて針葉樹林を拔けて廣い左登りの雪原に出ると西北の强風に吹きさらされて、私達のシュプールが見てるまにかき消される。これ以上前進しても雪に埋れて居るかも知れない頂上の小舍を探しあてるのは容易でないし、シュプールを見失なひ退路を斷たれる惧れがあるので、此處から引返す事にした。山頂の西端から二時間東に登つた譯であつた。

その後、七月再び苗場山頂に登り、吾々は伊米神祠の處から西方、二一〇〇米圏あたりで引返して居る事が解つた。

最早途絕えがちになつて居たシュプールを求め午後一時十五分再びユミヂ尾根の降り口に戻つた。二十分程で上の原路に降りついて、今朝のシュプールから右に上ノ原に出て、中津川に沿うて午後四時三十分小赤澤のら右に上小學校の傍らの秋山館と云ふ宿にたどり着いた。

最早湯澤に出るのをあきらめて居た私達はその夜圖らずも小赤澤からお花畑に出る、此處の獵師達が積雪期赤湯に出る登降路のある事をきゝ再び湯澤への旅を續ける氣になつた。十七日、昨日に變るよい天氣で鳥甲山の東壁は朝の光にギラ〳〵と輝いて居た。宿の主人山田晉松氏が昨日の獵師と同じ仕度でお花畑まで同行してくれる事になつた。

小赤澤の左岸を圖上の瀧、大ゼンまでたどり右にドウブキ澤に入り一六〇〇米あたりまで舊道に沿つて登つて行くのであるが、意外に容易なコースであるのに驚いた。苗場山頂に登るにはあくまで舊道を登りつめて行けばよいのださうだが、吾々は舊道が右折する一六〇〇米あたりで東に、苗場山の北崖に沿つて小赤澤の右俣上流に入り、登りつめた處は、山頂から北に出て居る硫黄澤と小赤澤の間の尾根の一八七〇米突起の南の鞍部で、そこからお花畑まで全く樹木のない頂上北側の急斜面をほゞ一八〇〇米圏に沿つてお花畑の下まで長いトラバースをするのだつた。此の稜線に出る最後の二十米程の登りは手強くて、スチールエッヂでもうか〳〵するとスリップした程であつた。零時十分漸く稜線に飛出した。

山稜に立つて南魚沼の山々を眺めると、低くたれこめた暗雲は再び悪化の樣子を示して、期待した上越の展望もなく、晉松氏は再び今のシュプールを辿り、私達はお花畑から神樂峯に、急がねばならなかつた。

零時五十分神樂峯に登りついて、山頂をふり仰ぐと疾風の樣なガスが最早山頂をとりかこんで、何時しか雪も降り初めて來た。

吾妻短スキー行

吉澤一郎

四月末の連休の前夜、上野驛に現はれた私の眼を先づ駭ろかせたものはその人々の雜踏であつた。應召、見送り、遺族の歸鄕。それ等の人達がゴチヤ〳〵になつてプラットフォームは身動きもならない人の波。私は赤羽から乘り込む同行の友が手に入れて呉れた寢臺券を、今度程有難いものに思つた事はなかつた。例によつてHとKの二人が土産を持つて見送りに來て呉れた。汽車は超滿員、寢臺車の廊下まで立錐の餘地なきまでに埋まつてしまつた。上段のベッドに長々（といつても私では高が知れてゐるが）と横になつたが下に立つてゐる人達の事を考へるとどうも氣持ちが落着かない。それでも色々と心の内に理窟をつけて濟まないなとは思ひ乍らも眼をつぶつてしまつた。然しどうしても眠られない、その内に下の廊下に立つてゐた人達が到々御腰を据えて宴會を開きはじめた。「どうせこうなりや破れかぶれだ、あしたの朝まで呑みあかさうぢやねえか」こんな聲が聞えて來る。時は非常時、まづ〳〵以て忍の一字と私達は横になつてゐる事だけに無上の感謝を覺え乍ら暫らくは天井と睨めつこをしてゐた。と今度はオイ!!　チコンキをかけやうぜ、といふ聲がした。オヤ〳〵と思つてゐると本當にやり出した、いつ買つた盤とも知れぬ雜音だらけの「森の鍛冶屋」がトンチンカン〳〵と鳴り出した。時刻は正に二時を廻つた世が世ならば車輪の音のみ聞える筈の眞夜中である。ウワー〳〵と小兒の泣き聲が聞えて來た。「チエッ子供が泣いてやがら」で又その裏がかけられ

た。もうこうなつては何ともはや策の施しやうもない。うつかり怒鳴りつけやうものなら向ふは群集心理でつっかゝつて來る、どうせ錄でもない結末になるに決つてゐる。私は鯉が俎の上にのせられた樣に潔よく觀念の眼を閉ぢてしまつた。之が召に應じて兵隊になりに行く人達なんだ。こんなのはホンの一小部分の人達であらう。然し兵隊になるだけの年頃だつたらいくらカルチュアーがないとしても少し何とか考へられないものだらうか。日本人は成る程、對外的には立派な國民であり得るかも知れない、だが之を社會人として觀察した時、果して一等國たる國の體面に値する人のみによる集團なりと云ひ得やうか。尤もこういふ人達でも使ひ場所によつては大いに役に立つ事もあらう、だが考へれば考へる程また哀れな人達ではある。

福島を過ぎてから漸く夜も明けて來た、板谷も近い。ボーイさんに起される迄もなく私達はそろ〳〵此の恐るべき人類から逃げ出すべき準備にとりかゝつた。スキッチ・バックを幾度か重ねてやつとの事で汽車は板谷の驛に停つた。四時五十何分かである。出入口から出やうとしたが震災列車のそれ的でどうにも動きがとれぬ。仕方がないので寢臺車の窓から飛び下りる。スキーはボーイさんが反對側の線路の砂利へ拋り出して呉れた。法被をきた人夫態の人が一人乘車しやうとしてゐたが何處の扉もあけられないので結局私達の飛び出した窓からねぢ込まれてしまつた。驛長が苦い顏をして見てゐたが、こんな場合に規則を振廻せない事位は流石に心得てゐると見えて何も云はずに向ふを向いて行つてしまつた。

拋り出されたスキーを拾つて驛の外へ出る。吾妻へ行くのは私達二人だけ。流石に遠路遙々やつて來たゞけの甲斐はあつた。驛前の新五色溫泉子金屋支店に立寄る。まだ眠てゐた親父が澁い目をして二階から下りて來たので早速湯の方へ電話をかけて朝食の用意を賴んで貰ふ。

雪の板谷だけしか知らない私達には何だかもの足らないたゝずまひではあつたが遙かに松川の上流を見上

吾妻山荘　　吉澤一郎

家形山肩より一切經山と五色沿　　吉澤一郎

中吾妻山及繼森　　吉澤一郎

天狗岩の祠より西吾妻山　　吉澤一郎

げた時に私達の眼を希望に輝かせたものは栂森から東大嶺に續く眞白な頂稜であつた。まだ岳にはあんなに雪がある。私達は明日こそあの雪稜の上を思ふ存分スキーを滑らせて行く事が出來るのだ。隧道の手前で川の方へ降りて行く。森の中にはまだ雪が消えずに殘つてゐた。釣橋を渡り五色への道にもいつか別れて川から可なり高い所につけられた山腹を幾曲り、とある山嘴の蔭で私達は溫泉へ行くまでの腹拵らへをした。Kさんの持つて來て呉れた稻荷壽司が迚も旨い。本流から岐れて廣い緩やかな澤沿ひの道を悠りと登つて行く。軈て宿屋の二軒ある新五色の溫泉だ。私達は右側の子金屋の玄關に靴を脱いだ。

旅の行商人が泊るでもあらうみすぼらしい二階の一室に通されてから一先づ人夫に持たせる荷物を整理する。硝子窓の外にはピュー〳〵と春らしくない强風が頻りに吹いてゐる。此の調子なら明日は靜かな春のお山が愉しめるなと思ひ乍ら朝食を攝つた。川向ふの山の中腹で薪を割つてゐた屈强な男、之が今日私達の荷を持つて家形小屋まで行つて呉れる人夫であつた。

勘定を拂つていよ〳〵宿を後に裏のヂグザグの徑を登つて行く。夏道は歩き悪い、脊中合せの五色から登つて來てゐる道を合せてから尾根道は全くの吹曝しである。風がひどいのでともすれば短スキーが帆の役目をして一緒に吹き飛ばされ様になる。賽の河原に出ると高倉山の斜面が右へ高くなるので風當りは割合に弱い。此處はスキーのシーズンになると一冬に必ず三人や四人の遭難者を出す所である。然し四月も末になれば雪はすつかり消えてゐる。東高倉の腹を捲いて南側になると今日の目的地たる家形山までの斜面が一眼に見渡せる。いよ〳〵スキーをつける所へやつて來た。澤には一面に雪がベットリとつき、朝の陽光は燦としてこの限りない殘雪に映え輝いてゐる。高倉小屋に一休し蟹ケ澤の上流を渡るともうやがて青木の小屋も近い。此の茫漠とした高倉山の東面は夏道の出て居ない限りテンで見當がつかない。私達は人夫を連れて來たお蔭でお責には十數年前の懐しい思ひ出のある青木小

屋に著く事が出來た。ギラ〳〵する外から、急に小屋の中へ這入ると暫らくは何も見えない。少し落着いてから悠り食料を出して晝食とした。夜行の疲れが出て來たのか、ともすれば眠くなる。人夫は私達が外で寫眞をとつてゐる内に横になつてはや鼾をかきはじめてゐた。

扨て家形の小屋まではもう一と登りである。可なりゆるんでしまつた雪の上を二十米突許り登り切ると平らになつて右手の方に吾妻山莊が見えて來た。人夫はしきりに周圍を物色し乍ら歩いてゐる。何をしてゐるんだ、と聞くと二月に客が落した金時計を探してゐる、といふ。四、五年前までは今頃來ると隨分色々のものが拾えたが近頃では東京の人もガッチリして來たと見えて餘り落し物はなくなつたとの事である。此の所案内に來たのだか拾ひものに來たのだか見當がつかない。

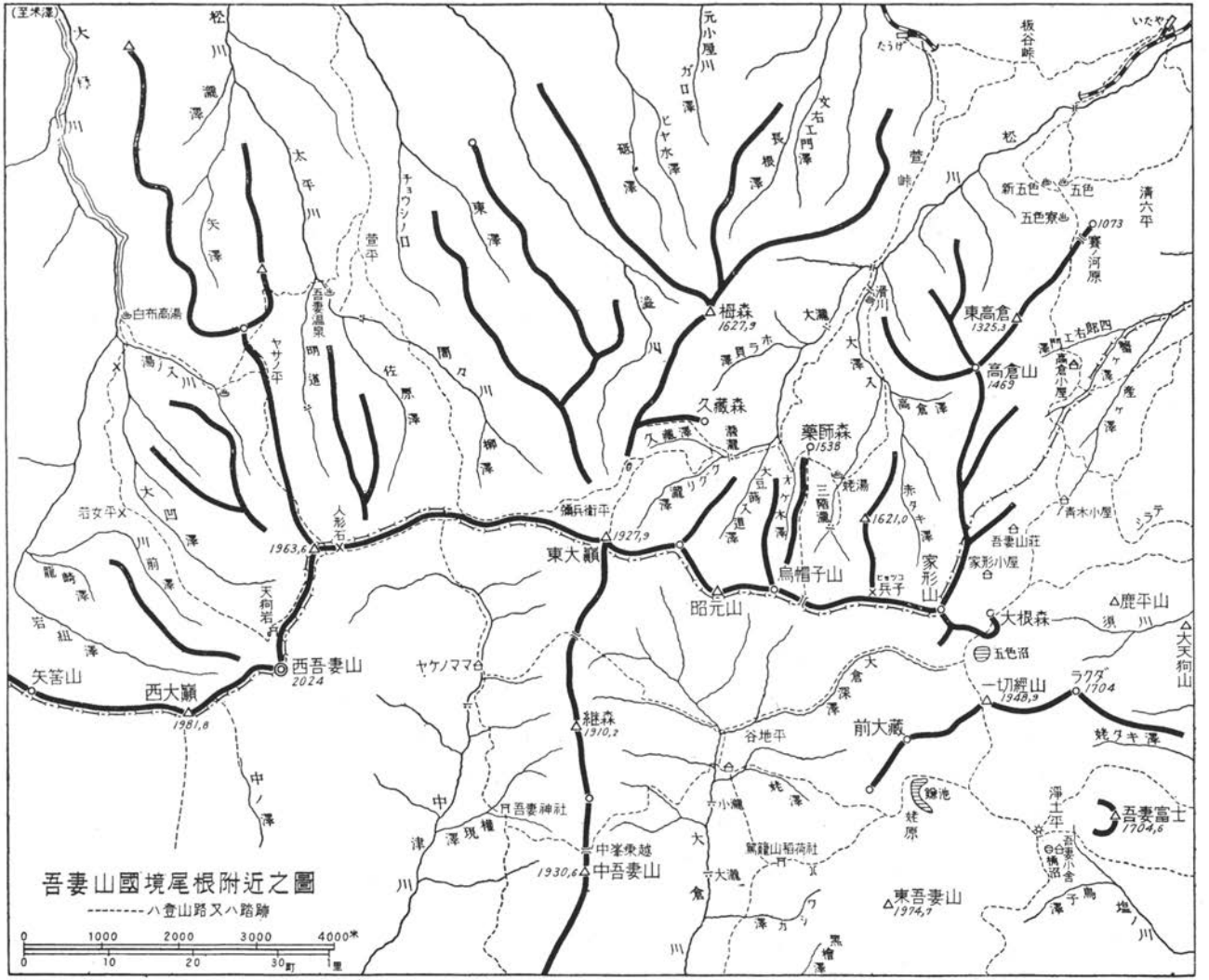
一登り、そして又一登り、最後の平らに出てふと前方を見ると今日の泊り場たる家形小屋が淋しく唐檜や

栂の樹林の中にポツネンと立つてゐる。小屋の周圍は約四尺位の殘雪であつた。人夫は小屋に這入ると直ぐストーヴに薪を投げ込んで火を起す。私達は靜寂そのものゝ山氣も胸一杯に吸ひ込みながら又短いスキーをつけて家形の肩の方へ登つて行つた。夕食を濟ましてから溫度の降下で多少表面が凍つて來た雪面を、氣持ちのいゝシュテム・クリスチャニヤでボーゲンを描いて降つては又登る。なほボンヤリと春の霞に薄れた藏王や飯豐等の山々の姿に見入つてゐる。此の廣いゲレンデを私は一人で滑り廻つてゐた。疲れて太い木株の上に腰を下ろし音もなく昏れて行く大吾妻の、果しない裾野原にじつと眼をやつた。

音もなく蒼茫として春かすむ
もがみの山の大きしずもり

七時頃に床に潜り込んで聞くともなしにストーヴの火を見守りながらボツ〳〵と語る人夫の話に聞入つてゐる内にいつしか深い眠りに落ちて行つた。

明れば三十日、鶯の啼き音に眠を覺まされて仕度も


吾妻山國境尾根附近之圖
------ハ登山路又ハ踏跡
0 1000 2000 3000 4000米
0 10 20 30町 1里
西吾妻山 2024
西大巓 1981,8
東大巓 1927,9
1963,6
中吾妻山 1930,6
東吾妻山 1974,7
吾妻富士 1704,6
一切經山 1948,9
前大藏
大根森
昭元山
烏帽子山
家形山
兵千
東高倉 1325,3
高倉山 1469
栂森 1627,9
久藏森
藥師森 1538
1621,0
継森 1910,2
矢筈山
ヤケノママ
谷地平
五色沼
ラクダ 1104
鹿平山
大天狗山
鏡池
姥原
吾妻神社
中峯乘越
鷲鐘山稲荷社
大瀧
黒檜澤
塩ノ川
鳥子澤
清六平
新五色
五色
五色寮
1073
寒河原
板谷峠
松川
太平川
東澤
佐原澤
柳澤
菅平
ヤサノ平
吾妻温泉
明通
白布高湯
湯ノ又川
若女平
大四川
前澤
龍崎澤
若狭澤
天狗岩
人形石
彌兵衛平
久藏澤
大澤
高倉澤
赤タキ澤
姥湯
三階瀧
大豆蔵澤
オケ木澤
青木小屋
吾妻山荘
家形小屋
シラテ
姥タキ澤
姥澤
小瀧
大倉澤
中ノ澤
中津川
現權澤
大倉川
ヤ澤
ワ澤
ヒヤ水澤
ガロ澤
砥澤
元小屋川
文右エ門澤
長根澤
菅峠
盛川
ヒヤ澤
ヒヤフコ

匆々人夫は跡片づけをして溫泉へ歸り、私達はいよいよこれから家形の肩に出て二人きりで高度二千米突の雪の頂稜を行く事となる。朝の六時から午後の二時まで殆ど五萬分の一の地圖の横幅だけの距離を上下するのだつた。密林を降り、或は茫漠たる雪原を行き、南に磐梯や中吾妻の山々、北には鳥海こそ見えぬ朝日や飯豊月山等の、霞の奥に嚴そかな雪峰を悠然と聳えさせてゐるおゝらかな姿を望みつゝ、唯々大自然の中に融け込んだ小さな二點として廣い頂稜を動いて行つたのであつた。

六時五分、小屋を後に唐檜や栂の林樹の間を家形の肩指して登つて行つた。Mは短スキーを擔いで行く、少しも滑らないのだ。尖つた大根森の峰を左に見つゝ樹立のない眞白な斜面をいゝ氣持ちになつて登つて行く。小屋から四十分で肩に著き一先づ荷を下ろして休憩とする。

五色沼にはまだ氷が張つてゐた。大倉深澤の源頭と五色沼とのあの廣い鞍部には雪が全然なく夏道が一切經の方へ一本瞭りと登つて行つてゐるのが見られた。肩からは直接登らず等高線に沿つて草地を西へ捲き森林帶にぶつかつてからその中を頂上へとスキーをつけてヂグザグに登る。家形の頂上は何處にあるのか一向わからない。森林が深くて兵子（ヒョツコ）への下りを何處からはじめたらいゝのかも見當がつかない。吹雪の時などだつたら全く困る所である。吾々はそれでもどうやら見當を外れず兵子の岩の下で休む事が出來た。岩峰は國境尾根より北にある。風が餘りないので雪上の憩ひも仲々暑い。

次の凸起もその殆ど頂上を過ぎ烏帽子との鞍部に出た。その儘頂上を目指す。所が頂上の西側には全然雪がなくて一面の這松の海となつてゐる。スキーでは迚も駄目なので引返した。家形の肩から烏帽子の頂上までは約一時間と見ればよい。東側の雪の上に腰をおろして第二回目の朝食を擇つた。

烏帽子の西南面は可なり下まで雪がないので吾々は百米突位下り昭元との間の澤にをり立ち改めて登り返

しをしなければならなかつた。岳樺が明るく點在する斜面を登つて昭元の頭に出る。振り返ると烏帽子の西斜面には全然鞍部まで雪がなく、國境と思はれる線に一本眞直に踏跡らしいものを認めた。昭元の頭は十時であつた。

之から東大巓までの間に一峰があるが、森林帶を下つた鞍部からは殆ど一直線に東大巓の三角點に行く事が出來る。此の邊へ來ると山へ來た樣な感じは全くなく唯だゞつ廣い雪原を涯しなく辿つて行くやうな氣持ちである。

十時四十五分、東大巓の頂上につく。家形の肩より四時間。來し方を見ると家形は早や遙かに遠ざかつてしまひ、森林が深い爲めに雪が何處にあるのかさつぱりわからない。よくもあんな所から登り下りをやつて來たものだと思ふ。高倉山の南面の崩れが赤く見えてゐた。繼森、中吾妻へ行く山稜も可なり南へ行かねば明瞭にならない。西方西吾妻までこゝから直線距離で一里、然し地圖と實際とでは餘程感じが異つてゐて實に雄大である。大洋上のあるかなしかの大きなうねり、そのうねりの一つ一つが西吾妻の頂上であり、天狗岩であり、人形石であるのだ。栂森への稜線には雪庇がまだづつと殘つてゐた。皆東側へ向つて張り出してゐる。

十一時二十分東大巓を後にする。霞がかゝつてゐてすつきりと霽れては居ないが風もなく實に暢んびりとしたお山である。目標目指して雪原の上を眞直に歩く。スキーを滑らせる樣な坂がないのだ。何處までも雪の原の一番高みを辿つて行き軈て人形石の東鞍部を望む地點へ來た。五萬の地圖に草地の記號の入れてある所である。そこまでは稍々滑る。ふと前方を見ると人間らしいのが二人現はれて來た。やがて斜面を滑りはじめた。直滑降である。一人はでんぐり返しをやつたが直ぐ立上つて下つて行つた。「オーイ」と呼んだが立どまらない。鞍部へ行つたら會へるだらうと思つたがその人達はヤケノマヽへでも下つたと見えてそれつきり姿を現はさなかつた。

人形石への登りは稍々急である。頂稜も地圖に出てゐるやうに長い。地圖の人形石らしい所へ來たのは十二時四十五分であつた。二人のシュプールは此處から夏道通りに下つて居た。吾妻溫泉の方からでも登つて來たのであらう。

之から南方へ今度は天狗岩の峰を極めるのである。茫漠としてゐて地圖で見るよりは餘程距離が長く感じられる。スキーの裏には何もついてゐないので少しの斜面では滑らない。ワックスなどいくら塗つても直ぐはがれてしまふ。相手が鑪のやうな雪であるから仕末が悪いのだ。こういふ時はどうしてもセルロイドでもはりつけてある方がいゝやうである。

一時三十五分にどうやら天狗岩に辿り著いた。頂上は鴛の河原式になつた一面の岩原である。新しい五萬の地圖には若女平への尾根道が記入してあるが、雪がかぶさつてゐるので何處から下りはじめていゝのか見當がつかなかつた。西吾妻の頂上へ行つて見たかつたが下り道を探す事や、雲が出て風が吹き出し大部寒くもなつて來たので之は割愛する事にした。岩蔭に風を除けて殘りの食料と水を平らげ、二時十分そこを出た。

岩原の西の端れに堂宇があり、その東北一町許りの所に戸たん葺きのお助け小屋が見えた。下り道は此の堂宇からはじまつてゐたが直ぐ下で雪の中へ消えてゐた。尾根筋を間違はぬ樣充分愼重に下つて行くと軈て森林地帶の中で明瞭に切開かれた場所に出たのでそれからは何の心配もなくどん〳〵スキーを滑らせて行つた。頂上から若女平までは三十分であつた。

若女平の北の端れから約百米突許り下る間は案外悪い。右側は大凹澤へ絶壁をなし、殘つた雪庇が今にも崩れん許りで吾々はどうしてもその上を通らなければならないのだ。左側は大樽川の本流へ落ちてゐる急斜面で雪はないが藪で迎も通れない。此の難所を過ぎて夏道は次第に尾根から右側へ外れるやうになつてゐる。地形も棚狀をなして自然にそつちへ滑り込むやうになつてゐたのでそのまゝ下つた所、下はどうも瀧になつてゐるらしい。水の音が聞える。ハテナ、と思つ

て尾根筋へ戻つて見たが道らしいものはない。高湯は見えないがあの森の向側だ。どうも面白くない。エ、まゝよ、と許りに瀧の上へ滑り下つて見た。そしてあたりを見廻した。あつた、雪が消えて道が出てゐた。之でやつとホツとした譯だがも少し時期が早かつたら初めての人には一寸困る所である。

それからは鼻唄まぢりに下の河原へ下り、廣い街道を歩いて四時十五分、白布高湯の中屋へ荷とスキーをおろす事が出來た。朝六時に家形の小屋を出て約十時間で縱走が完了した譯になる。東大嶺を境にしてその東西の地形の相異には著しいものがある。家形、東大嶺の間はどつちかと云へばせゝこましい。然し、東大嶺、西大嶺の間の南北は實に大きい。それだけに又、登山殊にスキーには注意が肝要である。吾妻への旅は之で私は二度目である。今度はいづれ秋の頃、此の山を南北に横斷して見やうと思つてゐる。

白布高湯には宿屋が三軒、東、中、西と仲よく並んでゐて皆相當に時代を經た建築である。中屋は眞中にあつたので飛び込んだゞけであるが待遇は仲々いゝ。東屋でも西屋でも同じ相場と思ふが、安いのにも驚いた。それに宿の人達の氣分がいゝ、少しも都會ずれがしてゐない。湯も熱いのが豐富に湧いてゐる。お神さんから娘さんから女中さんまで皆瓜實顏で美人ぞろいだ。靜御前のあんなに澤山居る宿屋も珍らしい。

冬眠をしてゐたハイヤーも一週間前から通ひはじめたといふので吾々はそれを賴んで七時十五分に宿を出た。割前を出すから米澤まで乘せて行つて呉れとの事で二人許り同乘する。お蔭で一臺六圓が三圓で濟んで大助かりであつた。米澤の街は丁度櫻が滿開で而も上杉神社のお祭りの最後の日とかで大變な賑ひ方であつた。驛着、八時五分、汽車は九時二十六分。ガラ空きで上野へ着くまで（六時十二分）ぐつすりと寢込んでしまつた。

地　圖　陸測五萬「吾妻山」「福島」

參考書　福島山岳スキー倶樂部編

「吾妻・盤梯・（五色・沼尻）」

アレキサンダー・ミッチェル・ケラスに就いて（二）

望月達夫

六

あの輝かしい第三回ヒマラヤ遠征を終へて英吉利に歸へつてから丸一年を出ずして、ケラスは又もやシッキムの山へ足を向けた。卽ち一九一二年七月四日ロンドン發、同月二十二日ダージリンに到着して、シッキムの山へと北上し、カンチェンヂャウ Kangchenjhau（二二、七〇〇呎、六、九一九米）に登攀した外許多の峠を越へて、此の地方の山岳に對する過去の知識に、更に新たなものを附け加へたのであつた。

此の第四回目のシッキム遠征の目的は、ケラスが多年胸裡にゐがいてゐたカンチェンヂュンガの北尾根及西尾根を偵察し、尙その本體に接近するルートを發見することに在つたが、殆ど絶望的とも云ふべき惡天候に災ひされて所期の目的は達することが出來なかつた。

一九一二年七月廿四日、三十一人のクーリーと共にダージリンを出發。三十一日、ラッチェン着。ラッチェンへ着く迄はまだカンチェンヂュンガを目指してゐたが、惡天候の爲止むなく、も少し手頃な山を選ぶことゝなり、前年充分偵察したカンチェンヂャウに登る計畫を樹てたのである。

カンチェンヂャウのルートとしては、曾てケラスが

セビュ・ラから偵察した南方からのものと、パウハン（註一）リ或はチュミオモから見極めてをいた北方からのものと二つあるのであるが、モンスーン期の爲に南方からのルートは不可能であることを知り、北方から取り附くことゝなつた。

かくして彼は七人のシェルパと十五人のラッチェン人をゼム氷河を經てグリーン・レークに送り、一方自身は二人のシェルパ（アンダーキョウ Anderkyow とネマ Nema）と三人のラッチェン人を伴つて、カンチェンヂャウを目指して進んで行つた。第一日目はクンゴ着。三日目には早くもカンチェンヂャウの山側に接近した。彼は此の時ラッチェン人がシェルパと比べて如何に弱いものかを見出してゐる。四日目は美しく晴れたが、クーリーの故障等の爲一九、二〇〇呎の地點にキャムプを据てから登路の偵察に費し、約二一、〇〇〇呎の一コルに達した。次の日は降雪で終日を無駄にし、その翌日（彼の敍述によつても的確に月日が判らない）二人のシェルパと共に七時に出發。二時間後には前記のコルに達し、更に西方に向けてファイナル・アッセントにかゝつた。十一時岩場の基部に至り、かくて午後一時十分遂に絶巓の臺地（プラトウ）（註二）に辿り着いたのであつた。

カンチェンヂャウの主稜は東西に走り、その南北に素晴らしい絶壁を懸けてゐる巨大な岩脈から成り、この主稜の東端から更に二、三の尾根が派生し、この山群には全體で少なくも十二位の峯頂が含まれてゐる、と彼は述べてゐる。

ケラスの一行は午後二時四十分往路通り下山の途につき、コルへは四時半に戻つたが、コル下方の急斜面を下降中先頭のアンダーキョウがスリップし次のネマが之に續き、最後のケラスもこれを止め得ず捲き込まれて落下したが、幸ひ大きな怪我は負はずに濟んだ。

カンチェンヂャウの初登頂に成功してから、ケラスの一行はクーリー達の待つてゐるグリーン・レークに至る可く、一旦ギャムトショナ Gyamtshona 近くの谷に下り、其處の西藏人の天幕を訪れ、斯くして八月九

日には、チュミオモの直ぐ北なるチュミオモ・ラ（一八、八〇〇呎）を越え、西方カンリンゲン Kanglingen 山群及遙かにエヴェレストの雄姿に接した。十日にはナゴ・ラ Nago La（一八、一八六呎）を、十一日テ・ラ The La（一六、七五二呎）を、十二日タンチュン・ラ（一六、三三三呎）を越へ、その夜八時半頃霧深きグリーン・レークに達した。

翌日は雨や雪が降り、加ふるに既に六日間こゝにゐたクーリー達の言によれば、ずーつと惡天候なることを知り、早速方向をかへることゝなつた。八月十四日テント・ピーク・パスに向けて東テント・ピーク氷河を登り、十五日には極度の困難に打ち克つてその氷瀑を越えた。しかし濃霧は深く視界を包み、一九一一年の五月には難なく越へたこの峠も、ルートを見出すに非常に骨を折り、十六日の朝に至つてやつと峠に達し、その北側に幕營をし、クーリー達を北方チャンソン・チュ Chunson Chu に下して焚木を集めさせた。後發のクーリー達を待つて二日間を空しく暮した後、十九日に至つてクーリー達が云ふことを聞かなくなつたことを知つた。が結局シェルパは良き山の伴侶であり、ケラスは「この遠征の終りに近づくに從つて、吾々は實に仲良く行動を共にした。シェルパの多くは全く良い仲間達である。」と書いてゐる。

八月二十日は美しく晴れた。若しジョンソン・ピークの二〇、〇〇〇呎に幕營してゐたならば必ずやその絶頂を、と彼は口惜しがつた。それで當時既にローナックの谷にゐた彼は、幕營地近くの高地に登りカンチェンヂュンガの北尾根及北西尾根を偵察したが、それが豫想以上に困難なのを知つた。しかし彼は云ふ。「私がフレッシュフィールド氏に對して答へた、カンチェンヂュンガの登路は恐らくは北方乃至北西方の何れかに存在すると云ふ結論を修正する必要は少しもない」と。

かくてこの夕刻には天幕をフリューテッド・ピーク Fluted Peak の向ひ側に据えた。

翌二十一日には暫く離れてゐたアングーキョウとも

一緒になり、二十二日の午後はローナック氷河の南岸一八、〇〇〇呎に天幕を移動した。二十三日、ジョンソン・ピークの北東バットレスの基部に天幕をもち上げ、該峯の登路を偵察したけれ共、深雪と加ふるに濃霧、續いて起つた降雪に一時登攀を中止せねばならなかつた。

八月二十六日、再度偵察を敢行して、天幕を一八、七〇〇呎なるファイナル・ピークの直下に置いた。連日の降雪によつて雪は深くかゝる狀態では登攀が全く不可能なるを知つた。乍然北東バットレスに沿ふた急峻な斜面を辿つて二一、五〇〇呎の地點に至り、其處から高度二四、〇〇〇呎餘の絶巔へは餘り困難なく達せられると彼は確信してゐた。五月か九月の頃であればこのルートが最も良いと彼は云つてゐる。

今一つの可能的ルートは、彼が一九〇九年に偵察した北側からのものである。當時彼は二一、五〇〇呎の地點に天幕を据え、ウェイブ・バットレスを二二、〇〇〇呎迄登つたが、その上方には急峻ではあるが絶巔へのルートが求められると云ふ。

更に東面、南面には岩壁が圍繞し、その接近はむしろ困難である。若し天候の見定めさえついたなら、彼は北方から再度攻擊する心算りでゐたが、續く三日間山頂は霧にかくれ全く姿を出さなかつた。しかも彼がジョンソン・ピークへ登る目的は、エヴェレスト、チョモカンカール、チョモランモの山群を望見することであり、又カンチェンヂュンガの北尾根及西尾根を更に偵察することであつた爲、この惡天候は彼にとつて全く致命的であつた。

斯くて相談の末、八月二十八日の午後天幕をチャンソン・チュとランボ・チュの出合に移し、大部分のクーリーを歸へして、アンダーキョウ、ネマ及他二人のクーリーを伴ひ、ドタン谷 Dothang へと北上した。八月三十日、この谷の近くなる一二、〇〇〇呎の尾根上から西藏へ赴むかる可き許多の峠を望見し、彼は峠の近くに手頃な峯の在るものを探し求めた。此の時彼は又チョルテン・ニマ・ラからナゴ・ラに至る迄の國境山

脈を一望の中に收むることが出來た。そして丁度眼前に在るコラエデュ・ラ Koraiyedu La と呼ばれる一峠がその兩側に夫々手頃な峯を持つてゐて彼の注意を引いた。その峯は東コラエデュ・ピーク、西コラエデュ・ピークと呼ばれるものである。又一八九九年フレッシュフィールドの訪れたサヨク・コル Sayok Col の東面も眺められた。彼は又眼下に長さ一哩半、幅半哩乃至四分の三哩なる美しい湖を見出し（當時如何なる地圖にも記入はなかつたが、シッキムでの最大なものと彼は云つてゐる）、その畔に一泊し、翌日コラエデュ・ラ（一八、三〇〇呎）に登つた。この峠は西方のチョルテン・ニマ・ラよりも遙かに低く登りも樂であるが、西藏側の下降が非常に困難な爲、通路として利用されることが殆どない。

ケラスは峠の下方七十哩の北コラエデュ氷河に天幕を張り、翌日は東、西コラエデュ・ピークに登る計畫を胸にゑがいてゐた。卽ち西峯はその北西稜乃至西面から、東峯は峠から或は更にその東方にある鞍部から登り得るものと確信してゐた。

不幸にも翌朝は霧と雪に明けた。既に時日に餘裕のなくなつた彼は、一切を放棄し往路通り戻つてきた。そしてティスタ川沿ひに急ぎダージリンに歸着したのであつた。

（註）本章は主として左の文に依る。

A. M. Kellas "A Fourth visit to the Sikhim Himalaya, with Ascent of the Kangchenjhau" A. J. Vol. 27 (May 1913) pp. 125—153.

（註一）「山岳第三十三年第二號」一二七頁參照。

（註二）「ヒマラヤン・ジャーナル第九卷」（一九三七年）對一五六頁所收のカンチェンヂャウの寫眞に依つても判る通り、この山頂は平坦な臺地をなしてゐる。因に右の寫眞は一九三六年エヴェレスト遠征の歸途、シプトン E. E. Shipton ケンプソン E. G. H. Kempson が登頂したゴルダマ Gordamah（二二、二〇〇呎）（カンチェンヂャウの直ぐ東に在り）から同年七月三日撮影せられたものである。

七

其後ケラスがヒマラヤに足跡を印したのは一九一四

年のことであつた。此の時彼は曾遊のガルワールに赴き、特に高度の肉體に及ぼす影響及び登攀に際しての酸素使用の實驗等を計畫して、西側からカメットに接近したのであるが、時將に歐洲大戰の勃發に當り彼の壯擧も中止のやむなきに至つた。そして一九一四年のカメットに關しては詳細な記錄は少しも殘されてゐない。(註一)

斯くて大戰中は彼の研究室に於て、酸素使用の問題、高度の影響等の實驗に沒頭し、或ひはミドルセックス・ホスピタル醫學專門學校の教師として、或ひはロンドンに於て科學者として爲事をなしたが、彼の異常な心身の酷使は遂に病の冒すところとなつて、一九一九年には故鄕スコットランドに歸省しなければならなかつた。しかも漸く病の癒えた翌年四月には周圍の友人達が驚くのを尻目に、既に平和が齎らされた歐洲をあとにして三度ガルワールへとやつて來たのである。

× × ×

一九二〇年のカメット遠征は、後年行はる可きエヴェレスト遠征の準備に貢獻する目的もあつて、ケラスの科學的實驗の準備は更に大がゝりなものであつた。彼は英吉利のエヴェレスト遠征準備委員會の一分科會なる Oxygen Research Committee 及 Medical Research Committee の援助を得、種々なる實驗用の器具備品を借り入れ、既にその年の四月には印度に渡つて器具類の到着を待つてゐた。乍然種々な理由の爲に本國からの到着は遲れ、又印度内の輸送も意の如くならず、彼がいよ〳〵ガルワールに這入つたのは、その年も既に八月になつてからのことであつた。

八月八日、カトゴダムをあとにし、十九日にはチョモリ Chomoli に達し豫て同行を約してゐたモーズヘッド Major H. T. Morshead と一緒になり、二十二日ジョシマート、それから五日後にニティ Niti に達した。一行は彼等二人の外にモーズヘッドの連れた輸送官一名と十一人の從者及臨時のクーリー四十名とであつた。

ニティにて荷物の整理を終へ、二十九日出發して、三十一日にはライカネ氷河 Raikane の末端一五、三〇〇呎の地點にベース・キャムプを設置することが出來た。彼のカメット攻擊は今迄主として西側からなされたのであるが、今度は曾てミード C. F. Meade が偵察した東側卽ち ライカネ氷河を始めて訪れたのである。

此のベース・キャムプに於て既に高度馴致(アクリマタイゼーション)の必要を感じた一行は、暫く休養をとり、九月三日いよ〳〵登攀は開始されることゝなつた。かくて東カメット氷河に沿つて前進が續けられ、同日一六、八〇〇呎の地點にキャムプを進め、それからは荷物や燃料の運搬に手間取つて、一八、五〇〇呎に第三キャムプを設けたのは八日のことであつた。この地點からルートは東イビ・ガミンとカメットとを結ぶ主稜上の一鞍部(ミーズ・コル、二三、五〇〇呎)に求められ、この鞍部こそカメット登頂の鍵であると思考された。

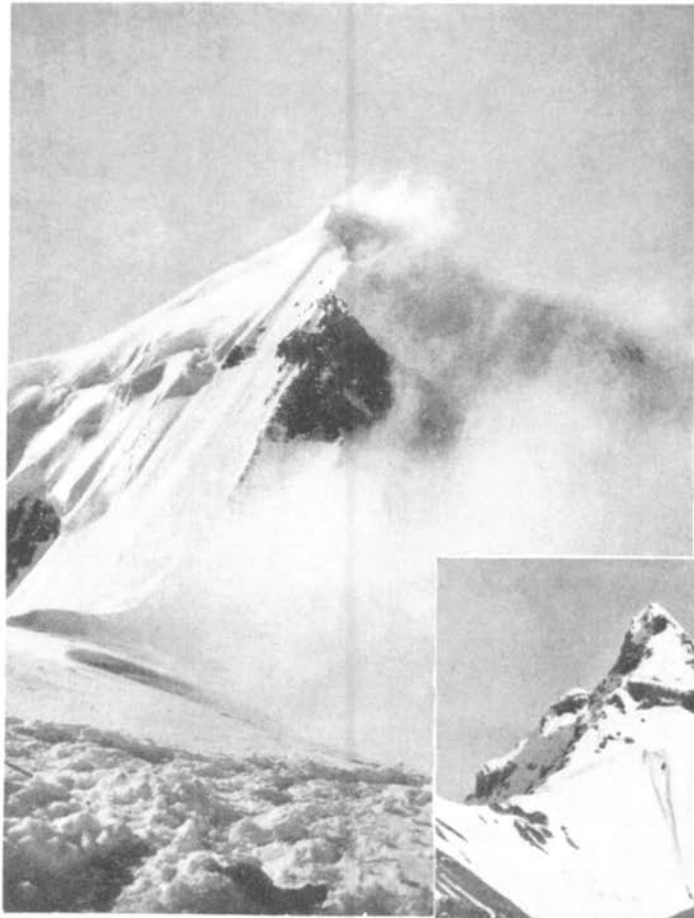
九月十一日、二一、〇〇〇呎の地點に第四キャムプを立てたが、其後の荷物運搬が進捗せずして一週間の滯在を餘儀なくせられ、十九日漸く二二、〇〇〇呎に第五キャムプを張つた。更に高度馴致の爲此處に一日滯在して、二十一日にはマナから伴つた三名のクーリーと共に午前九時に出發し、午後三時遂に稜線上に達したのであつた。ケラスは更にコルから百呎許り登高を續けたが、同行のクーリーはこれ以上の登攀を肯んぜず、止むなく登高を一旦中止して第五キャムプに戻つた。この時達した二三、六〇〇呎こそ彼等の登り得た最高地點で、カメットの頂より高距にして僅か一、八〇〇呎餘りの高所であつた。

ケラスは再度カメットを試みんとして、ミーズ・コルにキャムプを進めやうとしたが、近づく冬の吹雪と深い降雪を理由にして、クーリー達が從はない爲、又一方モーズヘッドの時日の餘裕もなくなつて下山せねばならなくなつた爲、カメットの登頂を一應斷念した。おそらく此の時彼がミーズ・コルに前進キャムプを設け得たならば、カメットの絕巔は疑ひなく完登せられ

てゐたであらう。

九月二十二日、モーズヘッドは彼の連行したクーリーを伴ひケラスに別れて往路通り下山の途についたが、ケラスとラルタン・カーン Laltan Khan は更に此の地に殘つて、それ迄まだ遂行出來なかつた科學上の實驗をなした。ベース・キャムプに戻つた彼は、ライカネ氷河とガネシュ溪谷 Ganeshganga との間にある一鞍部にキャムプを設け、その近くにある二一、七〇〇呎の美しい一雪峯に登らんとした。卽ちこの目的は前に說明した通り Oxygen Research Committee の委囑をうけた、氣筒に酸素を壓搾したものと、曹達の過酸化物を處理して得た酸素（註二）とを登攀の實際に使用して比較研究することであつた。しかしクーリー達が荷物運搬を拒むだ爲、彼も仕方なく一旦ニティに下り、十月一日其處に達して、翌日更に十哩南のマラリ Malari に至つた。そして敍上の實驗の爲に新たに方向をかへて南東なるバギニ氷河 Bagini を測り、登高も比較的容易であり、且實驗に好適なるデュナギリ Dunagiri（二三、一七〇、一八四呎、六六米）に登る考へであつた。そして十月三日マラリを出發して、五日にはデュナギリの部落に至り、其處のクーリーを使つてデュナギリの二〇、五〇〇呎にキャムプを設置せんとしたが、クーリーの無能のためこの計畫も放棄し、バギニ氷河の北西に聳ゆる二一、〇〇〇呎の峯を選び、その一八、〇〇〇呎の地點に漸くキャムプを設けることが出來た。彼がこの高所キャムプに滯在せる一週間は、前述の科學上の實驗に費された。そしてデュナギリの部落には十月十六日に下り、ジョシマート、ラニケート等を經てカトゴダムへは十一月五日、同九日に約四箇月半振りでダージリンに歸還したのであつた。

ケラスがこの遠征でなした實驗の結果はかなり詳細に亘つて Oxygen Research Committee に提出せられた。この貴重な報告は、登攀に際しての酸素吸入器使用の問題、その氣筒の種類、高山病、高度馴致、高度地に於ける食物、高度の肉體に及ぼす影響、登高の速度、高度と氣壓との關係等多岐に亘るものであつて、



ケラス峯

—"Kangchenjunga Adventure" より—

ケラス岩峰の東面

H. J. VI. VIII より

A. M. KELLAS

— A. J. VoL. XXXIV より —

それ等の詳細については G. J. Vol. 57 (Feb. 1921) 一二六—一三〇頁を參照されたい。

(註) 本章は主として次の文章に依る。
"Dr. Kellas' Expedition to Kamet" G. J. Vol. 57 (Feb. 1921) pp. 124—130.
H. T. Morshead "Report on the Expedition to Kamet, 1920" G. J. Vol. 57 (Mar. 1921) pp.213—219.
藤木九三「カメット峰の登高史」(「アルピニズム」二號、三號、昭和六年)

(註一) G. J. Vol. 58 (July 1921) p. 74.
前掲モーズヘッドの文章を參照。

(註二) 前者は普通 Oxygen cylinder と呼ばれ、後者は Prof. Hill の考案したゴム製の袋に入れられた爲、Prof. Hill's rubber bag と云はれる。

八

カメットから歸へつて一九二〇年十一月ダージリンにやつてきたケラスは、僅かの休息もとるやとらず、カン・ラ Kang La (一六、三七三呎)西北の一峯(一八、〇〇〇呎)に登つた。時正に十二月であつたけれ共、彼の苦心は報ひられて、其の頂上及カン・ラの近くから貴重な寫眞が撮影せられ、殊に當時未だ知られてゐなかつたエヴェレストの北方に在る山々の寫眞は非常に價値高きものであつた。之は又、續いて敢行されたエヴェレスト第一回遠征の計畫に重要な資料となつたことは言を俟たない。因にこの時撮られたエヴェレスト及その北方の山脈の印畫は G. J. (Vol. 57 April 1921. p. 273) に挿入されてをり、又ジャンヌ Jannu とヤールン氷河 Yalung の壯麗な印畫は G. J. (Vol. 58 July 1921. p. 74) に收められてゐる。(註一)

彼がラマ・アンデン Lama Anden (一九、二五〇呎、八六五米) に登頂したと信じられてゐるのも、この年のことであらう。

年が明けた一九二一年の春、英吉利が多年の宿望であつた第一回のエヴェレスト遠征隊はホワード・バリイ Colonel Howard Bury を隊長として組織せられた。(註二) 既に英吉利に於てはアルパイン・クラブ及びロイヤル・ジェオグラフィカル・ソサイエティから錚々たる

メンバーが選出せられ、遠征準備委員會を組織して、萬全の準備をなしてゐた。當時ヒマラヤ通として第一流の人物たりしケラスにも當然電信が飛び、遠征隊の一員に參加を希望してきた。彼は齡既に五十三歳（註三）に垂んとしてゐたが、その登攀隊員として敢然參加を申し出で、又周圍の人々も彼の異常な精神力と强靱な肉體とが、よく高峯の登攀に耐え得ることを信じて疑はなかつた。

斯くして彼は、熟知せるシェルパ、ボーティアのクーリーを出來るだけ集め、全力を傾倒してその訓練に當り、彼等の多くを立派な登山家に仕立て上げたのであつた。

冬の季節が去り春が次第に訪れかけると、ダージリンに於てはエヴェレスト遠征の準備が忙しげに開始され、隊員の顏振れも次第に揃つてくるやうになつた。一方ケラスは更に偵察を敢行せんとして、その年の四月再びカン・ラに達し、その近くの一九、〇〇〇呎なる一峯に登頂し、エヴェレストの北側を前よりも更に能く望見することを得た。次いで彼はナルシン Narsingh（一九、一三〇呎五、七七〇米）に登頂し、カブルー山群の重要な寫眞をとることが出來た。更に彼は歩を延ばしてカブルー Kabru（二四、〇〇〇呎七、三一六米）に取つき、後日之に登頂せんとして、その氷瀑をこえ、多くの困難を冒して二一、〇〇〇呎の地點迄達したが、既にエヴェレスト遠征隊出發の日も目睫の間に迫つたため、この登攀を一時放擲してダージリンに歸へつた。このシーズンに彼の登頂したカン・ラ近傍の二峯及ナルシン、ラマ・アンデンは勿論總て初登頂であつた。

彼がダージリンに歸還したのは五月十日の夕刻であり、それから十日足らず、即ち十九日にはエヴェレスト遠征隊の一員として西藏に向けダージリンを出發した。一行はチュムビ Chumbi の溪谷沿ひに西藏の高原を經て進んでゐた。そしてカンパ・ゾン Kampa Dzong（或は Kamba Dzong）に達した六月五日、この偉大なヒマラヤの先蹤者は、急發せる心臟病の爲に永久にこの世を去つた。

遠征隊の隊長であつたホワード・バリイはケラスの死について次の様に述べてゐる。(註四)

「我々が會話を取り交はしてゐた時に、一人の男が非常に興奮して走つて來て、ケラス博士が路上で突然急逝したことを報じた。彼の衰弱が次第に快方に向ひつゝあつたので、吾々は此の知らせを殆ど信んずることが出來なかつたが、ウォラストンは直ちに馬から下りて、その眞僞を確かめに行つた。が不幸にもそれが全く疑ひを差しはさむ餘地のない事實であることを知つた。急逝の原因は、極度に衰弱してゐる肉體を、無理に高地へ運んだことから由來した心臟痲痺であつた。彼の死はあらゆる方面で、この遠征隊にとつて重大な損失であつた。何故ならこの遠征に非常に重要な意味をもつ登攀に際しての酸素使用の實驗は、彼のみが充分に成し得たのであり、又その題目に就いては彼こそ最も卓越せる手腕を有つてゐたからである。彼の飽くことなき研究心は遂にその肉體を亡ぼす結果となつて了つた。卽ちこの年の早きに、彼はマウント・エヴェレストの新らしい角度から見た寫眞を撮影せんとして、ヒマラヤの懷深く這入り、その肉體を極度に酷使したのであつた。翌日吾々は彼の遺骸をカンバ・ゾンの南方なる丘の斜面に埋めた。その場所こそは他に比類ない程美しい處で、廣漠たる西藏高原の彼方には、ヒマラヤの大山波が起伏し、その中には只彼のみが登頂したパウハンリ、カンチェンヂャウ、チョミオモの三高峯が聳立してゐるのである。又其の場所からは、西方遙か、おそらく百哩以上も彼方に、他の群峯より拔きん出たマウント・エヴェレストの雪嶺が望見せられた。彼が最も偉大な登頂の功績を殘した山々に見守られ、又彼が多年接近せんと熱望してゐたかの巨岳に望見されつゝ、安らかに彼は横たはつてゐる。其處こそは、偉大な登山者の憩ひの場所として最も相應しい地であらう。」

又ヒマラヤの先驅者であり、エヴェレスト遠征と因緣淺からざるサー・フランシス・ヤング ハズバンド

Sir Francis Younghusband は、かの有名な「エヴェレスト登山記」に次の様にケラスの死を記してゐる。(註五)

「ちやうど、この一萬七千呎の高度を持つ山稜の一つを横斷してゐる時に遠征隊最初の災禍が起つた。ケラスとレバアンとは既にパリで病床についてたのであつたが、中でもケラスの容態が惡るく、到底馬に乘ることが出來なかつたので吊臺によつて運ばなければならなかつた。しかし見受ける所、彼は元氣さうにしてゐたので、誰も危急なことが起らうとは思つてもゐなかつた。登山隊がちやうどカンバ・ゾンに到著した時だつたが、一人の男が、ホワアド・バリイとウォラストンとが話してゐる所へ、息せききつて馳け つけて來て、ケラスがたうとう途上に病歿したと注進した時には、一行は全く悲慘なる激動を受けたのであつた。ケラスは心臟衰弱の結果遂に再び起てなくなつたのであつた。

このスコットランド生れの山岳人は誠にスコットランド人にふさはしい不撓の精神と山岳に對する心の愛に誘はれて、遂に、その衰へた身體を死に至るまで驅つたのであつた。彼は自らを差控へることは出來なかつた。彼にとつて絶頂は誠に退き得ない誘ひであつた。彼の亡骸はカンバ・ゾンの南にある山の斜面に埋められた。ちやうどそこからはエヴェレストは一望のうちに納められる。我々は、嘗て彼が征服した山々の展望のうちに靜かにねむる事を願ふ。巨大なパウハンリ、カンチェンヂャウ、チョミオモの峯々——彼が、彼のみが征服したこれらの峻峯は今彼のまはりに聳え立つてゐる。こゝに、世界の最巨峯にかこまれて、これらの大山岳を此上もなく愛好した山岳人の身は埋められた。けれども、彼の熱烈な精神はいつまでもヒマラヤ登山隊の一人一人に力强いはげましを與へて行つたのであつた。」

遠征隊の一行が未だエヴェレストの脚下に達しない時に、彼ケラスを失つたことは餘りにも値の高い損失であつた。何故ならば、彼こそは一行の中でも最も良くヒマラヤを知り、高度馴致の科學的研究にも造詣深

く、又最もクーリーの訓練及びその驅使に長けて居たからであつた。しかし前年の秋カメットから歸へつて以來、ダージリンに居た僅かの時日は遠征隊の準備にクーリーの訓練に忙殺され、又その多忙な間に度々登山を行つた彼にしてみれば、當時既に齢五十歳を越へてゐたその心身にとつて、之等の難事が餘りにも苛酷なものであり過ぎたことは今更説明を要しないであらう。充分な榮養は勿論のこと充分な休息もとれず、總身全く消耗し切つてゐたのであらう。唯その不撓不屈の精神力のみが彼を驅つて西藏の蒼穹の下に至らしめたのであつたが、遂に肉體はその苦闘に耐えず五十三歳を一期として彼が片時も忘れることの出來なかつた亞細亞の聖峯に取り捲かれた地を、其の墓所としたのであつた。

（註）本章は主として左の文章に依る。
Geographical Jour. Vol. 58 (July 1921) p. 56—57 (Mount Everest Expedition)
G. J. Vol. 58. p. 73—75 (Obituary—A. M. Kellas)
"A. M. Kellas" by J. N. Collie (A. J. Vol. 34. pp. 145—147)
H. W. Tobin: Exploration and Climbing in the Sikkim Himalaya (H. J. Vol. 2)

（註一）之等の印畫は英吉利本國のエヴェレスト遠征準備委員會に送られた。一九二一年三月七日開催せられた會合の席上で、エヴェレストに接近すべきルートに就き説明したノルマン・コリーはケラスの寫した右の寫眞をその席上に持參し、それから多くの資料を得てゐる。

（註二）第一回のエヴェレスト遠征隊の顔振れは左の通りである。
Col. Howard Bury（隊長）、Harold Raeburn (leader), A. M. Kellas, G. L. Mallory, G. Finch（以上登攀隊員）A. F. R. Wollaston（醫者）、H. T. Morshead, O. E. Wheeler, A. M. Heron（以上印度測量局より參加）。
（尙フィンチは出發直前病床に在りて、その代りに C. H. Bullock が參加することゝなつた。）

（註三）ケラスの生年が明らかでないことは前に述べた（「山岳第三十三年第二號」八五頁）が、一九二一年に五十三歳であることから逆算すれば、彼の生年は大體一八六九年である。

（註四）Howard-Bury: Mount Everest, the Reconnaissance,

1921, p. 54.

（註五）田邊主計譯「エヴェレスト登山記」六八―七〇頁。

九

第一回エヴェレスト遠征隊の一行が、歸途カンバ・ゾンに歸へつてきた時のことをバリイは左のやうに敍述してゐる。（註一）

「十月十一日、吾々はカンバ・ゾンに到着した。（中略）午後吾々はケラス博士の墓所を訪れた。墓石には、吾々の居ない間こゝのゾンペンが碑銘を刻んでをいて呉れた。彼の名前の頭文字と、その死せる日とが、英語と西藏語とでその上に刻まれてゐた。これこそ彼の永却の憩ひの場所を示すものである。」

登山者として最も相應しいケラスの墓所は、其後訪れる人も稀に、白銀に輝くヒマラヤの雪嶺に見守られつゝ淋しく蹲踞してゐることであらう。そして唯、其後數回に亘つて敢行されたエヴェレスト遠征隊が、この地を通過した時に、彼の後繼者たる可き若い時代の登山者達によつて、懇ろに訪れられたことであらう。

一九三三年の最も成功的なりし、第四回エヴェレスト遠征の途次、其の隊員なるスマイス F. S. Smythe はケラスの墓にもうぜる日のことを回想して次の様に綴つてゐる。（註二）

「カンパ・ゾンを去るに臨み、吾々はケラス博士の墓所を訪れた。彼が永眠せる一九二一年に建てられた墓表は既に毀れて破片に化してゐた。それで吾々は砂岩の平らな石を見つけ、シェビイ Shebby が念入りに、寸法を計り、新たに左の通り碑銘を書き記した。

A. M. Kellas,

1921

Om Mani Padmi Hum*

この文字は近くの僧院の修道僧等が、刻みつけてをいてくれることを承知したのである。それから、吾々の遠征隊員中の最年長者であつたシェビイは『われ山にむかひて目をあぐ……』の詩篇第一二一篇を朗讀し、その間吾々は總て脱帽してその傍に立つてゐたのであつた。

その日の朝は、實に輝やかしく晴れ渡つてゐた。この偉大な先驅者によつて登頂されたチョミオモ、パウハンリ、カンチェンヂャウの三つの峯は、鳶色の高原の彼方にその全貌を表はしてゐた。かゝる壯麗な場所に憩える者が果して幾人居るであらうか。こゝこそは世界の中で最も雄渾なパノラマを擅にしうる地でもあるのだ。

＊この佛教の祈禱文は「蓮座に居ます貴人よ、幸福なれ」と云ふ意味であるが、これはこの地方の住民をして、この墓所を保護せしむるに役立つであらうと思考された。」

× × ×

ケラスが永眠して以來二十年近くの歳月が流れた。其の間ヒマラヤの探檢、登山は甚だ遲々とはしてゐたが、一歩々々根强い進歩を遂げていつた。そしてこの不世出の先驅者の偉業は年と共に輝やきを益し、殊にシッキム、ガルワールへ這入る人々には寸時も忘れ得ぬ人格的な存在にまで高められていつた。

一九三〇年シッキム・ヒマラヤに挑んだディレンフルトG. O. Dyhrenfurthの遠征隊は、一行がジョンソン・ピークに登頂した際、その峯の直ぐ北側に存する高度約二二、〇〇〇呎の、鋭い一雪峯に「ケラス・ピーク」の名を冠して、このヒマラヤの先驅者の榮譽を記念したのであつたが、同隊の隊員であつたスマイス(註三)はその時の消息を述べて次のやうに言つてゐる。

「深雪に足をとられつゝ吾々は斜面を高みへ登つて行つた。吾々のキャムプ・サイトは嘗つてケラス博士の到達したコル(譯註・このコルは「ケラス・コル」と命名された)のほんの僅か上方であつた。(中略)吾々の背後、ケラス・コルの北西に當つて、壯麗な一無名峯が聳えてゐた。ディレンフルトはその峯に「ケラス・ピーク」なる名稱を與へたのであつた。しかし印度測量局はかゝる個人名の命名法を採らずに、將來土着の山名に替へて了ふであらう。そしてかゝる方法は嚴格に實行せらる可きものと思ふ。なぜならば、如何に偉大なる先驅者と云へ共、その名前は大ヒマラヤの雄峯を飾るには尙不足の感なきにあらずと思はれるが故に。」

然し、ケラス・ピークの如くジョンソン山群の一無名峯で、將來土着の山名もおそらくは見出し難い樣な山に就いては、かゝる個人名の命名も一つの呼稱として許されるのではなからうか。

又ケラスが生前憧れて止まなかつたエヴェレストの北方、東ロンブ氷河の入口に聳立する一峯（二二三、一八〇呎七〇六米）には「ケラス・ロック・ピーク」Kellas Rock Peak なる名が冠せられてゐるが、シッキムの「ケラス・ピーク」が未登頂なるに反し、この峯は一九三五年、シプトン等のエヴェレスト偵察遠征に際して初登頂せられた。（註四）

× × ×

以上をもつてヒマラヤ遠征を通じてみたるケラスの敍述を終らうと思ふ。

ケラスにはアプルッチィ公の樣な、又コンウェイやフレッシュフィールドのやうな、大きさは無かつたかも知れない。又マンメリイのやうに只管、山頂とその困難な登路のみを求めたゆき方とも大いに異つてゐた。然し彼は稀にみる探檢家であつて、單なる登攀者以上のものであり、山の地理學者、山の生理學者として、或は又近づき難きヒマラヤの地誌と高山醫學とに關しては類稀れなる鋭い知識を有してゐた人物であつた。

彼の亡骸は西藏に葬むられ、彼の英靈は永却に世界の屋根に在るであらう。今後も繰返へさるべきエヴェレスト遠征隊の隊員が、彼の墓所を訪れてエヴェレスト登頂の報告を爲し得るのは果して何時の日であらうか。

（註一）Howard-Bury: Mount Everest, the Reconnaissance, 1921. p. 164.

（註二）F. S. Smythe: Camp Six, An Account of the 1933 Everest Expedition. pp. 56—57.

（註三）A. J. Vol. 42 (Nov. 1930) p. 218 (“The Assault on Kangchenjunga, 1930.”)

（註四）G. J. Vol. 87 (Feb. 1936) p. 104.

（昭和十四年八月稿）

——以　上——

机上談山

く・た

五六年前、不盡生がこの欄を復活させたことがあつたが、あとに續くものがなかつた。これを引繼ぐ意圖もなく、たゞ日頃讀書の間に感じ、考へたことを書き止めて置いた斷片をつぎ合はせたところ、恰度この題目に相應はしいものに仕上つてしまつて、偶然この欄を引繼ぐ廻り合はせになつた。これには目的もないものの、さう横道に入つては讀む者の迷惑となるから、大體の道筋を豫め定めておかう。そしてそれを「登山の本質が mountain adventure にあるとして、かゝるものとして我々の登山はいかなる意味に於いて成立つか」といふことに限らうとする。しかしこの道筋を通つて目標に達し得るか、行き過ぎはしないか、辿りつかないかは、もとより分らない。こゝには私の氣まゝな考へ方を道草を摘みながら書き誌すのであるから、またさういふ氣輕な氣持で讀んで頂きたいと望む。

一

もう二十年位前の正月のことだつた。上野驛でスキーをかついで居たら、見知らぬ人に「へんなものだが、そいつはポンプですかね」とたづねられて當惑したことがある。また蛭ケ岳に登らうと諸士平に泊つた時だつたと思ふが、山師に間違られて面喰つたこともある。たいていの登山者はかうした二三の經驗はもつてゐるものだ。登山の普及してしまつた今日、內地でこそこんな珍談はもう稀になつたやうなものの、朝鮮あたりではつい近頃もS君がわざ〳〵金山の案內をうけたといふことである。鳶職や獵師はともかくとして鑛山

師に間違られることは事實としても有難迷惑な話である。それにしてもなぜ見慣れない第三者は、我々登山者と彼等とを區別し得ないのであらうか？　なるほど兩方とも同じやうなむさくるしい外觀、甚だあがらぬ風采がさう判斷させるのであらうが、稀にはよい獲物を得、よい鑛脈でもあて得た彼等の心には歡喜があるだらうが、彼等の心の裡には常に何物にか憑れてゐるやうで落着きがない。しかし、我々にはこれから山に向ふといふ希望、或はそれを物にしたといふ滿足感がどこかに潜んでゐる。戀にも似たそれが第三者には見拔かれないのだ。

二

山登りは何かといふことはこゝでは問題外であり、またその本質は山において adventure すること、mountain adventure にあることを一應肯定して、深くはふれないでおくが、これには大體異論ない所であらう。一八五七年以降、二輯を刊行した「ピークス・パセス・アンド・グレシアス」が副標題に A series of excursions と銘をうつた。これが一八六三年に「アルパイン・ジャーナル」となつてからは record of mountain adventure and scientific observation に改められ、五十卷の今日まで依然としてこれを削らないことは、種々の解釋も行はれやうが、一つには、登山の本質をもつて mountain adventure なりとする生ける説明であると共に、その本質が今日なほこゝにあつて變らぬことの最も有力な證據でもある。

Adventure といふ英語は最も普通に「冒險」として知れてゐるが、これだけでは充分に意味をつくさないから、こゝでは止むを得ず原語のまゝに使ふが、辭書などでこの譯語を求めて見ると、名詞としてはこの「冒險」の意味が第一、第二に「變つた事、思ひがけぬこと」、第三「冒險談、奇談」と複數に用ひ、第四に商業用語として「投機、やま」といふ意味をもち、第五に「鑛山業」第六に「偶然」といふ意味がある。また動詞として「一かバチか思ひきつてやつて見る」「賭ける」といふ意味がある。これらの意味においてこの

言葉には「投機」的な意味が濃厚に含まれてゐて、純眞な心持で山にadventureを追求する登山が、かゝる投機的行爲といかにも近しい類縁關係にあるかに考へられる。

三

我が國の言葉にもまたこれと同じやうなことが窺はれる。それは「やま」といふ言葉である。これには「山岳」を意味する平地より高く大きく隆起せるもの、第二に昔時京都の比叡山の特稱として、第三に例へば一と山、二た山といふ如く、山の形に堆く盛り上つたものに、第四に例へば山が見えたとか、もう峠だとかといふ如く、物事の頂上に、第五に、例へば山師、山をはる、山をかけるとかいふ如く、確實な見込はないが、萬一を僥倖して事をなすに用ひられてゐる。この第五の意味に於いて「やま」といふ言葉にもadventureと同じやうな意味が表現されてゐる。言葉の上の暗合には相違ないが、興味ある一つの問題である。

かう見てくれば、我々登山者がやま師に見誤られることも、あながち無理とも考へられない。さればとて、私は登山をかけ事と同一に視たり、登山者を山師だとは少しも考へない。たゞ聯想にかられてこゝまで到達したのだ。王堂チェムバレンは「旅は一種の投資だ」(1)といつた。それどころか、我々の追求する「やま」も、A・Cの標榜するmountain adventureも、かゝる投機的觀念から最も隔つた行爲であることはいふまでもない。

四

登山は文字通り山に登ることだ。しかしこれを他のスポーツと較べると、カール・エッガーのいふやうに『登山にはすべてのスポーツの基礎、すべての競爭者が、ある測り得る最高行爲を目標として平等に爭ふといふ條件が缺けてゐるから、それはスポーツでも何でもない。』(2)我々の登山はこのやうにスポーツ的であるけれども、純然たるスポーツではない。しかしこゝでは便宜上スポーツとして見ることとする。そしてその

本質は今いつたやうに山に於いて adventure を行ふことにある。そこで先づ adventure とは何かといふことになる。

Adventure とは人間行爲の一つである。その行爲の結果は、しかしその行爲した後に於て判明する。その以前に於いては、それは一つの不確定の量であり、果して如何なる經路によつて如何なる結果になるか、全く豫想されない。とにかく一かバチかやつて見て結果は判明する。行爲の結果に對して不確定の量の含まれる時、その行爲は adventure として成立し得る。『結果に對する不確定といふことがなければ世の中に adventure といふものは、存在しない。』[8] 從つて一つの行爲がその結果について不確定な限り、たとひそれが近代的設備の完備した船舶による航海、かゝる設備の自動車による踏破、また飛行機による翔破、また大規模な徒步遠征も adventure であり得るし、我々の一日の登山も、目的定めぬ彷徨の旅も、廣くはこの一種に加へることができる。

英語の adventure もさうであるが、ことに佛語の aventure は所謂 love affairs に關聯して用ひられる場合が多いやうである。これも亦、戀といふ行爲が一つの不確定な量をもつた結果をもつからであるが、この場合でもよく判かるやうに單に結果が不確定なる場合にのみ adventure は成立つものでない。この結果が一つの希望に滿ち充ちた魅力に富んだものでなければならない。『魅力ある不確定』が必要である。それは love affairs としての aventure ばかりでなく、およそ adventure に必要な條件である。我々がある對象物に魅力を感じればこそ、向ふ見ずに危險を冒すことができる。要するに戀といふ魅力ある對象物に向つて、ある種の危險を冒し、その向ふ側にあるものを追求する。この場合の對象物は魅力ある女性である。

この魅力ある對象物は女性と限られない。魅力あるものであれば何でもよい。我々が山に魅力を感じれば、山は我々の adventure の對象となる。從つて Adventure なる言葉は、單に「危險を冒す」といふばかり

でなく、魅力をもつある對象物に向つて、危險を冒して、それを乘越え、その彼岸にあるものを追求するといふ意味である。今のべた adventure の二つの意味を、ヘルマン・ヘッセは美しくかう述べてゐる。

『我々の漂泊といふものは皆さういふ風に作られてゐる。我々の放浪癖も放浪生活も大部分は戀愛であり、エローティックである。旅のロマンティックの半分は冒險の期待に外ならない。しかし別の半分はエローティックなものを變化したり解體したりしやうとする無意識の衝動である。我々漂泊者は愛の願望の實現が不可能であればあるだけ、それを育まふとして本來ならば女性に對するものである其の愛を村落や山に、湖や峽谷に……氣輕にまきちらしてやることに慣れてゐる。我々は愛を對象から解きはなつ。我々にとつては愛そのもので充分なのだ。恰度我々が漂泊のうちに目的地を求めず、唯漂泊そのものの樂しみ、途上にあることの樂しみを求めるやうに。』(4)

要するに登山に當てはめて考へると、mountain adventure は山の有する諸々の危險を冒し、これを克服して、その向ふ側にある魅力に富んだ山の世界を追求する。と同時にその不確實なるものを確實な結果として實現することである。

五

或ひは人はいふかも知れない。我が國の山岳は低く狹く、從つてその隅々まですでに歩きつくされてしまつて、もう未知の領域はないのだ。ことにその山の相貌は溫和であつて、登らうとすればさう危險なしに登りしも、到達することもできる。こんな處には今更あこがれて adventure をなす餘地はない。Adventure なる觀念は我が國の山にはふさはしくない。我が國本來の敬謙な登山とは相容れないものである、等等。果して我が國の山岳はさうであらうか。また登山としての adventure はさうであらうか。この問題に答へるためには第一に我が國の山岳そのものについて調べて見なければならないし、また山岳をふくめての我が風土について、特に我が國民が自然に對していかに振舞ひ、

いかに考へるかを調べて見なければならない。

私はこの問題に關しこゝに二つの說をまづ紹介しやう。一つは長谷川如是閑氏で、氏は我が國民性格に關聯して次のやうに說明されてゐる(5)——

我が國民的性格の特徵はこれを心的態度として見る時は自然的現實的であるが、道德的性質として見れば極端的より中間的であり、誇大よりは簡約であり、傲慢よりは謙抑であり、非凡よりは平凡であり、要するに現實から遊離しない道德的態度である。しかして一般に國民の性格を特徵づけるものは、その國の自然經濟政治等の條件であるが、他のことは省くとして、自然條件について見るに、我が國は中等度の溫度の氣象、風物に惠まれ、地理的にも山岳、平原、河川等に就いて、大陸のそれのやうな極端に威壓的な感じを與へられるものを缺き、むしろ溫和、纖細、緻密等の親しみ易い感じを與へられる。其他の經濟、政治の條件と相俟つて、この自然が極端化されない、中庸的な性格を我々に與へた。これに反し、自然の威壓の大なる所では人間はそれに機械的に摺伏するか、それから觀念的に超越するかの態度をとる。さうした客觀的の條件を有しない我が國では、自然のありのまゝを承認する態度となり、それが日本の自然そのものと同じく、中間的の、誇大に陷らない謙抑な性格の涵養となつて、觀念的の昂奮や逃避を必要としない。そこに我國民性格が自然的の現實的の性質を與へられた根據がある——

要するに我が風土は一般的に見て、極めて溫和であるが故に、そのまゝ受容れることができる。自然に對して受容的な態度を有するといふのが如是閑氏の論旨である。

これに對して和辻哲郎氏は受容性をも認める代りに、その反面に忍從性をも認めてゐる。(6)——

我が風土は、風土類型から見れば、インド、支那と共に暑熱と濕氣との結合を特徵とするモンスーン型に屬する。この風土に於いては例へばモンスーンがその豐富な濕氣によつて我々に食物を惠むと共に、暴風洪

水となつて我々を脅かすやうに、自然の恵みと暴威とを我々は感じる。故に人間の性格はこの風土に於いて受容的であると共に忍従的である。しかしこの二つの性質はモンスーン風土の各地方に於て特殊な形態をとる。北は亞寒帶から南は亞熱帶へと長く連つた日本の風土に於いてはこの二つの性質も極めて複雜なものとなる。その受容性は熱帶的な單調な感情の横溢、寒帶的な單調な感情の持久ではなく、著しい四季の變化のやうに豐富に流れ出でつゝ、變化に於いて靜かに持久する感情であるが、それは調子の早い移り變りで、甚しく活潑、敏感であるが故に疲れ易い、持久性がない、しかしそれは新しい刺戟によつて癒される。また他方に於て颱風のやうにその變化は突發的、季節的であり、變化の各瞬間に突發性を含みつゝ前の感情に規定された他の感情に轉化する。忍従性もまた、熱帶的な非戰鬪的な諦めでもなく、寒帶的な氣の永い辛抱強さでもなく、諦めでありつゝも反抗に於いて變化を通じて氣短かに辛抱する忍従であり、またそれは季節的突發的であつて、繰り返し行く忍従の各瞬間に突發的な忍従を藏する。

要するに日本人はモンスーン風土に於て受容・忍従性をもつが、しかしそれは豐かに流露する感情が變化に於いてひそかに持久しつゝ、その持久的變化の各瞬間に突發性を含むものであり、この活潑なる感情が反抗に於いて諦めに沈み、突發的な昂揚の裏に俄然たる諦めの靜かさを藏する。しめやかな激情、戰鬪的な恬淡さである。かゝる複雜な關係に於いて我々は自然に對して受容的であり、忍従的である——

六

我々日本人は以上に述べたやうに、自然に對して受容的であり、忍従的である。これは人間の側から見る立場であるが、反對に自然の側から見たら——必ずしも常に直接にかうは論じられないであらうが——我が自然は溫和な半面、峻烈な半面をもつといふことができるのではないか。しかし一般的な自然がさうであるやうに、我々の最も深い關心をもつ山岳なる特定のも

のについてもまた同じであらうか。

我が國はモンスーン風土に屬する。暑熱のことはともかくとして、多量なる濕氣が生活や風景に著しい影響を與へてゐる。我が國で濕氣といへば雪、雨など種種な形で現はれるが、四五年前、マレイ・ウォルトンの本の中で『この本の中で雨のことを書き立てすぎたかも知れないが、およそ雨をぬきにしては日本に於ける登山の完全な記述とはならない』(7)といふやうなことを讀んだことがある。外國人にとつては雨のことは餘程氣になり、讀んでゐて憂鬱にさへなるらしい。我我の生活が雨になれきつてゐる所から、多少それが繰り返されても別に氣にも止まらない。志賀重昂氏は我が風景美の根源を我が國に水蒸氣の多量なることに求めて居られる位に、濕氣は我々の生活にも、山岳にも多大なる影響を與へてゐる。こゝに述べた雨のみならず、自然力一般が、いかに我が山岳の構造上に作用し、いかなる相貌を與へてゐるか。

七

一般に、山の構成は『上に聳え立たむとする力とこれを引倒さんとする力のと釣合』(8)から説明される。上に聳えたたむとする力は地表面から上へ延びやうとする力でこれを引倒さうとする力はこれを地表面と同一水平面に引き戻さうとする力であつて、この二つの相反する建設と破壞との力の釣合ふ所が、我々の眼に見る山の影になつて現はれる。地學的に見れば、(9)第一の力は地球の火山活動と地殼運動であり、第二の力は地球を包む大氣、自然力による浸蝕、水蝕、氷蝕、風蝕である。火山活動と地殼運動とで築き上げられた山岳は諸々の浸蝕によつて磨き削られて再びもとの平面に引き下げられやうとする。山岳の形成はこの二つの力の相剋つ所に現はれる。

この山を形成する二つの力は、どの山岳についても、その作用の仕方と程度とを異にしてであるが、同じく作用する。我が山岳に於いても同一で、我が國に於いても上へ延びる力は一つには褶曲山岳として多いに働いたが、火山による作用はそれ以上に盛んであ

る、火山の多いことは我が國の風景の特徴であることはすでに志賀氏の指示された通りである。こうして築き上げられた山岳に、細かい彫刻ののみの作用をなす浸蝕も我が山岳では道具を異にしてゐる。濕氣の多いこの地方では沙漠に現はれるやうな風蝕はないし、雪線の高い、暖かい國では氷蝕の如きもない。そして水蝕が最も活潑に作用し、多くの山の大部分はこの力によつて削られた。これも志賀氏の指摘された我が風景の特色である。卽ち我が山岳は火山の活動と水蝕とによつて築き上げられたといへる。

八

それならば、かくて築かれた山は、いつたい我が國に幾座あらうか。愛宕山のやうに低いものから、富士山、新高山の高いものに至るまで山と名のつき、岳と呼ばれるものを算へ上げることは不可能に近いが、恐らく意外な數に上るだらう。山とか岳とか呼ばれるのは、必ずしてその高低によつてでなく、その山に對する昔の信仰が厚いか否かによつて定まるのである。ともあれ山とか岳とかいふ以上それが一定の高さをもたねばならない、卽ち我々の立つ位置が周圍よりも高くあればそこが山である。そこが山であるためには、高さをもつと共に起伏をもたねばならない。この起伏をもつことこそ、山であることの第一要件であり、高さはたゞこの起伏を一層大ならしめるに役立つだけである。

「山日記」(10)で調べると、一五〇〇米以上の山岳は七八三座といふことである。勿論これはその全部ではないにしても、この狹い國土にかくの如く多數の山岳の存在することは、世界有數の山岳國と誇ることができる。しかしこれを高度別に分てば、三〇〇〇米以上七七、二五〇〇米以上一六六、二〇〇〇米以上二五九、一五〇〇米以上二九一といふ内譯である。低いもの程多數となる。四〇〇〇米に五米足りない新高などはしばらくをくとして名山富士は高度から見れば、「外國高山百七十座」の一六八番に當る新ジーランドのマウント・クックを僅かに凌ぐだけで、世界的の高山とはい

へない。我が國山岳の數學的平均高度を出すことは無意味であるが、世界の標準高度から見れば、我が國の山岳は一般に低く、日本の山の高度は大體二〇〇〇米内外と見てよい。その位の高さの山が全國に約八百座以上もばらまかれてゐるといへば、我が山岳の規模は大體に想像がつくであらう。

九

それかといつて、日本にはまた歐洲山岳地方にあるやうな、さう高くないが、起伏のゆるい高原といふアルプ地帶があつてもよい。火山の廣い裾野、ゆるやかな斜面にはかなり廣い牧場地帶があり、また高原と稱される部分もあつて、アルプを彷彿させる。しかしそれは本來のアルプとは全く趣きを異にしてゐるし、生へてゐるものが異る。大きな森林もあれば根曲り竹が一面に生へ、雜草は人の丈位の高さに繁つてゐる。一面芝生のやうな軟かい牧草がみつちりと生へた所は極めて稀である。アルプといふのは風土的に見れば、濕氣と乾燥とが季節的に適度に配合され、いづれも過多に現はれない所である。(11) 從つてそこには牧草の如きものが自然に發生するやうになつてゐる。しかし我が國のやうに濕氣の勝つてゐる所では、たとへ地形的に牧草が生へ牧場が出來さうな場所には、牧草よりも生活力の强い雜草や樹木が生へてしまつて、牧草の發育を許さない。だから我が國の山には、牧場、アルプらしいものはあつても美しいフォアアルペンを形成するすぐれたアルプは見出され得ない。これはまた我が國土が狹く、アルプらしい大きな廣いなだらかな起伏に乏しいことでもあるが、我が山岳の一つの特色であるとすれば仕方ないものの、物淋しい氣がする。

しかしこの淋しさの不平は、また同じ方面からも打消される。それは我が山岳が植物に惠まれてゐるといふことである。我々の山は前に幾度も述べたやうに低くて小じんまりとしてゐる。その風土は溫帶に偏し、特に多量の濕氣に惠まれる。このことは我々の山岳に特殊の植物景觀を與へる。こゝには熱帶地方と寒帶地方との植物が入り混つてゐて、そこに一大植物園を呈

出し、植物の種類も極めて多く、その量も非常に豐富である。多少の例外はあるにしても、一般的に見れば、山の大部分はその頂上まで何等かの植物によつて蔽ひつくされてゐる。甚だしいものは樹木がみつちりと繁茂し、雪のある季節以外はとうてい寄り付けない山、やぶ山もすくない。またこれと反對に岩の肌を露にし、遠くからは一木一草も止めないと見えるやうな岩壁にも、近寄つて見れば、案外にも岩の間に可愛らしい小さな草や倭樹を見出したりする。ともあれ、雪に掩はれる短かい期間を除けば、我國の山は、綠一色に塗りつぶされるといふ程、植物に惠まれてゐる。

また氷雪が少いことも以上によつて大體想像される。しかし多量の濕氣は冬の多量の積雪として現はれる。さうなれば今まで植生に蔽はれた山の姿は一變して、雪の世界となる。それも我國の北半に限られる。しかし再び夏となれば雪の世界ははるか北の彼方に退却し、山の谷間に砂か泥かと見まがふばかりの頽雪を殘して、綠の衣にかへつてしまふ。所謂萬年雪として越年するものは極めて僅かである。ある人はこの萬年雪の殘り工合から我が國の雪線を設定し、北アルプスでは三〇〇〇米をこへた處邊の高さだと判斷したが、(12) ともあれ、我が國の山には雪線を拔くものは不幸にして一座もない。一年中氷に鎖された氷河といふ如き世界は考へられない。從つて氷蝕をうけて深く刻み込まれた岩ばかりの山も少ない。我々は僅かに冬の季節にかゝる岩と氷との世界を求めて山に入る。しかしそれは岩の多い山頂近くだけで、それから少しでも降れば岩も氷もなく、雪の世界に降つてしまふ。しかもかゝる世界は僅かに一年の四分の一にすぎない。

以上我が山岳の特徴のいくつかを列擧した。一應ここに括りをつけておくと主として火山と水蝕の力によつて構成される我々の山は高さも低く大きな起伏を示さない。從つて廣さと深さとに缺けてゐる。雪線はないから氷雪の領域は貧弱で、また山の肌は岩の裸出した所は少く、厚く植物の衣をもつて蔽はれてゐる。要

するに起伏が細かく氷雪に乏しいが、植物には惠まれてゐるのである。

一〇

こゝに要約された特徴をもつ存在として我々の山は我々に如何なる態度を示すか。

我が國の山が植物に惠まれ、その大部分が各種のその衣に蔽はれ、頂上や岩間にさへ可憐なその姿を見出す。このことは頂上にも僅かな存在であるが、生の片鱗を窺ひ得るばかりでなく、それ以下の山の部分には、實にみづ〳〵しい植物が、我々の眼前に生に充ち溢れた生氣を、生き生きとした生命の世界を展開する。しかもかゝる狀態は、我が山地の大部分に亘り、一年の大部分に亘る。その間山岳はその衣を纒ひ、容易に岩膚を現はさない。しかし一年の他の時期、僅かに三ケ月の間、その間だけ、しかも北半の山地だけは、ともかく山の生の世界は雪と氷とに蔽はれて靜寂な死の世界が出現する。この短かい季節がすぎれば、山はすぐ生の世界に甦り出す。そして氷や雪の世界は死の世界は跡かたもなく消えてしまふ。またかゝる山の世界の姿は、氷や雪にいたみつけられたやうなゴツゴツの山容は局部的にそれらしいものはあつても、至つて稀である。多くの山の姿は火山に見られるやうな、起伏のやさしい姿を呈し、小ぢんまりと整つた形である。一言に云へば優しい山容である。我が自然がさうであるやうに、山も溫和な相貌を持ち、生命に充ち溢れてゐて、我々を威壓するものは至つて乏しい。從つて我々は山岳から超越し逃避する必要はない。また逆に山岳に敵對したり、それを征服したりする必要もない。自然をありのまゝに受け容れるやうに、我々は山岳をそのまゝの姿で受け容れることが出來る。

このことは古來我が國民がその日常生活にいかに深く山を取り入れたかによつても知られる。その一例は山に對する特殊の信仰をもつてゐた。我々は山岳をそのままに受け容れるにしても、これにみだりに慣れきることはなく、また崇めることはあつても、恐れはしない。山は神聖なものとして崇敬されるが、それは恐怖

よりも親愛に近いものから出てゐる。我々が山の中を歩いて目立つた場所に何かしら小さい祠を發見する。また山を背景として生活する人々の住屋はかなり山奥まで及んでゐて、一寸した平地には見窄しい乍ら人家が一二軒と散在する。樹木に殘されたナタ目や河原につまれた積石の如き、人爲的の痕跡はいたる所に見出される。たとへ一日でも全くこんなものに出合はずに山の中を歩くことは稀である。これをもつてしても、我我がいかに山と交渉が深く、また今日もなほそれを保つてゐるかを知り得る。これも要するに山の規模が小さく淺く、近付き易くあるからであるが、我々が山を人間味の溢れてゐるとか、人間臭いとか感じるのもまたこの爲である。

一一

我々の山岳に對して受容的であることは、言ひかへれば山岳が我々に從順であるといふことであるが、しかし山はいつでもさうであるとはいへない。我々に從順な自然も時には大なる反抗をするやうに、日頃手なづけた山岳もしばしはひどく我々に反抗して來る。ことにそれは山が例へば天候とか濕氣とかと結合する時、全く我々を威赫しつけるものとなる。嵐、大雨、大雪は山つなみ、洪水、雪を惹起する。この時こそ、山岳はその最も原始的な自然力をもつて我々に迫り來り、人間の存在は全く否認されて了ふ。受容的なものはその正反對の忍從的のものに一變する。我々が山を崇めるのは一にそれを愛すると共にこの恐るべき半面を怖れるが故にでもある。しかし山がかかる半面を現はすのは、その原因となる自然條件が附加されてゐる間の一時的の現象であるが、それは全く極めて急激な突然の變化である。從つて我々の强ひられる忍從性は戰鬪的、反抗的な氣分において氣短かに辛抱するものである。この自然條件が取除かれれば、それを已むを得ない自然力の仕業とあきらめつゝも、その寛らかなもとの姿に歸つた山の中に、その時は何事もなかつたかの如く快活に、平和に以前の生活をつづける。我々も一時はこんなものに打ひしがれても、また山のこの

半面は忘れて、以前と同じ平和な姿を取り戻した山に再び歩を向ける。

しかし、我々が山岳に對する關係において、受容性と忍從性との何れが、我が山岳として平常な狀態であるかといへば、それは受容性であつて、忍從性は單に一時の季節的突然的變態にすぎない。要するに日本の山岳は人間に受け容れ易く、人間味に溢れたものである。

一二

上に述べる所によつて、我々の山が低く淺く、溫和・優雅な姿をもち、我々はこれに親しい受容的態度を示し、山は人と極めて深い交渉を續けてゐる、といふことを知つた。これは、一つには山そのものが近づき易いこと、一つには我が國民が山に對して特殊な關係をもつて接して來たことによつて、登山が國民の一般戸外運動として今日の如き隆盛を現はしたのである。そして登山の普及・徹底は、一方に、我が山岳はその偶々までも歩きつくされ、未踏の頂は殆んどないばかりでなく、細かな尾根筋・谷筋さへも殆んど探りつくされ、この狹い國土に於いてもはや未知、未見の領域は殆んど見當らなくなつた。また他方に登山そのものの技術の進歩、山案内の發生、諸施設の改良、裝備の完備等々が、登山の普及を助長せしめたことは明瞭である。かくして登山の普及は同時にその簡易化と低廉化として現はれた。(13)

かゝる事態に面して、我々は、いかなる點に登山の意味を認めやうとするか。登山の簡易化は、相當の準備と用意とをもつてすれば、我々は大きな危險を感じることなしに、所期の登攀を容易に達成させることができることとなつた。決心さへつけば、どこでも登れもし降りもできることとなつたといつても過言ではないであらう。また登山の普及は、登山が我が山岳の全領域に亘つて集約的に行はれることになり、山頂はいふまでもなく、そのいかなる部分も、何人かの手にふれ足に踏まへられたものである。從つて、日本の山をはなれない限り、今や登山は、コースも目的地も豫め

知り悉されてゐる所謂ハイキングと同じ意味をしかもたなくなつたといへやう。

それならば我々を山へと惹きつけるものは何であるか？　山岳に未知の領域が乏しくなつたことは、初期の登山者を山へひきつけたやうな未知のものに對するあこがれとか、初對面のものの魅惑とかいふものは過ぎ去つてしまつた。また危險を冒してかうした世界に飛び込むといふ adventure の意味も、今日では乏しくなつた。今日登山が adventure として成立たないといふのも、この事態に由來するものであるが、しかし adventure は山岳そのものの困難のみによつて一方的に生じるのではない。『登山を樂しく愉しむといふ限界は、山岳そのものの表面の高さ、角度、或はその登攀の困難の度によつて定まるのではなく、登攀者の力とこれらの諸條件がもち來す山岳の抵抗によつて定まるのである。』(14)であるとすれば、登山が簡易になり、未知の世界がなくなつても、そこには魅力の程度の相異は免れないが、登山は adventure として尙成立ち得る餘地があるのではないだらうか。

こゝに於いて考へられることは、adventure の意味に第一次、第二次とも呼び得る二つの種類があることである。こゝに第一次と呼ばれるものは、今迄に述べて來たやうな、未知の領域に對するあこがれから生じる「危險を冒す」といふ意味の adventure である。この第一次のものは嚴密にいへば、山岳がまだ多くの未開の魅力をもつてゐた所謂探檢時代にしか現はれないものであらうが、その魅力が削減された今日に於いても依然として認め得る傾向でもあるが、一般には登山の普及につれて色褪せて行くことは爭はれない。

それに代つて、その第二次的の意味が次第に登山の前面に推し出してくる。第二次の adventure といふのは、この稿の初めにのべたやうに、ヘッセの云ふやうな廣い意味のもの、卽ち、山岳愛の追求において成立つといふ adventure である。この意味の adventure は全く人間の主觀によつて成立つものであるが故に、山岳自體がいかに登攀の容易なものであらうと、また人

を近づけしめない嚴しい相貌をもたうとも、我々の山岳に對する愛の追求慾を滿足させ得るものであれば、いかなる登山もadventureとして成立ち得るものである。そして日本の山を考へる限りadventureはかくして成立ち得るものと考へるのである。しかしてこの山岳愛の追求こそ、現代の我々を山へとかり立てるものであり、現代に於ける登山の意味もまたこゝに求められると考へる。

このことは我國の登山の歴史から見ても極めて自然な意味であるやうに思ふ。『思ふに明治維新後に於いて總ての文物が一變したやうに、登山の形式內容共に一變した。現代の登山は維新以前に於ける宗教信仰の登山の延長であるとは云へないかも知れない。兩者は出發點を異にして發達したものであるから、然し其根據に於いて共通した思想はないであらうか。それはある。卽ち自然愛の思想である』[15]。私はこれを山岳愛と置きかへたいのであるが、ともあれ、前にも述べたやうに、我國の自然は我々に對して極めて開放的であり、また我々はそれに對して極めて寬容である。そのため、山に對して特に深い交渉を保持することができた。それがまた特殊な登山の形式內容として發達もし、こゝに自然、山岳に對する愛の追求になつた。しかしその仕方、態度は消極的であつた。新しい登山が始められるやうになつてから、登山は探檢的な內容を持ちadventure的な意味をもつに至つたが、それはその發達の初期に現はれた一時的の現象にすぎなかつた。そして間もなく、山岳愛の追求が再び登山に重要な意味を取り戻したが、しかも全く新しい內容をもつて極めて積極的な仕方で追求されてゐる。

私は考へる。日本の山をはなれない限り、adventureをかく解釋することが極めて自然であり、またかく解することによつて、現代の登山もadventureとして成り立ち得るし、それが山岳愛の追求といふ形で今日有つてゐる意味も正當に評價し得るのではないかと。

我々は永遠な若さをもつて愛を求めることはできない。しかし山岳に愛を追求することはできる。それは

大きな自然の餘惠によつてひとり我々登山者にのみ許されてある特權ではないのだらうか。（一四・八・二六）

註

一、B・H・チェムバレン「「鼠はまだ生きてゐる。」（吉阪俊藏譯）

二、Schweizer Alpenclub, "Die Alpen" XIV. No. 10, 1938, SS. 427—431. Carl Egger, "Wandlungen der Bergsteigerpsyche 1863—1938.

三、Sydney Spencer, "Mountaineering" 1934. pp. 39—61. W. Young, "General Principle."

四、ヘルマン・ヘッセ「ワンデルンク」（尾崎喜八譯）

五、長谷川如是閑著「日本的性格」

六、和辻哲郎著「風土—人間學的考察」

七、W. H. Murray Walton, "Scrambles in Japan and Formosa" 1934.

八、辻莊一「ジンメルのディ・アルペンをめぐりて」（「山岳」第三十年第一號）に負ふ所大い。

九、「山岳講座」第　卷、辻村、岡山「山岳地形」に負ふ所多い。

一〇、「山日記」一九　年版による。

一一、和辻哲郎著、前掲書

一二、今西錦司「日本アルプスの雪線について」（「山岳」第二十八年第二號）

一三、これに類似のスウィスに於ける狀勢については、前掲"Die Alpen"參照

一四、Spencer 前掲書

一五、木暮理太郎著「山の憶ひ出」下卷

會務報告

昭和十三年十一月定例理事會並に役員總會

十一月十日、出席者　木暮　冠　鳥山　木村　藤島　黑田　角田　島田　高橋　加藤　野口　石原　中司　吉澤

一、明年度理事候補者の件　本年末を以て任期滿了となる茨木、角田、中屋、島田、今西の五理事の交代として役員會は推薦すべき新理事五名を選定す。

一、茨木、角田兩氏を評議員に推薦するの件

一、「山岳」第三十三年第二號の件

一、明年度豫算の件

一、會員大會の件

一、社團法人の件　加藤、中司兩氏に調査依頼、一層愼重に考究する事となる。

十二月定例理事會

十二月二十日、出席者　鳥山、茨木、藤島、野口、中司、吉澤

一、理事更迭に關する件

明年度理事は結局理事會推薦の藤島、三田、額田、水野、塚本の五氏に決定となる。早川前理事の補缺選任は當分之を爲さず。

一、「山岳」第三十三年第二號編輯報告の件

一、圖書整理に關する件

一、新入會員詮衡の件

昭和十四年一月定例理事會兼新舊理事送迎會

一月十九日、出席者、冠、鳥山、宮崎、西堀、藤島、三田、

塚本、茨木、黑田、島田、石原、中司、吉澤

一、新入會員詮衡の件

一、虎ノ門圖書室借室料値上の件

一、二月小集會の件

一、本年度理事變動に伴ひ事務分擔を左記の如く決定す。

研究調査　西堀、額田、水野

山岳　藤島、高橋

山日記　吉澤、高橋、津田

會報　石原、宮崎、水野

庶務　中司、三田、加藤

圖書　野口、吉澤

會計　中司、塚本、鳥山

散會　午後九時半

二月定例理事會

二月九日、出席者　高頭、冠、鳥山、茨木、西堀、額田、黑田、藤島。

一、本年度山日記の件

本年度山日記は一月二十八日の編纂打合會にて、吉澤理事が編輯主任となり大體從來の內容、體裁、價格を以て刊行することに決定。

一、「山岳」第三十四年第一號編輯の件

一、名古屋支部設置案の件

具體案の提出を求め更に討議考究することに決定。

一、新入會員詮衡の件

山日記編輯打合會

二月二十一日、出席者　吉澤、木村、高頭、藤島、石原、黑田、西堀

一、本年度「山日記」編輯の件

吉澤理事の原案其他に就き詳細なる檢討をなす。

三月定例理事會

三月九日、出席者　茨木、鳥山、藤島、黑田、塚本、加藤、西堀、野口、吉澤、石原、中司。

一、「山日記」編輯の件(吉澤)

用紙品不足騰貴に付き記事削減のこと其他を決定。

一、「山岳」第三十四年第一號編輯の件(藤島)

一、金錢出納に關し會計よりの希望(鳥山)
一、山岳懇談會の件
一、新入會員詮衡の件

四月定例理事會

四月十三日、出席者、木暮、武田、茨木、木村、藤島、黒田、宮崎、吉澤、津田、西堀、額田、塚本、石原、鳥山、冠加藤、野口、中司

一、「山日記」編輯報告の件
一、「山岳」編輯報告の件
一、會報編輯の件
一、地學協會借室の件(鳥山)
一、山岳懇談會開催に關する件
一、次回小集會の件
一、名古屋支部に關する件
一、新入會員詮考の件

五月定例理事會

五月十一日、出席者　高頭、武田、槇、木村、鳥山、黒田藤島、角田、野口、西堀、坂本、石原、吉澤、中司

一、次回小集會の件
一、會報編輯報告
一、「山日記」編輯報告
一、「山岳」第三十四年一號編輯報告
一、終身會費改正案に關する件
一、山岳懇談會開催の件
一、社團法人設立に關する件
一、新入會員詮考に關する件

六月定例理事會報告

六月十三日、出席者　高頭、武田、小島、木暮、茨木、木村、藤島、高橋、額田、鳥山、吉澤、角田、石原、加藤、三田

一、「山岳」第三十四年第一號編輯報告
一、「山日記」編輯報告
六月二十二日發賣、定價一圓三十錢
一、會報編輯報告
一、山岳登山講習會の件

一、社團法人設立に關する件
一、登山團體懇談會の件
一、新入會員詮考の件
一、會報編輯報告
一、小集會開催の件
一、登山團體懇談會開催の件
一、新入會員詮考に關する件
一、社團法人に組織變更の件

七月定例理事會

七月十一日、出席者　高頭、小島、冠、茨木、鳥山、三田、中村、津田、塚本、額田、黒田、加藤、野口、石原、藤島、吉澤、中司

一、「山日記」編輯報告
一、會報編輯報告
一、賀業團體懇談會の件
一、新入會員詮考の件
一、社團法人設立に關する件

九月定例理事會

九月十九日、出席者　木暮、冠、高頭、槇、藤島、黒田、角田、鳥山、　田、木村、塚本、額田、野口、中司、加藤、石原、武田

一、「山岳」第三十四年編輯報告

すには措かなかつた。

來會者　三十五名

第八十六回小集會

十月六日　於日本橋商工倶樂部

暑かつた夏を送つて久しぶりの小集會は最近フランスから歸つた藤島敏男氏に「スイス雜談」と題し歸朝土産話と幻燈を御願ひした。講演後の同氏撮影にかゝるライカの幻燈百餘板はまことに鮮明でその講演と共に新鮮な空氣を場内に滿溢れさすに充分であつた。

來會者　五十五名

昭和十三年度會員大會

十二月十四日午後七時日本橋商工クラブビルに於て開催時間の都合に依り横山健堂氏の御講演よりはじめた。幕末維新の探險家とし又隱れたる勤王家として令名高き「松浦武四郎」に關する横山氏の研究は已に定評ある所、約二時間に亘つて蒐蓄を傾けられた御講演は私達をして時間の經過を全く忘れしめずにはおかなかつた。曾孫に當る松浦武彦氏もわ

集會記事

第八十五回小集會

荒天の續いた七月四日、やつと雨が止んだのを幸、商工倶樂部で後藤朝太郎氏の講演を聽いた。題は「支那の山とその國民性」幻燈を使つて興味あるお話であつた。殊に漢口より重慶への長江沿岸の風光は時節柄見るものに深い印象を與へて

ざ〳〵會の爲めに御出席になつて御持參下さつた種々の參考資料につき御説明になつた。武四郎氏がアイヌ人を僅かに四、五名しか伴はずに北海道や樺太の奥地に踏込んで實測された其等の地圖は全く驚異に値ひするもの許りである。

九時頃から黒田孝雄氏により會務、會計の報告説明あり、滿場異議なく承認可決、本年度會員大會の幕を閉じた。

出席者　二十四名

第八十七回小集會

第八十七回小集會は昭和十四年二月十五日午後六時から有樂町電氣倶樂部新講堂に於て、昨年度に行はれた京城大學及び京都大學の蒙疆地方探檢旅行のフイルムを映寫し、城大隊に參加された東大地理學教室の多田文男助教授の講演を聞いた。

多田氏は約一時間に亘つて「蒙疆の地理」の題下に、主として同地方の自然に就て語られたが、先づ中央亜細亜内陸斜面の茫漠たる地形と乾燥した氣候が如何に我々の住む國のそれと異なるかを指摘され、次で同地方の地形發達史を平易に説明された。

講演終つて同じく城大隊飯山達雄氏撮影の標準フイルム三卷の映寫に移り多くの美しい場面に接したが、次で京大隊淺井辰郎氏が自ら持參された十六粍フイルムに依つて、同隊の動靜を詳さに知り、蒙疆地方の輪廓を窺ひ得たのであつた。探檢旅行の機運が漸く旺んならんとするに當つて、この種記錄フイルムの我々に齎らすところは極めて大であり、隊員諸氏がその繁忙なる行動に拘らずこのやうな勞作を加へられたことは深い敬意に値する。

八十八回小集會（關西）

三月二十六日、清交社に於て開催

一、山岳と戰爭　會員青井竹三郎氏（大朝社勤務）

當夜は本事變に北支・中支と二回の從軍をされた青井君により右演題の下に從軍記者としての體驗を聞く事を得た。北支從軍では包頭より忻口鎮の塹壕戰を經て太原迄の山岳戰、中支では廬山山麓附近の機械化部隊への從軍と、登山家だけに山岳地帶の戰爭にばかり參加されたその順路日程を略述の後從軍中のテント生活、裝備、感想などをスケツチ風に話され續いて豐富な小型映畫を一々説明の上映寫して頂き現地の

ゝ子を詳しく知る事を得た。當日の出席者會員外を併せて三十四名。

第八十九回小集會

第八十九回小集會は五月十八日午後六時半より藏前工業會館五階講演室に於て開催された。演題は會員沼非鐵太郎氏の「臺灣高山探檢の結末並びに今後の登山」で、氏の永年の經驗と研究を傾けられた極めて含蓄深いものであつた。

來會者　四十二名。

第九十回小集會（關西）

七月四日　清交社に於て開催

一、支那奥地事情　　大阪時事新報主筆　北村佳逸氏

當夜の講師北村氏は長く支那に居られたばかりでなくある種の調査で變裝の上新疆省まで入り、或は香港大學で交換教授として講義された方だそうで支那奥地の事情に就いては詳しく御承知なので我々西北方に意を注ぐ者の等しく興味を持つ生活、風習、言語、交通等についてお話を伺ふ事にした。

先づ晩餐會の席上では會員の質問に應じ種々奥地旅行の要點や苦勞を説明して頂いたが、講演會の席上では支那山岳全體の形貌及山林政策を簡述の後ありふれた奥地の紹介はやめて詩的、哲學的、佛教的に見た支那山岳について話をすると開き直られたのは意外であつたが講師用意の漢詩のプリントを配布の上支那に於ける山岳の紹介及觀賞法などを三名山（峨眉山、廬山、天臺山）に例をとつて講述され參會者一同珍らしいお話に興味を引かれ乍ら終り迄面白く拜聽出來た。引續いて會員よりの質問應答があつて九時半閉會。當日の參會者三十二名。

「山岳」投稿規定

一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず。
一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
一、原稿は返却せざるものとす。
一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
一、原稿にはその梗概を附せられたし。
一、紀行には概念圖を添付せられたし。
一、寫眞は光澤印畫紙に燒付けられ度、裏面或は別紙に說明記入を乞ふ。
一、校正は編輯者に一任せられたし。
一、地名及ひ外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿蒐集所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所

原稿用紙所用の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

昭和十四年十一月五日印刷
昭和十四年十一月拾日發行
〔定價金參圓〕

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル內
發行所 日本山岳會
電話芝一六四九番
振替口座東京四八二九番

東京市牛込區東五軒町三四
編輯兼發行者 藤島敏男
東京市芝區濱松町一ノ十三
印刷者 植田庄助

著作權所有

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXXIV 1939 No. 2.